落窪物語大成

二の巻

甲藩文庫

葭邨冬紘

根岸文庫

913.35
オ
2

落窪物語大成二の巻

駿河　中邨秋香　著

阿漕いかでこの御文奉らんと、握り持ちて「ヨキ透モヤト」思ひありくに、さらに部屋の戸あかず、佗しと思ふ。少將と帶刀とは、たゞ「落チ部屋ヨリ」偸み出でんたばかりをし給ふ。我故にかゝる目をも見るぞと思ふに、いとゞあはれにて、いかでこれ偸み出でゝ後に、北の方に心惑はすばかりに、ねたき目見せんと思ひいふ、ほと〱しふねく、心ふかくなんおはしける。」かのかたらひし少納言、交野の少將の「落ヘアテタル」文もてきたるに、かく「部屋ニ」こもりたれば、

〔第三五節〕

（一）少將と帶刀とは云々ぬすみいづとは、落を部屋より救ひ出すことをいふ、當時父母の許を得ずして其家の婦女をひそかにつれいだすをぬすみ出すといへり。△上文「ゐていで奉らん折を告げよ」の文と照らしみるべし、かねて落を救ひ出さん事をば相談せしかどます〱熱心に之を計畫するゝ、

△我故に云々　上文「とてもかくても、我故にかゝる事を云々」の文と對しみるべし、
△北の方に心惑はすばかりに云々　上文「今もはひ入りて、北の方をうち殺さばや」と照らしみるべし、さて此句及び、ほと〳〵しふねく云々の句、後文おもしろの駒の事をはじめ、三條の家の事に至るまで、あまたゝび北の方を懲じくるしむる伏線、
(二)しふねく　執念の字音をそのまゝ形容詞に活かしたるものにて、裝束の字音をさうぞかんと四段に活かしむる類之、執念深きにいふ、
(三)交野の少將の文云々　辨少將の事を世人は交野の少將と申す由上文にいへり、さるからにそれより以下辨少の事を打任せて交野の少將とはいへり、さてかの辨少將が御文や奉るべきといひしを少納言が今御覧ぜさせんといひし事上文に見ゆ、かの少納言、辨少の事をすでに落に話したる事故、やがて辨少の文を持ち來たりし之、
(四)少將の笛の袋　藏人少將の所持する笛の袋を縫ふべき事おこりたる之、これも舞人につきて用ゐるものなる事前に註せり、
(五)取りふれん云々　笛の袋を縫はんには、最精巧の技を要することとなるをもて、容易に

あさましう、口をしう哀にて、阿漕と、〔共ニ〕いかに思すらん、など、かゝる世ならんと、うちかたらひて、忍びて泣く。日の暮るゝまゝに、いかで奉らんと思ふ。〔藏人〕少將の笛の袋縫はする〔事アル〕に、〔手ニ〕取りふれ〔テ縫ハ〕ん人のおぼえぬまゝに、とみに〔誰アリテ〕手もふれぬほどに、もて煩ひて、北の方、部屋の遣戸をあけて、入りおはして「これ只今縫ひ給へ」といへば、「心地なんいとあしき」とて、臥したれば、「これ縫ひ給はずば、下部屋にやりて籠め奉らん。かやうの〔縫物スル〕事を申さんとて、こゝにはおき奉りたるにこそあれ」といへば、實にさもしてんと侘しくて、あれにもあらずくるしけれど、起きあがりて縫ふ。阿漕部屋の戸あきたりと見て、例の三郎君呼びて「いとうれしくの給ひしかばなん。これ北の方の見給はざらん間に奉り給へ、ゆめ〳〵氣色見え奉り給ふな」といへば、「よかなり」とて取りつ。往て、かたはらに居て、笛とりて見など遊び居て、衣の下に〔ソット文ヲ〕さし入れつ。いかで見んと思ふに、〔笛ノ〕袋縫ひはてゝ、〔北ハ藏人少ノ方ヘ〕見せに持て往きたるほどに、辛うじて見て、あはれと思ふ事かぎりなし。硯筆も〔側ニ〕なかりければ、あるまゝに針のさきして、たゞかく書きたり。

人しれず思ふこゝろもいはでさはつゆとはかなく消えぬべきかな

と、思ひ給ふるこそ、とて〔自身ニ〕もたり。北の方〔復ビ〕いまして、ありつる袋はいとよく縫

大日本圖書株式會社

應ずる人なきに依り、困却したるゑ、△こゝの文諸本異同あり、或は「取りふれんかたのおぼえぬまゝに」「人のなきまゝに」などあるあり「とみに」なきもあり「もてわつらひて」のなきものあり、竹取にも「誰ばかりおぼえんに」とありて誰モスル人ナシといふ意にいへれば今は之に從へり

（六）下部屋 此部屋も固よりみだりかはしき所なるに、下部屋といへば更に一層あさましき所なるを思はせていへるゑ、

（七）いと嬉しくの玉ひしかはなん、阿が三郎君にいふ詞、前に落の事をいとほしといひた

さゝんとすれば、「いかで、あなたに侍りし箱とりて〔持チ來レ〕と、阿漕に告げ侍らん」といへば、閉てさして、「あの櫛の箱得んとあめり」との給へば、惑ひもて來て、さし入るゝ〔ソノ〕手に〔文チ〕入れたれば、引き隱して立ちぬ。「辛うじて、御笛の袋縫はせ奉り給ふとて、あけ給へる間になん」と〔消息ニテ少ヘ〕いふ。少將、いとゞ哀と思へること限なし。」

暮れぬれば、典藥の助、いつしかと心げさうしありきて、阿漕が居たる所によりて、いと心つきなげに笑みて「阿漕は今は翁を思ひ給はんずらんな」といへば、阿漕いとむくつけく思ひて「などかさあるべき」といへば、「落窪の君をおのれに賜へれば、この御方の人にはあらずや」といふに、驚き惑ひて、ゆゝしく思ふに、涙

〔第三五節〕

（一）少將と帶刀とは云々 ぬすみいづとは、落を部屋より救ひ出すことをいふ、當時父母の許を得ずして其家の婦女をひそかにつれいだすをぬすみ出すといへり、△上文「ゐていで奉らん折を告げよ」の文と照らしみるべし、かねて落を救ひ出さん事をば相談せしかどます〳〵熱心に之を計畫するゑ、

落窪物語大成二の巻

駿河 中邨秋香 著

阿漕いかでこの御文奉らんと、握り持ちて〔ヨキ透モヤト〕思ひありくに、さらに部屋の戶あかず、佗しと思ふ。少將と帶刀とは、たゞ〔落チ部屋ヨリ〕偸み出でんたばかりをし給ふ。我故にかゝる目をも見るぞと思ふに、いとゞあはれにて、いかでこれ偸み出でゝ後に、北の方に心惑はすばかりに、ねたき目見せんと思ひいふ、ほと〳〵しふねく、心ふかくなんおはしける。」かのかたらひし少納言、交野の少將の〔落ヘアテタル〕文もてきたるに、かく〔部屋ニ〕こもりたれば、

△我故に云々　上文「とてもかくても、我故にかゝる事を云々」の文と對しみるべし、△北の方に心惑はすばかりに云々　上文「今もはひ入りて、北の方をうち殺さばやと照らしみるべし、さて此句及び、ほと〳〵志ふねく云々の句、後文おもしろの駒の事をはじめ、三條の家の事に至るまで、あまたゝび北の方を懲じくるしむる伏線、
（二）志ふねく　執念の字音をそのまゝ形容詞に活かしたるものにて、裝束の字音をさうそかんと四段に活かしむる類之、執念深きにいふ、
（三）交野の少將の文云

あさましう、口をしう哀にて、阿漕と、〔共ニ〕いかに思すらん、など、かゝる世ならんと、うちかたらひて、忍びて泣く。日の暮るゝまゝに、いかで奉らんと思ふ。〔藏人〕少將の笛の袋縫はする〔事アル〕に、〔誰アリテ〕手もふ〔手ニ〕取りふれ〔テ縫ハ〕ん人のおぼえぬまゝに、とみにあれぬほどに、もて煩ひて、北の方、部屋の遣戸をあけて、入りおはして「これ只今縫ひ給へ」といへば「心地なんいとあしき」とて、臥したれば「これ縫ひ給はずば、下部屋にやりて籠め奉らん。かやうの〔縫物スル〕事を申さんとて、こゝにはおりたるにこそあれ」といへば、實にさもしてんと侘しくて、あれにもあらずくるしけれど、起きあがりて縫ふ。阿漕部屋の戸あきたりと見て、例の三郎君呼びて「いとうれしくの給ひしかばなん。これ北の方の

々　辨少將の事を世人は交野の少將と申す由上文にいへり、さるからにそれより以下辨少の事を打任せて交野の少將とはいへり、さてかの辨少將が御文や奉るべきといひしを少納言が今御覽ぜさせんといひし事上文に見ゆ、かの少納言、辨少の事をすでに落に話したる事故、やがて辨少の文を持ち來たりし之、
（四）少將の笛の袋　藏人少將の所持する笛の袋を縫ふべき事おこりたる之、これも舞人につきて用あるものなる事前に註せり、
（五）取りふれん云々　笛の袋を縫はんには、最精巧の技を要することとなるをもて、容易に

見給はざらん間に奉り給へ、ゆめ〳〵氣色見え奉り給ふな」といへば「よかなり」とて取りつ。往て、かたはらに居て、笛とりて見など遊び居て、衣の下に〔ソツト文チ〕さし入れつ。いかで見んと思ふに、〔笛ノ〕袋縫ひはてゝ、〔北ハ藏人少ノ方ヘ〕見せに持て往きたるほどに、辛うじて見て、あはれと思ふ事かぎりなし。硯筆も〔側ニ〕なかりければ、あるまゝに針のさきして、たゞかく書きたり。

人しれず思ふこゝろもいはでさはつゆとはかなく消えぬべきかな

と、思ひ給ふるこそ、

とて〔自身ニ〕もたり。北の方〔復ビ〕いまして、ありつる袋はいとよく縫ひたりや。戸あけたりとて、おとゞさいなむとて、引きたてゝ鎖

應ずる人なきに依り、△こゝの文諸本異同あり、或は「取りふれんかたのおぼえぬまゝに」「人のなきまゝに」などあるあり「とみに」なきもあり「もてわつらひて」のなきものあり、竹取にも「誰ばかりおぼえんに」とありて誰モスル人ナシといふ意にいへれば今は之に從へり
(六)下部屋 此部屋も固よりみだりかはしき所なるに、下部屋といへば更に一層あさましき所なるを思はせていへるなり、
(七)いと嬉しくの玉ひしかはなん、阿が三郎君にいふ詞、前に落の事をいとほしといひた

さゝんとすれば「いかで、あなたに侍りし箱とりて持チ來レと、阿漕に告げ侍らん」といへば、閉てさして「あの櫛の箱得んとあめり」との給へば、惑ひもて來て、さし入るゝ手に入れたれば、引き隱して立ちぬ。辛うじて、御笛の袋縫はせ奉り給ふとて、「あけ給へる間になん」といふ。少將、いとゞ哀と思へること限なし。」

暮れぬれば、典藥の助、いつしかと心げさうしありきて、阿漕が居たる所によりて、いと心つきなげに笑みて「阿漕は今は翁を思ひ給はんずらんな」といへば、阿漕いとむくつけく思ひて「などかさあるべき」といへば、「落窪の君をおのれに賜へれば、この御方の人にはあらずや」といふに、驚き惑ひて、ゆゝしく思ふに、涙

[第三五節]
(一)少將と帶刀とは云々ぬすみいづとは、落を部屋より救ひ出すことをいふ、當時父母の許を得ずして其家の婦女をひそかにつれいだすをぬすみ出すといへり、△上文「ゐていで奉らん折を告げよ」の文と照らしみるべし、かねて落を救ひ出さん事をば相談せしかどます〳〵熱心に之を計畫するなり、

落窪物語大成二の巻

駿河 中邨秋香 著

阿漕いかでこの御文奉らんと、握り持ちて思ひありくに、さらに部屋の戸あかず、侘しと思ふ。少將と帶刀とは、たゞ偸み出でんたばかりをし給ふ。我故にかゝる目をも見るぞと思ふに、いとゞあはれにて、いかでこれ偸み出でゝ後に、北の方に心惑はすばかりに、ねたき目見せんと思ひいふ、ほと〳〵しふねく、心ふかくなんおはしける。」かのかたらひし少納言、交野の少將の文もてきたるに、かくこもりたれば、

△我故に云々　上文「とてもかくても、我故にかゝる事を云々」の文と對しみるべし、
△北の方に心惑はすばかりに云々　上文「今もはひ入りて、北の方をうち殺さばやと照らしみるべし、さて此句及び、ほと／＼ゐふぬく云々の句、後文おもしろの駒の事をはじめ、三條の家の事に至るまで、あまたゝび北の方を懲じくるしむる伏線、
(二)ゐふぬく　執念の字音をそのまゝ形容詞に活かしたるものにて、裝束の字音をさうぞかんと四段に活かしむる類之、執念深きにいふ、
(三)交野の少將の文云々　辨少將の事を世人は交野の少將と申す由上文にいへり、さるからにそれより以下辨少の事を打任せて交野の少將とはいへり、さてかの辨少將が御文や奉るべきといひしを少納言が今御覽ぜさせんといひし事上文に見ゆ、かの少納言、辨少の事をすでに落に話したる事故、やがて辨少の文を持ち來たりし之、
(四)少將の笛の袋　藏人少將の所持する笛の袋を縫ふべき事おこりたる之、これも舞人につきて用あるものなる事前に註せり、
(五)取りふれん云々　笛の袋を縫はんには、最精巧の技を要することとなるをもて、容易に

あさましう、口をしう哀にて、阿漕と、いかに思すらん、などかゝる世ならんと、うちかたらひて、忍びて泣く。日の暮るゝまゝに、いかで奉らんと思ふ。少將の笛の袋縫はするに、取りふれん人のおぼえぬまゝに、とみに手もふれぬほどに、もて煩ひて、北の方、部屋の遣戸をあけて、入りおはして「これ只今縫ひ給へ」といへば「心地なんいとあしき」とて、臥したれば「これ縫ひ給はずば、下部屋にやりて籠め奉らん。かやうの事を申さんとて、こゝにはおき奉りたるにこそあれ」といへば、實にさもしてんと侘しくて、あれにもあらずくるしけれど、起きあがりて縫ふ。阿漕部屋の戸あきたりと見て、例の三郎君呼びて「いとうれしくの給ひしかばなん。これ北の方の見給はざらん」とて、奉り給へ、ゆめ／＼氣色見え奉り給ふな」といへば「よかなり」とて取りつ。往て、かたはらに居て、笛とりて見など遊び居て、衣の下にさし入れつ。いかで見んと思ふに、袋縫ひはてゝ、見せに持て往きたるほどに、辛うじて見て、あはれと思ふ事かぎりなし。硯筆もなかりければ、あるまゝに針のさきして、たゞかく書きたり。

人しれず思ふこゝろもいはでさはつゆとはかなく消えぬべきかな

と、思ひ給ふるこそ、

とてもたり。北の方いまして、ありつる袋はいとよく縫ひたりや。戸あけたりとて、おとゞさいなむとて、引きたてゝ鎖

大日本圖書株式會社

應ずる人なきに依り、困却したる之、△こゝの文諸本異同あり、或は「取りふれんかたのおぼえぬまゝに」「人のなきまゝに」などあり、「とみに」なきもあり、「もてわつらひて」のなきものあり、竹取にも「誰ばかりおぼえんに」とありて誰モスル人ナシといふ意にいへれば今は之に從へり

(六)下部屋　此部屋も固よりみだりかはしき所なるに、下部屋といへば更に一層あさましき所なるを思はせていへる之、

(七)いと嬉しくの玉ひしかはなん、阿が三郎君にいふ詞、前に落の事をいとほしといひたる事によりていへる之、それにつきて又いふとのとを意外に含めたり

(八)いきて傍に居て笛の袋縫ふ程は、北の方部屋の中に在るをもて鎖もおろさず、故に三郎君落の傍に往きて何げなく遊びをる樣にて落の衣の下に文を入るゝ之、

(九)袋ぬひはてゝ云々　袋縫ふ程は北の方落のところにあり、さて縫あがりたるをもて、これにてよきや否やを問はんために藏人少將のところに持ちゆく之、

(一〇)人しれず　さまぐ〜に思ひつゞくる心中の事どもは誰にも漏らすべきにあらず、唯

さゝんとすれば、「いかで、あなたに侍りし箱とりて〔持チ來レ〕」と、阿漕に告げ侍らん」といへば、閉てさして、「あの櫛の箱得んとあめり」との給へば、惑ひもて來て、さし入るゝ〔ソノ〕手に〔文ヲ〕入れたれば、引き隱して立ちぬ。「辛うじて、御笛の袋縫はせ奉り給ふとて、あけ給へる間になん」と〔消息ニテ少ヘ〕いふ。少將、いとゞ哀と思へること限なし。」

暮れぬれば、典藥の助、いつしかと心げさうしありきて、阿漕が居たる所によりて、いと心つきなげに笑みて「阿漕は今は翁を思ひ給はんずらんな」といへば、阿漕いとむくつけく思ひて「などかさあるべき」といへば、「落窪の君をおのれに賜へれば、この御方の人にはあらずや」といふに、驚き惑ひて、ゆゝしく思ふに、涙もつゝみあへず出づれどつれなくもてなして、「男君おはせで、徒然なりつるに、たのもしの御事や。さてもおとゞのゆるし聞え給へるか、北の方のの給ふか」といへば、「おとゞの君もめぐみ給ふ、あが北の方はまして」と、いとうれしとおもへり。阿漕萬の事よりも、〔此ヿヲ〕いかさまにせん、いかで、かくとだに告げ奉らんと思ふに、靜心なくて「さて〔ソレハ〕いつか」といへば、「今宵ぞかし」といふ「今日は御忌日なるものを、何かうけがひ給はん」といへば、「されど人もたまへるなれば、あやふし、疾くなん」といひて〔ソコヲ〕立ちぬ。阿漕、佗しき事かぎりなし。北の方、〔ガ〕殿の御臺參るほどに、這ひよりてうち叩く。「誰そ」といへば、「かうかうの事侍るなり。さる用意せさせ給ひて、御忌日となん申しつる。いみじくこそ侍れ。

君にのみ語らひ申すべき事なるに、今のさまにてはそれを語らふ事もなく、いたづらにはかなく身まかる事ならんか、さて〳〵悲しき事よとなり、
（一一）とてもたりかく針の先にて記し、さて何かの隙によりて阿漕にわたさんとて持ち居るなり、
（一二）ぬひたりややは感歎のやにて問かけのやにはあらず、ぬひたりといふに同じ、
（一三）或ひもて來て云々　阿漕は急ぎてあわたゞしく櫛箱を持來りて落に渡す途端に、落はかねて手に持ち居たる文を阿漕に渡せば、阿漕はそれと心得て引

いかゞせさせ給はん」ともえいひやらで立ちぬ。女君、聞くに胸つぶれて、さらにせんかたなし。さき〴〵思ひつる事、〔ト〕物にもあらずおぼえて、佗しきに、迯げかくるべきかたはなし。いかで只今死なんとおもひ入るに、胸いたければおさへて、うつぶしふして、泣く事いみじ。火などともしてければ、おとゞは、夕まどひし給ひて、臥し給ひぬ。北の方は、かの典藥の助の事により、起いまして、部屋の〔鎖ハヅシ〕戸引き開けて見たまふに、うつぶしふして、いみじく泣く。「いといたしや、などかくはの給ふぞ」といへば、「胸のいたく侍れば」と、息の下にいふ。「あないとほし。物の積かとよ、典藥のぬし醫師なり。かいさぐらせ給へ」といふに、類ひなくにくし。「何か、風にこそ侍らめ。くすし入るべき心地しはべら

隱して握り取りて其場を去るなり、
△これらの事簡單の筆もて急遽匆忙の間に授受するさまをこまかに言ひあらはすところ翫ぶべし、さて又これにて阿漕が北の方の勘氣をゆるされたる事を知らせたり、上文「しばしねんぜよ、今よく申す」の句と照しみるべし、
（一四）いつしかと心げさうし「いつしかと」の詞は三三の一〇にいへり心げさうは心の艶だち色氣つきてかきつくろふことと
（一五）むくつけし　荒々しくてひなびたるにも、さびしくものすごきにも、又氣味わろき

ず」といへば、「さりとも胸は、いとおそろしきものを」といふ程に、典藥さわたれば、「こちいませ」と呼び給へば、ふとよりたり。「こゝに胸〔チ〕惱給ふめり。物の積かと、かいさぐり、藥などもまゐらせ給へ」とて、やがて預けて立ちぬれば、「醫師なり、御病もふとやめ奉りてん、今宵よりは、一向に〔我チ〕あひ頼み給へ」とて胸かいさぐりて、手〔チ落ニ〕ふるれば、女おどろ〳〵しう泣きまどへど、制すべき人もなし。こしらへかねて、せめて佗しきまゝに、思ひてなく〳〵「いとたのもしき事なれど、只今更に物なんおぼえぬ」と答ふれば、「さや、などてかおぼすらん。今は御代に翁こそ病め」とて、抱へて居り。北の方は、典藥〔ガコヽニ〕ありと思ひ頼みて、例のやうに、〔戸ノ〕鎖などもさしかためで寐にけり」。

にもさま〴〵にいへり、こゝは氣味わろき意なり、典藥が突然阿漕は今は翁を思ふらんなど、わからぬ事をいへばなり、さるからになどか然らんとは答ふるなり、
(一六)ゆゝし　もと齋々しにて清淨潔白にする狀より轉して物を忌みさくる狀にもいひ、忌み憎むにもいひ又轉じて甚しき事にもいひ、勇ましき事、强き事にもいふ事となりて勇々しなどいふ字をさへ充つることゝなれり、こゝは忌みにくむさまなり、
(一七)つれなくもてなして　つれなくはすべて同情なくして事に感ぜぬやうなるさまにいふ「つれなき松に時雨ふるなり」などいふも他の木は時雨にあへば紅葉するに松は一向に、感ぜぬさまといふなり、こゝは、そしらぬ顏をつくるさまにいへるなり、一二の一五にもいひおけり
(一八)今日は御忌日なるものを云々　忌日とは齋戒して忌みつゝしむ日をいふ、二四の二四見合、うけがふとは許諾の事、かくいひなしてさしあたり今夜をのがれんと計るなり、
(一九)這ひよりて　這ふは、すべて近距離の間をあるき行くにいへる詞にて、例いと多し、今の世にいふ手足にて這ふ事にはあらず、此手足にて行くも遠距離には行きがたきものなるより這ふとはいへるなり
(二〇)さる用意を云々　然る用意にて、即ちそれに係る用意をおさせ申しての意、○胸つぶれては胸が騷ぎて氣のもめること三三の六にいへり、
(二一)夕まどひ　宵まどひといふに同じ、宵より居ねぶりすること老人のさまなり、此語は宵まどろみ寢の約轉にて、假名ももといなるべく思はる、
(二二)息の下にいふ　苦みながら言ふさま、今もいへる語なり、
(二三)物のつみ　食滯の事にいふ、辭書などに癪の事とするは非なり、うつぼ國讓「これは何のつみにてある御心地にもあらず」同「さきにはかくもの玉はざりしを、ものゝつみなどにやとの玉へば」いづれも食滯の事なり、
(二四)典藥のぬし醫師なり　典藥助は典藥寮の次官にして大方醫師より任ずるものなり、されば醫師なりとはいへり、
(二五)類ひなくにくし　落の心なり、かねて阿漕にきゝおきつれば也

(二六)さ渡れば　さは添附聲音にて、○さ寢る、○さ走る、○さ離る、○さ挾るの類にて渡るといふに無意義に添へるものみ、渡るは來るなり、添附聲音の事は皇國文法釋義にいひおけり、
(二七)おどろ〳〵しう　俗に「オソロシク」又は「仰山に」「シタヽカニ」などいふほどの意、
(二八)こしらへかねて　こしらふとはすべて扱ひすかしてなだむるやうの意に用ふ、これより轉じて構へ造る意にも用ふ、こしらへかねては扱ひすかしかぬるをいふ、
(二九)さやなどてか云々　然や何故さは思すらんといふこと、
△北の方は典藥ありと思ひて　上文やがて預けての句に照しみるべし、

〔第三六節〕
(一)阿漕典藥や云々　阿漕は典藥の事心にかゝれども、北の方に憚りて來る事叶はざりしが、今寐たるに依りて急ぎ來るなり、或ひ來ては急ぎあわてゝ來るなり、此ものからといふ詞には二種あり、「モノナガラ」の意なると「モノデアルカラ」の意なるとなり、今の世にては「モノデアルカラ」即ち「モノヨリ」の意にのみ用ふれども、古くは多

阿漕、典藥や〔部屋ニ〕入りぬらんと、惑ひ來て見るに、〔部屋ノ〕遣戶細目にあきたり。胸つぶるゝものから、嬉しくて、〔戶ヲ〕引きあけて入りたれば、典藥かゞまりをり。〔果シテ〕入りてけりと、人心ちもなくて、「今日は御忌日と申しつるものを、心憂くも入り給ひにけるかな」といへば、「何か左樣ニ咎ムベキ句、ちか〴〵しくあらばこそあらめ。御胸まじなへと、うへの預け奉り給ひつるなり」とて、まだ裝束も解かで居り。君はいといたう惱み給ふにそへて、泣き給ふこ

く「モノナガラ」の意に用ふ、此物語に用ふるものすべて此意之、こは前にいはざりしかばこゝに註せり、△これらの事細かに書き記さず、語勢と情とに依りて示すところ筆意最も味ふべし、さて又前にくるゝ戸の二間あるとありて、こゝに遣戸とあり、即ちくるゝ戸ありて、其内に更に遣戸あるを知るべし、

(二)何かちか〳〵しく云々　何かにて句を切りてみるべし、何か志か咎むべきとの意之、ちか〳〵しは落にちかづきなるゝをいふ、ちかづきなれたらばこそ、咎むべけれ、ちかつかぬからは咎むべきにあらずとの、

と限なし。阿漕、とりわきて、などしも物をかくいみじく思して、か丶らばいかゞなるべきにかと思ひて、心細くかなし。「御燒石あてさせ、給はんや」と聞ゆれば「よかなり」との給へば、阿漕、典藥に「ぬしをこそ今は頼み聞えめ。御燒石覔めて奉り給へ。皆人も寐靜まりて、阿漕がいはんに、よもとらせじ。これてにこそ、〔主ノ〕志のありなし見えはじめ給はめ」といへば、典藥うち笑ひて、「さなり、殘の齡少く〔衰ヘタリ〕とも、一すぢに〔我ナ〕頼み給はば仕うまつらん。石山をも動サンと思へば、まして燒石はいとやすし。思ひにさし燒きてん」といへば「同じくは疾く」とせめられて、いかゞはせんは、いりたちたるやうなれど、いとやすし。心ざし情を見えんと、石求めんとて立ちぬ。阿漕「この年ごろいみじく侍

(三)まじなへ　咒はもと神佛の力によりて事物をわたさんことを請ふより轉じて病を治する事にもいへる之、こゝは介抱せよといふ意に用ひたり、

△まだ裝束も云々　その褻れちかづかざりしをあらはす語、

(四)惱み玉ふにそへて　惱み玉ふと共にの意にて、惱み玉ふと同時になり、此「そへて」は「日にそへて」のそへに同じ、二の二にくはしくいひおけり、

(五)阿漕とりわきて云々　阿漕の心中之、とりわきて云々は、落の狀別に憂き事のみを重ねて、思をいたむるを物を思すといへる之、扨何故にかく特別なる

りつる事の中に、〔此タビノ事ハ〕侘しくもいみじくこそ侍りけれ。いかゞせさせ給はんずる。〔前世ニ〕何の罪にてか丶る〔甚シキウキ〕目を見給ふらん。さても〔後世ニ〕何の身にならんとて〔北ノ方ハ〕か丶るわざをし給ふらん」といへば、君「更になん物も覺えぬ。今まで死なぬ事の心憂き。心地はいとあし。この翁の近づき來るに、いと侘しき。その遣戸かけ籠めて、な入れそ」との給へば「さては〔典ガ〕はらだちなん。猶なごめさせおはしませ。〔外ニ〕頼む方のあ〔ル〕ナ〕らばこそ、〔腹立ツニモカマハズ〕今宵は閉て籠めて、明日はその人にい〔ヒテカ添ナモ〕はんとても思ひ侍らめ。少將の君、歎きわび給へども、いかでかは、只今あたりにだにおはしよらん事かたくなん。御心のうちにも、佛神を念ぜさせ給へ」といへば、君實に頼むかたなく、はらか

物思をする事ならん、かくの如くならば終には身も堪へずして不慮の事もあらんかと心配するゝ
(六)焼石　石を焼きて箱に入れ包みて胸、腹、腰などを温むるもの、温石の事、今の懐爐灰の類なり、大鏡「冬はもちひのいと大きなるをば一つ小さきを二つやきいしの様に御身にあてゝもち給へりけるに云々」
(七)さなゝり云々　さなゝりは、然なるなりのるの省かりたる辭、殘の齡云々は、老衰せるをいふ、老衰の身といへども、一向に便とし玉はゞ十分の力を盡さん、岩山をも動かす

らとても相思ひたる事なく、はしたなげにのみあれば、その人といふべき事も覺えず。いみじう悲しくて、唯頼む事とては、涙と阿漕、とぞ、心にかなひたるものにて、「更にこゝに今宵はあれ」とて、誰も〳〵なく程に、翁、焼石つゝみてもて來たるを、女わびて、手づから取る心ち、おそろしう佗しくおぼゆ。翁装束ときてふして〔落チ我ガ方ヘ〕かきよすれば、女「あが君、かくなし給ひそ。いみじく痛きほどは、おきておさへたるなん、少しやすまる心ちする。後〔ノ事〕をおぼさば、今宵はたゞに臥し給へれ」といふ。いとわびしくて、いたう惱む、阿漕「今宵ばかりにてこそあれ。御忌日なれば、なほたゞに臥し給へれ」といへば、さもある事とや思ひけん。「さらばこれによりかゝり給へ。」とて、前によりふせば、わび〳〵

べしと思ふ程なれば、焼石は容易の事と之、△一すぢに頼み玉はゞ」の句、上の「一向に頼み玉へ」と照らしみるべし、
(八)思ひにさしやきてん、思ひのひに火を云ひかけ、焼石の名に依りて火にやくといへり、△これらの語若人ならばこそあらめ、六十の老人にしていふべきにあらず、にが〳〵しきさまをあらはす、
(九)入りたちたるやうなれど　落の爲に焼石を求るはあまりに立入り過ぎたるやうなれど、せんかたなしと之、「いかゞはせんは」の句は「いりたちたるやう

おしかへりて泣き居たり。阿漕もいとにくけれど、〔シカシ又〕嬉しき翁の徳に、御あたりに今宵参りたる事と思ふ。ほどなく寐入りてくづち臥せり。女、少將の君のけはひ思ひ合せられて、いとゞあひなくにくし。阿漕いかにして〔落チ伴ヒテ〕出でなんのはかりごとをす。翁のうち驚く時は、いといたく苦しがり惱み給へば、「あないとほし。翁の侍る夜しも、かうやみ給ふがわびしさ」とて、又寐入りぬ。明けぬればいとうれしと、誰も〳〵おもふ。〔阿漕〕翁をつきおどろかして「いとあかくなりぬ。〔コヽチ〕出で給ひね。しばしは〔夫婦ト〕人にしらせじ。長くと思ひ給はゞの給はん事にしたがひ給へ」といへば、「さかし、我もさ思ふ」とて、〔マダ手足ラズ〕ねぶたかりければ、目くそ閉ぢあひたる〔目チ〕拂ひあけて、腰はうちかゞまりて

なれど」の後につけてみるべし、
(一〇)何の罪にて云々 落につきていふ、前世にいかなる罪をつくり置きて、かゝるうきめに遇ひ玉ふ事なるかと之、佛敎に現世の吉凶禍福は前世の宿業に因るといへば之、さても何の身にとは、北の方に就きていふ、此現世に於てかゝる罪をつくらば、來世必其惡報をうくべきをいふ、是亦佛敎によりていへる之、△此いひかた面白し、味ふべし、
(一一)猶なごめさせ給へ なごめは和の字を訓す、腹立たせずしてすかし和らげよと之、これを勿詭(なこ)めそとの意

〔此部屋ヲ〕出でていぬ。」

阿漕遣戸ひきたてゝ、こゝに〔昨夜〕在りけりと〔北ノ方ニ〕見え奉らじと思ひて、急ぎて、曹司(さうし)に往(い)きたれば、帶刀が〔處ヨリ〕文あり。見れば、わ辛うじて(昨夜ヤツトノヿデアガリシカドモ)參りたりしかど、御門(みかど)さして(閉チテ)更に(一向ニ)あけざりしかば、わびしくてなん〔空シクコナタニ〕歸りまうで來にしなり。おろかにぞ(心アサシト)おぼすらん。少將の君の〔此度ノ事ヲ〕おぼしたる(心配ナサルル樣子ヲ見申スニ)氣色を見侍るに、心のいとまなくなん(氣ヅカハシクテタマラヌ)。これは〔少ヨリ落ヘノ〕御文なり。いかで(ドウゾ)、よさ(今夜ニ)りだに參らん(デモアガリタイ)。」

といへり。〔コノ〕御文奉らん、よき間(ひま)なりといそぎ往きて見れば、北の方部屋〔ニ鎖ヲ〕(ステニ)さし給ふ。あなくちをし(ア、殘念ナリト)と思ひて、〔曹司ヘ〕かへる道に、〔テ〕典藥ゆきあひて、〔落ヘノ〕文をくれたるを、〔幸ノヿト〕取りて、

とするはわろし、もしさらば、末を「おはしましそ」といふべきは此頃の文躰之、
(一二)いかでかは 句を切りて心得べし、いかでかは其事叶はん、それのみならず、只今御あたりにだに云々との意之、さてかたくなん」の下に、されば佛神に祈請するの外なしといふとおのづからこもりて、さて御心のうちにも云々といへり、
△はらからといへども云々 前文「さるべき人もことに眞心なるけしきもみえぬに」又は「御はらからの君達さへみづから聞え給はざめること」云々」などいふ句に照らしみるべ

はしりかへりて、北の方に「〔阿〕こゝに典藥のぬしの文あり。いかで(ドウカサシ)奉らん(上ゲタイ)」といへば、北の方うちゑみて、「〔北〕こゝち問ひ給へるか(氣分ヲタヅテラルヽカ)、いと(至極ヨ)よし(ロシイ)。まめやかに(眞實ニ)相思ひたるぞよき(思ヒアウタガヨイ)」とて、〔鎖ヲ〕さしかためし戸口をひきあけたれば、〔心中ニ〕いとをかしうて、〔典ノ文ニ〕少將の君の文、とりそへてさし入れたり。〔落〕少將の君の文見給へば、

いかゞ〔デアル〕日のかさなるまゝに(ニ隨テ)、いみじく(甚シク戀シ)なん。

君がうへ思ひやりつゝなげくとはぬるゝ袖こそまづは知りけ
れ

いかにすべき世にかあらん(ドウシタナラバヨキ事デアルベキ)。

とあり。〔落〕女いとあはれと思ふ事かぎりなし。

おぼしやるだに(我事ヲ思ヒヤリ下サルデサヘ)さあんなり(サヤウニアルナリ)。

し、(一三)はしたなげにのみ　はしたなしのはしたは、もとどちらにもつかず中間との意、さればはした者といふも、もと上の人にもあらず又むげの下人にもあらず、中間の人をいへるが、轉じて下賤の者にいふ事となりし之、九の十四見合、さてそのはしたを活かして「はしたなし」といふ、なしはせはしなし、頼みがたなし、いとけなし、などいふなにて、そへていふ辭、無しの意にてはあらず、されば「はしたなし」は中間にしてどちらつかず、たづきなきさまを形容する詞にて、ツキ

なげくことひまなく落つる涙川うき身ながらもあるぞかなしき

と書きて、翁の文見ん事のゆかしうて、「阿漕返事せよ」と書きつけて〔少ヘノ文ト共ニ〕さし出でたれば、ふと取りて立ちぬ。阿漕、翁の文を見れば、

いとも〳〵いとほしう、夜一夜なやませ給ひける事をなん、翁の物のあしきこゝちし侍る。あが君〳〵、夜さりだにうれしきめ見せ給へ。御あたりにだに近くさぶらはゞ、命のびて、心ちもわかくなり侍りぬべし。あが君〳〵

老木ぞと人は見るともいかでなほ花さきいでゝきみに見なれん

ホナシ、タヅキナシ、ナサケナシ、轉じては甚し、キマリワロシ、アラヽシ、品格ナシ、などいふ意にも用ふ、こゝはナサケナシといふにちかく不實なる事にいへり　(一四)唯たのむ事とては云々　たのむはこゝにては、力とするといふ意にいへり、涙はうしと思ふ時常にこぼれて、せめてはわが情をやらしむるに足るよりいふ、(一五)手づから　典藥が持ち來るを、直ちに自身の手をもて受とるをいふ即ち手渡し之、(一六)いと侘しくて云々　即ち甚しく惱むさまを裝ふ之、

なほ〳〵な憎ませ給ひそ、

といへり。阿漕いとあいなしと思ふ〳〵〔返事ナ〕かく、

いとなやましうせさせ給ひて、御みづからは得聞えたまはず。

枯れはてゝ今はかぎりの老木にはいつかうれしき花は咲くべき

とかきて、〔モシ〕腹立ちやせんと、おそろしけれど、おぼゆるまゝにとらせたれば、翁〔何カハシラズ〕うちゑみて取りつ。帶刀が〔文ノ〕かへりごとかく、

夜べはこゝにも、いふ方なき事を聞えてだになぐさめばやと思ひ聞えしに、〔御出ナケレバ〕かひなくてなん、御文からうじてなん、

［アゲマシタ］いといみじき事どももいできて（極メテヒドイ事ドモガオコリテ）［甚心配イタス］句、
たいめんになん、」（委シクハオメニカヽリテ）
とてやりつ。」

(一七)今宵ばかりにこそ云々　謂はゆる一時のがれにかくいひなすと、

△これらのところ阿漕は　御忌日といふ事をかさねていひ、落は一言も之をいはず只病にことよするさまをみる、これ落のあからさまにも跡なき事をいふを好まざる人柄なるをあらはすところ、

△わび／＼おしかゝりて　即ち上文阿漕がいへる、猶なだめさせ玉への言に從ふところ、

(一八)嬉しき翁の德に云々　德とは其故によりてといふ意、典の容躰有樣はいと憎けれど、それがこゝに入居る故に我身も今夜こゝに來り在る事を得たるが嬉しと之、

(一九)くづち臥せり　正躰なく倒れ臥すをいふ、正躰なくグタリとせしと之、癲痫の事を俗にくづちといふ由沙石集にいへるも、其正躰なく倒るゝさまよりおこりたる名之、

(二〇)けはひ　景色、または樣子有さまにいふ、人のさまには勿論山水、又は事柄などの上にもいへり、

(二一)あひなく憎し　あひなくは一向に、又はヒタスラニの意なること一三の一にいへり、愛なくにはあらず、

△女少將のけはひ云々阿漕いかにして云々　典藥前に寢て在れば、眠りてはあれども、互にものいふべきにもあらず、されば落は少將のさまと引くらべて思ひ、阿は又落を救ひ出さん事を思ひ、互に無言にして、寂然たるさま、文字外にみえたり、前の雨夜に少將と帶刀とが互に無言なるさまを書きあらはしたると文躰異にして、各そのさまを知らしむる所は同じ、尤翫味すべし、

(二二)翁の打驚く時は　驚くは目のさむるをいふ、上文「北の方ふと驚きて」とある驚くに同じ、△此數句典の眠れる程は別に惱む事なき意を示す、

△ねぶたかりければ「翁をつきおどろかして」の句と對し見るべし、目くそ云々、滑稽の狀態まのあたりみるが如し、

(二三)辛うじて云々　帶刀、少將の車の尻にのりて、行きし事は、前にみえたり、されば常は少將の方即ち母の家に在りて、夜のみ阿漕のもとに通ふ之、

(二四)おろかに　おろそかなりとの意にて、帶のこゝろざしおろそかなりと思はるゝなるべしと之

(二五)御文奉らん云々　帶より送りこしたる少の文を、今阿は歸り來しばかりにて、部屋のあたりはまだたゝねば、よき隙なりと急ぎ行く之、

(二六)典藥ゆきあひて云々　阿漕曹司へかへらんとする道にて典藥にであひたるに、典は落にあてたる文を阿に渡したる之、實事はなけれど後朝の文の心にて、文をおくりし之

(二七)はしり歸りて　曹司へ歸る道より引かへして北の方の方に至る之、此典の文に添へて少の文を落に渡さんと思ふによりてなり

(二八)君がうへ　君の身上を思ひやりつゝ我が斯くの如く歎くといふ事は、先第一番に此濡るゝ袖が知る事にてあらんといふにて涙にくれて歎き思ふ意をしらせたり、

(二九)いかにすべき世　世とは男女の間柄の事、又は我が身世上の事、或は事物の上の事などに廣く輕く用ふる辭こゝは事といふ程の意に用ひたり二五の一六見合

(三〇)おぼしやるだに云々　落返事之、君がうへ思ひやりつゝとある歌をうけていへり、我が上を思ひやるその玉ふ君が袖だにも左樣にぬるゝよしの玉へば、まして我はと之さて歌につゞけてみるべし、なげくことひまなく　歎く事多くして、隙なしといふを、間斷なく落つる涙とかけ、さて涙を涙川とかけ、川といふより浮きとうけて憂身にかけ、憂身の死にもやらで存命してあるが悲しき事よといへる之、

△と書きて　上文「硯筆もなかりければ針のさきして」とありてこゝには「と書きて」とあり、即ちかの櫛の箱と共に硯箱をも持來りしを示す、

(三一)翁の文云々　典藥の文は見るも忌はしく、厭はしければ開きも見ず阿漕へ渡す之、ゆゝしは三五の一六にいひおけり

(三二)物のあしき　運命拙しといふこと、二〇の一一にいへり、

(三三)夜さりだに云々　今夜にても我に情を達せしめ玉へと之、前後に吾君ゝゝと重ねていへるは、其懇請

の情の切なるをあらはす之、

老木ぞと よしや老衰せりと人は見るともいかにもして猶少壯の者とかはることなくて君と夫婦とならんとの事を老木の花さくにたとへていへり

(三四)枯れはてゝ 全く老衰して今はほと〳〵死ぬべき程の老躰は、いつの時か盛に若かへる事あるべきといふを かけ歌の詞によりて老木といひ花といふにてつゞけし之、

(三五)おぼゆるまゝにとらせ 心に思ふまゝを其まゝつくろはず書きて典に渡したるをいふ、かく簡古にいふ古文の常之、

(三六)いといみじき事ども 即ち北の方の落を典にあたへんとする事をいへる之、いできてにて句を切りてみるべし、いできていかにせんと佗び惑ひ居るよしを含め、さて委曲は對面にといへる之、

〔第三十七節〕

(一)ありしやうにも云々 祭見の用意などにて北の方いそがはしければ之、

△これにて監督もやゝゆるみ、今夜締りを立てゝ典藥の入るを防がんことを落と阿と言合するを得たるさまを示す、

(二)暮れゆくまゝに云々 落心之、阿と云合せて戸の締りして明け

北の方は、〔落チ〕典藥に預けつと思ひて、ありしやうにも、遣戸〔ノ鎖チ〕さしかためさせねば、阿漕うれしと思ふ。〔日ノ〕暮れゆくまゝに、〔シマリチ〕いかにせんと思ひわぶ。〔戸チ〕内ざしにさしこもらんと思ひて、よろづにあくまじきやうにかまふ。翁、阿漕に「いかにぞ、御心地は」といへば「いみじくなんなやみ給ふ」といへば「いかにおはせんずらん」と、我ものがほにうち歎くを、愛敬なしと見る。「明

さすまじと定め、さて其締りをばいかゞせん、阿は外より締をなすべけれど、我は又内よりさしかためんと思ふ之、

(三)明日の臨時の祭 賀茂臨時祭は十一月下酉なること前にいへり、さて藏人少將俄に其舞人にさゝれたるよし一の巻にあり、されば藏人少將舞人にて明日は祭の行列の人にて通行すれば、其さまを三の君に見物させんと之、

(四)北の方はねきりをる はねきるは萬葉九に鴫ぞはねきるとありて鳥の羽たゝきしてふるふをいふ、それを事の準備にいそがはしくあがき働くさまによそ

日の〔賀茂ノ〕臨時の祭、三の君に見せ奉らん。藏人の少將のわたり給ふを」と、北の方ははねきりをるを、阿漕聞きて、いとうれしきひまあるべかめりと、胸うちさわぎて思ふ。今宵だにのがれ給ひなばとおもひて、遣戸の後さすべき物もとめて、脇にはさみてありく。御燈臺まゐれなど、云ふまぎれに〔部屋ニ〕這ひよりて、遣戸の方の樋にそへて、えさぐらすまじくさしてさりぬ。内なる君は、〔サシカタメカチ〕いかにせんとおもひて大なる杉唐櫃の有りけるを、〔ミヅカラ〕後をかき〔オシ來〕て、遣戸口に置きて、とかうしておさへ、わなゝき居て、〔心ノ内ニ〕これあけさせ給ふなと〔神佛ニ〕願をたつ。北の方、鑰を典藥にとらせて「人の寢しづまりたらん時に入り給へ」とて、寢給ひぬ。皆人々〔寐〕しづまりぬるをりに、典藥鑰を取りて來て、

へていへるなり

（五）うれしきひま　即ち落を部屋より救ひ出さん機會となり

（六）遣戸のしりさすべき云々　即ち今俗にいふシンバリをかひておけざらしめんとするなり、やう〳〵日暮近くになりゆくをもて、シンバリとすべき木を求め得て脇ばさみて隙を伺ひあるく也、

（七）遣戸のかたの樋　樋は鴨居敷居に設けたるもの、今いふミゾなり、遣戸の方とあれば、是は一筋ミゾにて戸尻と根とに間にシンバリをかふなり、えさぐらずまじくといへば鴨居にそへてかひしなるべし、

〔鎖ナ〕さし〔オロシ〕たる戸あく。〔落此音ナキ、テ〕いかならんと胸つぶる。鎖あけて、遣戸あくるに、いとかたければ、立ち居ひろ〻ぐほどに、阿漕聞きて、すこし遠がくれて〔樣子ナ〕見〔テ〕たてるに、〔典ハ頻ニ〕さぐりにさぐれど、〔シンバリナ〕さしたる程をさぐりあてず「あやし〳〵戸〔ナ〕内にさし〔カタメ〕たるか、翁をかく苦しめ給ふにこそありけれ。人も皆〔我ニ〕ゆるし給へる御身なれば、えのがれ給ふまじものを」といへど、誰かはいらへん。打ち叩き押し引けど、内外に〔テ〕つめてければ、ゆるぎだにせず。いかにや〳〵と、夜更くるまで板〔敷〕のうへに居て、冬の夜なれば、〔寒クテ〕身もすくむ心ちす。そのころ腹〔具合〕そこなひたるうへに、〔今夜キテ居シ〕衣いとうすし。板〔敷〕の冷えのぼりて、腹こほ〳〵となれば、翁「あなさがな、ひえこそ過ぎに

（八）大いなる杉唐櫃云々　杉にて造りたる唐櫃の大なるもの、唐櫃とは長持の如きもの今「カラウト」といへるは即唐櫃の音轉なり、此部屋は即ち今いふ物置なればかゝるもの入おけるなり、それが後の方をおして戸におしよせ之をかひて明くる事を得ざらしむるなり、わなゝきは戰慄にて怖れふるへる狀、婦女子のさまみるが如し、△これ明けさせ給ふなと願をたつ、上の「佛神を念ぜさせ玉へ」の句と對しみるべし、

（九）立居ひろ〻ぐ　ひろ〻ぐは、ひろめくと同語ヒヨロ〳〵シテウロックさま、その明け

けれ」といふに、しひてこほめきてひち〳〵ときこゆるはいかなるにかあらんとうたがはし。〔尻ナ〕かいさぐりて、〔ナガレ〕出でやするとて、尻をかゝへて、惑ひ出づる心ちに〔戸ロニ〕鎖をついさして、鑰をば取りていぬ。阿漕、鑰をおかずなりぬるよと、あひなくにくく思へど、〔戸ガ〕あかずなりぬるが、かぎりなく嬉しくて遣戸のもとによりて「ひりかけていぬれば、よもまうでこじ、おほとのごもりね。曹司に帶刀まうで來たなるを、君の御返事も、聞え侍らん」といひかけて、下におりぬ。帶刀「など今まではおり給はぬぞ、世の中いかゞあるぞ、まだ〔部屋ヨリ〕出し奉らずや。いみじくこそおぼつかなけれ。君のおぼしなげく事、いみじくなん。『夜など密に偸み出で奉りぬべしや。その事あないして來』との給はせつる」と

んとして或は立ち、或は屈みてヒョロ〳〵ウロックをいふ、
（一〇）人も皆ゆるし云々　中納言も北の方も皆共に我に與へられたる事なれば、決して咎かれ得べきに非るべきものを、おろかなる事と之
△典藥鑰を取りて來て以下典藥戸を開かんとするさま、落の此樣をきゝて怖るゝさま、阿が心配して密に伺ふさま、典が百方手を盡してあけんとするさま、ゑがき出してまのあたり見るが如し、是畢竟句法語勢によりて然らしむるもの、味ふべし、
（一一）冬の夜なれば云

いへば「更にいとこそいみじけれ。日に一度なん御臺まゐりに、あけ給ふ。かくてかまふるやうは、北の方の御をぢにて、いみじき翁のあるになん、〔ソレニ〕あはせ奉らんとて、今宵も〔其老人ニ〕部屋に入れとて、鑰をとらせ給へれど、内外にしかぐ〳〵〔ツメ〕かためたれば、立ち居ひろろぎてあけ〔シトシ〕つるに、冷えて、かうかうしていぬ。君はこの事聞き給ひしより、御胸をなん、いみじくやみ給ひにし」と泣きつゝいふ。帶刀、いみじき事にあはせて、〔カノ〕ひりかけの程をえねんぜで笑ふ。「いつしか〔落チ〕偸み出で奉りて、この北の方の答せんとなん、君はの給ふ」といへば、「明日〔賀茂臨時ノ〕祭見に出で給ひぬべかめり。その間におはしませ」といへば、帶刀「いとうれしきひまにもあなるかな。いつしか夜も明けなん」と。心も

々　賀茂臨時祭に對しみるべし、
（一二）腹こほ〳〵と　こほ〳〵との事は三四の六に注しおけり、こゝにてはゴロ〳〵といふ程の意に用ひたり、次のこほめくも同じ、
（一三）あなさがなさがなはもてわづらひたる意よりいふ、困ッタといふ位の意、くはしくは二五の一三に注せり、
（一四）ひち〳〵ときこゆるは云々　ひち〳〵は今ピチ々々といふに同じ、今昔物語、越前守爲盛六衞府官人兵士を欺く條に、「腹の鳴ることいとしきりなり、云々板敷をおるゝに、或はなげしをおるゝほ

となくいひあかす。翁は袴にいと多く〔尿ナ〕しかけてければ、けさうの心ちも忘れて、先とかく洗ひしほどに、〔眠クナリテ〕うつぶしふしにけり。〔夜ガ〕明けぬれば、帶刀〔少ノ方へ〕いそぎ參りぬ。少將「いかゞいひつる」との給へば「しかぐ〳〵なん阿漕がいひし」と申すに、典藥の助の事を、あさましくねたく。實にいかに侘しからんと、思ひやるもいとあはれなり。「こゝには暫しは住まじ、二條殿に住まん。いきて格子上げさせよ、きよめせよ」とて、帶刀〔ナ〕つかはしつ。胸うちさわぎて、嬉しき事かぎりなし。阿漕、人しれず心地さわぎて、せんやうをかまへありく。
〔中納言方ニテハ〕午の時ばかりに、車二つ、三四の君、我やなどのり給うて〔祭見物ニ〕出で給ふさわぎにあはせて、北の方、典藥が許に〔預ケオキ

ど、に、ひちめかしてたれかけつ」とあるに同じく下痢する音にいふ之、

(一五)かいさぐりていでやすると　尻を捜りて痢したるものゝ衣服を漏れて流れ出でんかと氣づかふなり、「惑ひいづるこゝちに」はあわてゝ走りいづる心ちのうちにもにて、此あわたゞしき間にも、鎖締の事は忘れずして、さしかためて去りし之、

(一六)ひりかけて痢りかゝりて之、下痢しはじめてとのことゝ、

(一七)世の中いかゞあるぞ　落の身上の事を世の中といへり、世の事は三六の二九にいへ

鑰乞ひにやりて、「危し、我なきほどに人もぞあくる」とて、鑰もちて〔車ニ〕乘り給ひぬる事を、いみじくにくしと阿漕思ふ。おとゞも犖〔藏人少チ舞人ニ〕出したてゝ、〔舞人ニテ渡ルサマヲ〕ゆかしがりて出で給ひぬ。皆のゝしりて、さゞとして出で給ふすなはち阿漕、つげに〔一人ナ〕少ノ方〔ヘ〕はしらせやりたれば、少將こゝちまどひて、例乘り給ふ車にはあらぬ〔車〕に、朽葉の下簾かけて、〔供ノ〕男ども多くて〔中納言邸ニ〕おはしぬ。帶刀馬にて、さきにたてておこせ給へり。中納言殿〔ノ方〕には、犖の御供、おとゞ、北の方の御供、人々方々に男ども〔ソレ〳〵〕わかち參りて、〔跡ニハ〕人もなし。〔少ノ車ナ〕御門にしばし立てて、帶刀かくれより入りて、〔少ノ〕御くるまあり。いづくにかよせん」といへば「たゞこの北面に寄せよ」といへば〔車ナ〕牽き入れてよするを、

り、

(一八)その事あないして　あないは一〇の一八にいへる如く案内にて、志るべし、いざなふ事なれどこゝにては手引といふ意に用ひたり、

△更にいとこそ云々　前の阿漕の文、夜べはこゝにも云々と照し見るべし、

(一九)帶刀いみじき事にあはせて　いみじき事は典を落にあはせんとせし事をいふ、

(二〇)いつしかぬすみ出で云々　北の方の答は、北の方へ對してこれが返報をなさんとこ、答は返報なり、秋成本に當の字をかけるは妄之、枕草紙に「こ

からうじて、この〔留守居〕男ひとり出できて、「なぞの御車ぞ。皆出で給ひぬる所に〔來ル〕は」ととがむれば、〔他ノ車ニハ〕あらず、御達の參り給ふぞ」といひて、たゞよせに寄す。御達のとまりたりけるも、皆下におりて人もなきほどなり。阿漕「はやうおり給へ」といへば、少將〔車ヨリ〕おりはしり給ふ。部屋には鎖さしたり。これにぞ〔落ハ〕籠りけると見るに、胸つぶれていみじ。這ひ寄りてじやう捻り見給ふに、更に動かねば、帶刀喚び入れ給うて、うちたてを、一人してうち放ちて、遣戸の戸を引き放ちつれば、帶刀は出で〔去リ〕ぬ。いともらうたげにて〔部屋ノ内ニ〕居たるを、あはれにて、かい抱きて、車に乘り給ひぬ。「阿漕も乘れ」との給ふに、かの典藥がちかぐしくやありけんと、北の方思ひ給はん、〔ガ〕妬うていみじうてかの〔典

れがたふは必ずせんずらんと常に心づかひせらるゝもをかしきに」一宇治拾遺、かなしき目をみせしかばその答にわぶり殺さんずるぞと云々」猶いと多し、いづれも返報の意なり、
△此句上文「北の方をうち殺さばや」及び、「これぬすみいでゝ後に北の方に心惑はすばかりに云々」に照らし見るべし、
(二一)心もとなういひあかす　心もとなしは二四の三と注せり但し當時は多く心もどかしう待遠なるやうの意にいへり、おぼつかなき意にいひしもなきにはあらねど　打任せては待遠くもどかしき意のかたに用ふ、こゝも其

〔ヨリ〕遣せたりし文、二たびながらおしまきて、ふと見つくべく〔サシ〕おきて、御櫛の箱ひきさげて〔車ニ〕乘りぬれば、をかしげにて、飛ぶやうにして〔門ヲ〕出で給ひぬ。誰も〳〵いとうれし。門だにひき出でければ、〔供スル〕男どもいと多くて、二條殿におはしぬ。〔コヽニハ別〕ニ人もなければ、いと心やすしとて、下し奉り給うて臥し給ひぬ。日ごろの事ども、かたみに聞え給うて、泣きみ笑ひみし給ふ、かの〔興ガ尿ナ〕ひりかけの事をぞいみじく笑ひ給ひける「不覺なりける御懸想人かな。北の方、いかにあさましと思ひ給はん」とうちとけて、いひ臥し給へり。帶刀、阿漕と臥して、今は思ふ事もなきよしをいふ。〔日〕暮れぬれば、御臺まゐりなどして帶刀、あるじだちてしありく〳〵

意之、
(二二)けさうの心も忘れて　けさうは懸想の音、人に思をかけて、戀ひ慕ふこと、戀慕の情も忘れてゝ之、
(二三)少將いかゞいひつる　即ち前にみえし夜などぬすみ出づべしやといひし事の返事を求むる之、
(二四)あさましく　あきれ憎む意之、
(二五)こゝにはしばし住まじ、落を救ひ出してすゑおくべき所の事をいへる之、こゝとは即今少將が住居しある父大將の第宅をいふ、
(二六)二條殿云々　大將の家の別第にて、平日は留守居のみ居りて、格子などもおろしおける所の由にかけり、落を當分此二條殿に住ませんがために、格子を上げ、掃除等を命ずる之、△こゝにはしばし住まじ云々、一の巻にみえたる「岩ほの中求めて奉らんとて」及び「心やすき所もとめてん」「渡し奉らん所におはしなんや」等の句に照らしみるべし。大將の家にては彼是に斟酌あるべければ、心安き二條第に住ませんとおもふ之、
△阿漕人しれず云々、後段の伏線注目すべし、
(二七)午の時ばかり云々　午の時は今の正午十二時をいふ、ばかりは程をいふに同じく凡そにその時を示す辭、
(二八)おどゝも舞出したてゝ　出し立つとは、今日の舞人に出したるをいへる之、ゆかしがるはそのさまのいかならんと見まほしく思ふをいふ「さゞと」はその騒ぎいづるさまにてザワ〳〵などいはんが如し、
(二九)少將こゝちまどひて　惑ふはすべてあわて、又はあわたゞしくするをいふ、こゝはあわたゞしき之、
(三〇)例乘り玉ふ車にはあらぬに　少將と知られまじきが爲に、平常乘る車にあらざる別の車に乘りて來る之、
(三一)朽葉の下簾　下簾とは車の簾の裏面にかくる帷にて、生絹其外にて作り、その中間の半を縫はずして暖簾のごとくしたるもの、染色いろ〳〵なり、これは朽葉色とて黄に赤みをおびたる色なり
(三二)男ども多くて　もし中納言方にて拒む事あらん時の用意に多人數を召連れたる之
△中納言殿には云々　語勢甚妙なり、多くの男ども、それ〳〵に附き隨ひて出で行きしさまおのづからおも

ひやらる、
(三三)かくれより入りて　かくれはすべて表方ならざる所、即ち內證をいふ、かくれのかたなどもいひ後文にはかくれの所ともいへりこゝは內證口、即ち勝手口などいふ程の塲所をいふ、北おもてにてかの部屋並に御厨子所などによりたる方なるべし
(三四)御達　女房達なる事はじめにいへり、中納言家の女房達之と車副のいつはりて答ふる之、
(三五)うちたて　和名抄、棖、爾雅注云、棖、音唐、和名保古多知、辨色立成云、戸類、門兩旁木也、とあり、うちたては即ほこたち之、神祇式には打立とかけり、後に之を「はうたて」といへり「ほこたち」より轉ぜし〱、保元物語に「あまる矢が法莊嚴院の門の方立に篦中せめてぞ立たりける」盛衰記「方立の穴へ取つかせ玉へ」などみえたり、こゝにいへるは遣戸のたてつけ際、柱にそへたる木をいふ、
(三六)かのおこせたりし文二たびながら往復二通の文、典よりおこせしものと、阿漕が典に與へたる返事とをいふこれにて典が落に近づくを得ざりし事をみるべきものなれば、殘しおけるえ、
△御櫛の箱ひきさげて云々　一の巻にみえたる「櫛の箱のありつるは云々こゝにとりおきて云々」及び上文「櫛の箱云々まどひもてきて」と照らしみるべし、落の最大切とするものなるを示す、
△以上「阿漕つげにはしらせやりたれば」といひ、「只此北面によせよ」といひ、又典藥が文を殘し、櫛の箱を携へて車に乘る等の事、阿漕の手段かねて思ひ設けたるさまをみる、即ち上文、阿漕人しれず云々せんやうをかまへありくの聽、
△人もなければいと心やすし　一の巻岩ほの中云々以下上に評せる旨と照らし見は前後互に活動するをさとるべし、
(三七)不覺なりける御懸想人　不覺はもと「そゞろ」といふ詞にあてたる字にて、そゞろは「ムチヤ」「ヤタラ」「ナニトナク」などの意の語なるをつひに音讀して「フカク」といひ又音便より「フカウ」ともいへる之、されば不覺も「ムチヤ」又は「ヤタラ」などの意よりやゝ轉じて、「ウツケ」恥辱などいふ意にもいへり、こゝは「ウツケ」といふ程のこと、懸想の事は前にいへり、但しこゝに懸想人といふは俗に「色男」などいふ意に用ひたり、
△以上部屋より落を救ひ出して車にのせ、阿漕をものするさま、阿漕がかねて思ひ設けたる事どもを手早く行ひて車にのるさまなどの匆遽なる、二條殿に來りて人々いづれも安心して心しづかに語らふさまなど、文章によりて讀者に十分其意を知らしむるところを味ふべし、

〔第三八節〕
(一)むげに　無碍の字音より成れる辭にて一向にとの意なる事一四の一四にいへり
(二)かくれの所　內證向をさしてかくれといふ事は前に註せり、こゝは部屋をさしてかくれの所といへり△かくれの所諸本かくぬる所とあり、根岸本かくれの所とあるぞよき、かくぬる所にては何の事とも解せられず、れ。のをぬ。るに寫誤れるなるべし、
(三)誰かとまりつらん　即ち留守居の人に就きて糺さんとて、先

かの殿（中納言）には、物見（臨時祭）て歸り給うて、〔人々〕御車よりおり給ふまゝに見給へば、部屋の戸うちたふして（倒）、うちたて（棖）も〔放チテ〕打ち散らし〔アリ〕ければ、誰も〱驚き惑ひて（アワテ）、見れば、部屋には人もなし。いとあさましく、こはいかにしつる事ぞ（コレハ何トシタル事カ）と、さわさみちて（騒　譁）の〻しる（言ヒ騒グ）「こ（中納言）の家には、むげに（一向ニ）人はなかりつるか、かくれの所（內證向）まで入りたちて（人ノ入込ミキテ）、〔棖ナ〕うちわり、〔戸ナ〕引き放ちつらんをとがめざりつらんは（告ムルコモナサザリシハ）」と、腹立ちて「誰かとまりたりつらん（留守居シタル）」と、尋ねのゝしる（騒グ）、北の方、いはんかたなき心地して（イマ〱シク殘念ナルコ）、ねたくいみじき事かぎりなし。阿漕を尋ねもとむれど（サガセドモ）、いづくにかあらん（ドコニ居ルベキゾヤ）。落窪〔ノ室〕をあけて見給へば、〔カ子

其留守居の誰なるかを問ふなり、中納言はもとより豫め誰留守居せりとまでの事は知らざるべければ之、（四）ありとみし几帳屏風云々　北の方落窪の室をさしかためしこと前にみえたり、其時までもありしかの和泉の家よりもて來たる几帳屏風の類すべてなしと之△是また上文阿漕心地さわぎてせんやうをかまへありくの應、（五）やがておひうてん　うては棄てにて、おひうつは追ひ棄つにて放逐すること、伊勢物語「俄に親この女をおひうつ」水鏡親王をおひうて申して後」などあり、△この「うて」諸本「うつ」とあり、今

〔テ〕ありと見し几帳、屏風、ひとつもなし。北の方、「阿漕といふ盜人の、かく人もなきをりを見つけてしたるなり。やがておひうてんと思ひしものを、つかひよしとの給ひて、かくまけぬる事、心きもゝなく、相思ひ奉らざりしものを、强ひてつかひ給ひてと、三の君をいみじくの給ふ。おとゞ、とまりたりける男、一人たづね出でゝ〔様子ヲ〕問ひ給へば、「更に知り侍らず。唯いと淸げなる網代車の、下簾かけたる〔カ〕〔皆様方ガ〕出させたまひてすなはち、入りまうできて、ふと出でまかりにし」と申す。「唯それにこそあめれ。女はえさは打ち破りて出でじ。男のしたるなめり何ばかりの者なれば、かくわが家を、あかひるに入り立ちて、かくして出でぬらん。」と、ねたがり惑ひ給へどかひもなし。北の方、この〔阿ガステ〕置きた

田本に従ふ、（六）心ぎも　心膽なれど只心といふほどのこと、うつぼ藏開「まして人は心肝やすからぬ事と」源浮舟「いとゞ心きもゝつぶれぬ」大和物語「心ぎもをまどはして」皆心ぎもといふまでの意、こゝには氣もなくといふ程の事にいへり、△やがておひうてん以下一の巻「三の君此度はゆるし玉へ云々の文に照しみるべし、（七）とまりける男云々　誰かとまりつらんとて、やがて此男をよび出したる之、さて此男は、即ち前にみえたる「からうじてこの男ひとり出できて」とありしもの之、網代車と

る文を見給ひて、まだ〔典ト〕寢ざりけりと思ふに、ねたさまさりて、典藥をよび居ゑ給ひて、「かう〳〵して逃げにけり。ぬしに預けしかひもなく、かくにがし給へる、ちか〴〵しくは物し給はざりけるか」との給ひて、「おきたるその文どもを見れば」といへば、典藥がいらへ、「いと理なき仰なりや。その胸やみ給ひし夜は、いみじう〔佗ビ〕惑ひて、御あたりにも寄せ〔ツケ〕給はず、阿漕もつとそひて、『御忌日なり、今宵過して』と、さうじみもの賜ひて、いみじく〔佗ビ〕惑ひ給ひしかば、やをら、たゞよりふしにき。その後の夜せめおとさんと思ひて、まうで來て〔戸ヲ〕あくるに、內ざしにさして、さらにあかぬを、〔ゼヒアケントテ〕板の上に、夜中まで立ちゐ戸をあけ〔ントシ〕侍りしほどに風ひきて、腹のこほ〳〵とまうしゝを一二度

は檜の薄き片木板にて網代の如く編みたるものにて張りし車之
（八）唯それにこそあめれ　此語中おのづから其車の内に男の居りしならんとの意を含む、さるは次に女はえさはと云々とあるにて知るべし、
（九）あかひる　眞晝といふが如し、眞裸をあかはだかといふに同じ、白晝之、白晝公然として毫も憚る事なく、かく亂妨に奪ひ去りしは、何人の所爲ぞと之
△かう〳〵してにげにけり云々、ちか〳〵しくは物し給はざりけるかとの給ひて」と句をおきて、更に「おきた

は聞き過して、猶しうねく、あけんとし侍りしほどに、みだりがはしき事の、出でまうで來にしかば、物もおぼえで、まづ退り出でゝ、〔衣服ノ中ニ〕しつゝみたりし物を洗ひしほどに、夜は明けにけり。翁の怠りならず」と述べ申して居たるに、腹だちしかりながら〔チカシクテ〕笑はれぬ。まして〔脇ニ居テ〕ほの聞く若き人は、死にかへり笑ふ。「いでや、よし〳〵、立ちたまひね　いといふがひなく妬し。よそ人にこそあづくべかりけれ」との給ふに、典藥腹立ちて「わりなきことの給ふ。心〔ノ内〕にはいかに〳〵と思へど、老のつたなかりけるとは、あやまちやすくて、ふとひりかけらるゝをば、いかゞせん。翁なればこそ、〔辛抱シテ〕あけんとはせしか」、〔他人ハサヤウニセン〕さ」と腹立ち言ひて立ちていけば、いとゞ人々笑ひ死ぬべし。童な

るそこの云々」といへる、その先づ問かけて、さて再びその理由をいふ語氣眞に逼りて妙之、
（一〇）やをら　やはらより轉じたる語、和らにて「シヅカニ」「ソツト」などの意なる事二三の一七にいへり、
（一一）ゑうねく　三五の二に注せり、但しこゝには「ゼヒトモ」などいふ意にいへり、
（一二）ゑつゝみたりしもの　即ち衣服に泄利せしものゝ、△上文「先とかく洗ひし程にうつぶしふしにけり」と對しみるべし、
（一三）ましてほのきく云々　之を叱る北の方すら笑はるゝ程の事なれば、側にある若人は

る子のいふやう「すべてうへのあしく〳〵し給へるぞ。何しに部屋にこめ給ひて、かくをこなるものにはあはせんとし給ひしぞ。いかに佗しく思しけん。御むすめども多く、まろらもゆく先侍れば、いきあひ、きあひ相聞えふるゝ事もこそあれ。いみじき事なりや」と、およすけいへば、北の方「すやつはいづち行くとも、よくありなんや。いきあふとも、我等が子ども、ヲいかゞせん」といらへ給ふ。をのこ二人ぞもたまへりける。太郎は越前の守に、二郎は法師、三郎ぞこの童なりける。かくいひさわげど、〔今更〕かひなければ、皆臥しぬ。」

二條殿には、おんとなぶらまゐりて、少將の君臥し給うて、阿漕に「日ごろの事よくかたれ、こゝには更に〔何トモ〕の給はず」との給

たへがたきまで笑ふとえ、ほのきくはほのかに聞くといふ迄の意にはあらず、側にありてきく程をいへるなり、死にかへりは、その堪へがたきさまにいふ、

（一四）翁なればこそは云々 上の「よそ人にこそ云々」といふに對していふ、我なればこそ氣をねらしてさやうにもしつれどゝ

（一五）わらはなる子 即ち三郎君なり、上にちひさき子ともみえたり、兄弟中此三郎君のみ頗る落に意を致せることゝこゝの文、及び上の條にもみえたり、是かの箏の琴など傳へられて相親める故なるべし、されば落も三郎君をばことに思ふさま後

へば、阿漕、北の方の心をありのまゝに〔スコシモ隔サズ〕いへば、君〔聞キテ〕あさましかりける事かなと、おぼし臥し給へり。〔此殿ニハ〕人ずくなにて、いとあしかめり、阿漕、人もとめよ、殿なる人々にも、いとこ聞えんと思へどもゆかしげなし、阿漕、おとなになりね、いとこゝろおよすけためり」と、いひ臥し給へり。かくうれしくの給はせて、明けぬれば、いとのどかなる心ちして、巳午の時まで臥し、晝つ方、殿に參り給ふとて、帶刀に「ちかくゐたれ、只今來ん」とて出で給ひぬ。阿漕、〔和泉守ノ〕をばの許へ文やる。いそぐ事侍りてなん、昨日今日聞えざりつる、けふ明日のほどに、清げならん童、おとな、もとめ出で給へ、そこにもよき童あらば、一人二人暫し給へ、あるやうはたいめんに聞えん、あか

文にもみえたり、

（一六）いきあひきあひ云々 往くとては逢ひ、來るとては逢ひにてあふさきるさの語の如く、何かの事につきてといふ程の語、相聞え觸るとは交に交際する事をいふ、

（一七）およすけ 「オトナメキ」「オトナシミ」「オトナシク」「オダヤカ」などいふ意の語、くはしくは二四の三二に注せり

（一八）すやつ 其奴なり、後につまりてシヤツといふ、彼奴をキヤツといふが如し

△いきあふとも云々 此語緊しく後文に應ず、後來越前守が播摩守に轉じ、又更に辨となり、此三郎が累進し

らさまにおはせよ、といひやりつ。少將の君、殿におはしたれば、かの中納言殿の四の君の事いふ人出で來て「ものうけたまはる。かの〔四ノ君ノ〕事一日も、の給へりき。年かへらぬさきにしてんと思ふやうなんある。御文聞えてと、いみじくせめ侍り」といへば、殿の北の方「さかさまにもいふ〔縁談〕なるかな。〔シカシ〕强ひて〔先方ヨリ〕かういふ事を、聞きてよかし。〔謝絶スルノ〕人の爲にはしたなきやうなり。今まで一人ある、見ぐるし」との給へば、少將〔中納ノ方デ〕「さ思はゞはやうとりてよかし。文は今〔直ニ〕やらん。今やうはことに、文通はしせでもしつなり」とてゑみて〔坐チ〕立ち給ひぬ。我御方におはして、常につかひ給ふ調度ども、厨子などかしこにやり給ふ。御文、

て中將中宮亮となり、中の君の夫の左少辨が美濃守に轉じ、三の君が御匣殿となり、四の君か帥中納言に嫁ぐなど、皆落窪の君に依るのみならず、中納言が大納言となりしも、亦全く落窪の君に依て然りしなり、さるを今かく輕侮していふ口氣味ふべし、
（一九）おんとなぶら　御殿油にて御殿にともす燈火をいふ、おほとなぶらといふに同じ、おほとなぶらは大殿油といふ事、或はいふ。おんとなぶらはおほとなふらの音便之、御殿の義にはあらずとさもあるべし、まゐるは參らすにてすゝむること燈火をさしあぐるとい

今の間いかに、後めたうこそ。内に參りて、只今かへり出で侍りなん。

唐ころもきて見ることのうれしさをつゝめば袖ぞほころびぬべき

なかなかつゝましくなん、けふのこゝちは、

とあり。御かへり、こゝには

憂き事をなげきしほどにからころもそではくちにき何につゝまん

と聞え給へるを、あはれとおぼす。帶刀、心しらひ仕う奉る事ねもごろなり。和泉守の〔姨ヨリ〕かへりごと、

おぼつかなさに、これより昨日〔中納言殿方ヘ〕聞えたりしかば、はや

ふ事之、
（二〇）こゝには更にの玉はず　落の平常の事ども明かには少將に告げかたらぬ之△これら落の心深くゆかしき人柄なるをしるべし、
（二一）北の方の心を云々　北の方の從來落に對する心向け擧動を逐一に語るなり、△これらの文にて少將が落の北の方に仕向けらるゝさまのいかなるかは、帶刀がいふ所と、及びこれを落の室にて目のあたり見聞せしとより外には知らざりし事を示す、落の用意殊勝なりといふべし、
（二二）殿なる人にも云々　本第の女房童を引移さん事は容易の事なれども、つかひ馴れた

うすまじきわざして、逃げ給ひにきとて、〔ヤリシ〕使をもほとほとうたれぬべかりけるを、からうじてなん、逃げて〔カヘリ〕來たりしかば、いかならんと、思う給へなげきつるに、うれしくたひらかに物し給へる事〔ヨ〕、人は今〔ヂキニ〕案内して聞えん。こゝにはべるはかばかしきものなし。この〔和泉ノ〕守のいとこにて、こゝにおはするこそ、さやうにものしつべけれ。

といへり。暮るれば君〔カヘリ〕おはしたり。「かの四の君の事こそ、〔媒スル人ノ〕しかじかいひつれ。我〔ナリ〕といひて、人もとめてあはせん」との給へば、女君「いとけしからず、否とおぼさば、おいらかにこそし給はめ。本意なく、いかにいみじと思さん」との給ふ。少將「かの北の方に、いかでねたき目見せんと

思へばなり」との給へば、女(落)「これはやゝ(此事ハモハヤ)わすれ給ひね。かの君やにくかりし(四ノ君ガ憎キヿアリマシタカ)」との給へば、少將「いと(至テ)心弱く(氣ガ弱ク)おはしけり。人の憎きふし(事シタルチ)、おぼしおくまじかりけり(根ニモツト云フヿセラレザル人ナリ)。いと心安し(至テ氣ガオカレズ)」との給ひて、臥し給ひぬ。」

るものは懐かしげなく珍らしからずと之、落のおのづから遠慮せん事を察してかくいひなす之、
(二三)阿漕おとなになりね　おとなは大人にて、女房をいふ、うつぼ藏開「この程は男は召使ひ玉はねば、わらはおとなめしいづれば云々」この外おとなわらはといへるいと多し、此もの語にもかれこれみえたり、皆女房童をいふ、阿漕は是迄わらはにてありし之、わらはと言ひたりとて童見といふ事にはあらず、日本紀にも年少をワラハと訓じ、女には今の世にいはゆる娘までをいへりし之、故に今よりは女房となるべしといへる之、
(二四)明けぬればいとのどかなる云々、是迄は落窪なるいといぶせき室といひ、且は人目を忍ぶ事にて、夜明くればいとあわたゞしかりしに今朝は何の心おく事もなく、至てのどかなりと之
(二五)巳は今の午前十時、午は正午十二時、
(二六)帶刀ちかく居たれ　自身外出すべければ、帶刀に落の傍にありて慰めよと命ずる之、人少なれば之、
(二七)いそぐ事　いそぐといふ詞は、當時すべて準備する事、俗に「シタクヲスル」といふ意にいへり、さてその支度をなすには種々の設けをなすより之を形狀していそがしとはいへる之、こゝも物の支度をする事にいへり、
(二八)けふあすの程に云々　昨夜少より命ぜられしによりて云ひおくる之、
(二九)あるやうは　即ち此度の事を含めていへり、面會の上ならでは語らひがたき事なればかくいへる之、
(三〇)あからさまにおはせよ「あからさまに」に二種あり「明白に」といふ意なると「カリソメニ」又は「チヨツト」「タチマチニ」などいふ意なると之、こゝには「チヨツト」といふ程の意之、

(三一)かの中納言殿の云々　一の巻にみえたる「乳母なる人こそ殿なる人を知りて云々」といへる殿なる人にて、即ち四の君の乳母と知りあひたる大將の殿人之、前にいへる人なるをもてかのとはいへり、
(三二)ものうけ給はる　當時謹みて事を申す時、先いへる語にて、中上くべき事ありといふ程の詞、つゞめては「ものけ玉はる」ともいへり、已にこゝも一本には然かけるもあり、
(三三)かの事云々　かの事は四の君縁談の事をいふ、ひと日は先日といふ事、の玉へりきは中納言方にていふ事ありきと之、
(三四)御文聞えてと云々　少將より四の君へ文をおくらるゝ樣に見計ひくれよと中納言方より甚しく迫ると之、當時の風婚姻をなすには、先男よりして女の方に文を通はすことなれば之、
(三五)殿の北方云々　大將殿の北の方にて即ち少將の母なり、母と少將とならび居る處にこの媒する殿人出來りて、此事をいへる之「さかしまにもいふ哉」とはかゝる緣談の事などは通例男の方より女の方へ中入るゝ事なるに、今は却て女方より男方へ申込む事なれば、あちらこちらの事といふ之、
(三六)强ひてかういふ云々　志かしながら遮てかくばかりにいふ事なれば聞き入るゝ方なるべしと之、斷らんは氣の毒と之、はしたなしの語は三六の一三にいへり、こゝはキノドクといふ意之
(三七)さ思はゞ云々　少の詞之、中納言方にて左程に懸望する事ならば早速聟に取るべしと之、文は早速やるべし、志かし今日は文をやらず直に婚姻する事もあれば、必文を要するにも及ばざらんと之△是少將心に思ふ所あるをもてかくいへり、即ち前にいへる心深き所、次の句「ゑみて立ち」に着目すべし、
(三八)調度ども厨子など　調度は道具類をいふ、厨子は棚あり戸ありて種々のものを入れおくべき器、今二條殿に住居する事となしたれば、これらの物を引移す之、
(三九)唐ころも　からころもはきといはんための枕詞、さて今日はかく君をすゑおきて、そこにきて相見る事の叶ひたる嬉しさを包まんとすれば、包みあへずして袖も綻びんとする程之といふにて嬉しき意の甚しきをのべ、からころもといふよりその緣にて袖といひ、包むといひ、ほころぶといへり
(四〇)憂き事を　落の返歌なり、是迄の憂き事を甚しく歎きしために、わがきて居る衣服の袖は、涙のために朽ち果てたり、さればけふの嬉しさをは何に包むべきかと之、かけ歌にうれしさとあるによりその詞を省きて只何に包まんといひてしらせたり、

(四一)おぼつかなさに云々　阿漕は此程中の混雜にまぎれて音信せざりしによりて、姨方より中納言の邸へあてゝ音信せし之、はやうすまじきとは、すまじきわざしてはやう逃げとつゞけて心得べし、
(四二)人は今案內して　あないといふ詞は三七の一八と同じく、こゝも手引といふ程の意、
(四三)いとけしからず　けしからずは「以ノ外」などいふ意にて今俗にいふ所とさして異ならず、此語やゝ後なる別本曾我物語などにみえたる「けしかる」といふ語と同じく、共に怪しのはたらけるものにて、一は怪しからず、又は怪しからぬと打消にいひて猶怪しかるの意に用ふるは、かの「おぼろげならず」と「おぼろげ」と同一に用ふる例に同じからんかといへり、
(四四)おいらかに　老らかにの意にて、多く性質態度などの上にいへり、オトナシク、オダヤカニなどの意、
△少將かの北の方に云々　以下の文少將が思ひこみ深くして意地強く、落の溫厚にして美質なるさまをあらはす、

【第三九節】

(一)かの中納言殿には云々　中納言方にては、かの媒する、少將より、少將方の殿人より、少將がよかなりと言ひしよし報告したるに依りて、深く悅び、即ち聟取の準備をさわぐ之、まうけは準備をいふ、のゝしるは騷ぐといふこと已にいへり、

かの中納言殿には、〔四ノ君ノ事〕よかなりとなん〔少ノ〕の給ふと、〔殿人ヨリ〕いひやりたれば、喜びて、まうけし(其準備シ)のゝしる(騷ク)につけて、(北心)落窪といふものゝあらば、〔仕立物ヲ〕うち預けてぬはせまし。〔サラバ都合〕いかによからまし。佛、これ生(いけ)らば、來るやうにし給へ。藏人少將の君も御衣(そ)ども(衣服ノ類)〔ノ縫方〕わろしとて、出づと入ると(出入ニツキテ)、むつかりて(小言ヲイウテ)着給はず

(二)落窪といふものゝあらば云々　北の方の心之、四の君の衣服は勿論、聟の裝束などの用意もあれば、縫物多き之、
(三)藏人少將の君も　藏人少將はあしき事もよき事も揭焉にいふ人にて裝束をよく縫ひ上げたる由ほむる事一の卷にみえたり、されば落の去りし後裁縫の意に叶はぬよしかしましくいへる之、
(四)よかなりとの玉ふ時に云々　今此承諾せし機を失はずして速に聟取せん、もし遲滯せば違變する事も計りがたければと之、居たちいそぐは立たり居たりして仕度すといふ事、その氣を揉むさまを

などある時は、侘しうて、物せん人(縫物ヨクスル人ヲホシ)もがなとて、こゝかしこ手を分ちて、〔縫物スル人ヲ〕もとめ給ふ。〔少方ニテ〕「よかなり(ヨロシイ)との給ふ時に〔聟ニ〕取りてん。〔長クナラバ〕思ひもぞかはる(變ズルコモハカラレズ)」とて、おとゞ(中納言キヂモミテ)居たちいそぎ給ふ。〔婚禮ノ日ヲ〕十二月(しはす)の朔日(ついたち)五日(上旬ノ)と定めたるほどに、十一月(しもつき)の晦日(つごもり)ばかりより急ぎ(準備セラル)給ふ。御聟(むこ)の少將(藏人)「誰を〔四ノ君ノ聟ニ〕取り給ふぞ」と問ひければ、「左大將殿の、左近少將(三ノ君)とかの給へる」〔人ナリ〕「いとをかしき(可賞)君ぞかし。〔互ニ親シク〕うち語らひて出入せんに、いとよき(至極)事かな」とゆるし(贊成)ければ、北の方、榮(はえ)(面目)ありてうれしと思ふ」かの〔左近〕少將は、北の方〔ガ〕いと妬く(イマイマシク)にくゝて、いかで(ドウカシテ)これに侘しと思はせんと〔深ク〕思ひしみ(込ミ)にければ、心の中に思ひたばかるやうありて、よかなり(ヨロシイ)といふなりけり。」かくて一條殿には、〔引移後〕十日ばかり

いふ之、いそぐは支度すといふ事前にいへり、
（五）十二月の朔日五日　朔日五日とは上旬の五日といふ事當時の詞づかひ之
（六）いとをかしき君ぞかし云々　左近少將は攝家の公達にて、人物もよく當時評判よき人なる由は前にみえたり、されば藏人少將もそれと相聟となる事望ましき事なれば贊成するる之、
（七）榮ありて　はえはすべて、見榮え、聞榮えなどいふはえにてヒキタチのよき事、こゝにては面目といふやうなる意にあたれり、
△かの少將は云々　即ち上文まば〳〵みえた

になりぬれば、今參〔ノ女房童〕ども十餘人ばかり參りて、いと〔ハナヤカニ〕今めかしうをかし。和泉の守のいとこなる、〔女〕からう〳〵と聞きて、參らせて、兵庫といふ。阿漕はおとなになりて、衞門といふ。〔ミナリ〕小くをかしげなるわかうどにて、思ふ事なげにてありく。男も女も、〔衞門ヲ〕類なく〔最貢ニ〕おぼしたる、道理ぞかし。少將の君の母北の方「二條殿に人〔ヲ〕すゑたりと聞くはまことか。さらば中納言殿〔ノ方〕には、などよかなりとはの給ふぞ」少將「御消息聞えてと思う給へしかど、人も住み給はぬ中に、唯しばしと思う給へてなん、〔ソレ故申上ゲヌ〕問はせ給へる。中納言は〔誰々モ申スカ〕中にも、〔別シテ〕さいふと聞き侍りしかば、男は〔本妻〕一人にてやは侍る、〔二條ノ人ト中納言ノ四君ト〕うち語らひても侍れかし」と笑ひ給へば、北の方「いであ

る旨趣を果さんの意、この數句少將が四の君緣談の事を承諾したる理由をいへる之、
（八）かくて二條殿には云々　上文「阿漕人もとめよ」の結果、今參りは新に奉仕する女房童をいふ、今めかしうをかしはきらびやかに賑はしく盛なるをいふ、
△和泉の守のいとこ　上文の結妝、阿漕はおとなになりても同じ、
（九）男も女も云々　衞門を深く愛せらるゝ之　少と落との緣談及びかく二條殿に移ることゝなりしも畢竟衞門が盡力に依る事なれば之、
（一〇）二條殿に人すゑ云々　母北の方の少に

なかく、人〔ヲ〕あまたもたるは、歎き負ふなり、〔ソレ故〕身も苦しげなり、な物し給ひそ、その〔二條ニ〕居ゑ給ひつらん〔人〕に思しつかば、さてやみ給ひね、今〔二條ノ人ヲ〕とぶらひ聞えん」とて、その後はをかしき物〔二條へ〕奉り給ひて、聞えかはし給ふ。「この人よげに物し給ふめり。御文かき、手つき、いとをかしかンめり、誰がむすめぞ、これにてさだまり給ひね、女子もたれば、人のおぼさん事も、いとほしう心苦しうなん覺ゆる」と少將に申し給へば、ほゝゑみ給ひて「これもよも忘れ侍らじ、〔其上ニモ〕またもゆかしう侍り」と申給へば「いかでか。けしからず、更に思ひ聞ゆまじき御心なめり」と笑ひ給ふ。〔此母北方ハ〕御心なんいとよく、容貌も美しうおはしましける。」

問ふ詞之、語氣他より聞込みて問ふさま之さて此詞によれは父母に告けずして、二條第に落を迎へたる事とみえたり、いかゞの事のやうなれども當時の世のさまはさやうの事ありし事當時の書にてしられたり、

（一一）さらば中納言殿には云々　已に二條殿に人を迎へたる上は、それをもて妻として然るべし、さるに中納言方の中込を承諾したるは何故ぞと之、前の殿人の母北の方並少將の前にいで來て四の君の事をいひしは、落を二條弟に移したる翌日の事なれば、母北の方はいまだ其事を知らざりし之、

かくて月たちて、あさてなん、〔婚禮日ナルニ、少ハ〕さは知り給へりやと、いとほしく思したれば、かくなんと申せば、「よかなり、〔中納言方ヘ〕參らん」と答へ給ひて、心のうちには、いとをかしと思しけるやう、北の方の御をぢにて、世の中に、僻み痴たる者に思はれて、治部卿なる〔人アル〕が、交らふ事もなき人の太郎、兵部少輔といふ人ありけり。少將〔其家ニ〕おはして、「少輔はここにか」との給へば、「曹司の方に侍らん、〔世間ヘ出レバ〕人笑ふとて、え出立もし侍らず、君達御かへりみありて、これ〔ガ〕交らひつけさせ給へ、おのれもしか侍りにき。〔人ニ〕笑ひたてられたる程だに過ぎぬれば、宮仕しつきぬるものなり」と申せば、少將、打わらひて「いかゞ、見はなし侍らん」とて〔坐ナ〕たちて、曹司におはして、見給へば、まだ臥い給へり。痴

（一二）御消息聞えて云々　消息は音信といふ事なるは已にいへり、斷りて後人を迎ふべきをと之、無沙汰にて迎へし言譯をいふ之、人も住み給はぬとは何人も住まず明けてある事故暫時の間とて人を迎へたりと之、

（一三）問はせ給へる云々　此文は句を前後して見るべし、問はせ玉ふ中納言の四の君の事は、元來男は本妻一人とも限らず、二人も三人ももちて差支なしと誰々も申す中に、殊に中納言は左樣に申して、其女の外、又人を迎へらるゝ事勿論差支なしと申す故、二條の人と四の君と互に交際してもあらしめんとて承

がましうをかしうて「やゝ、起き給へ、聞ゆべき事ありてなん、まうできたる」との給へば、足手あはせて、いとよくのび〳〵して、辛じて起き出で手洗ひ居たり。少將「などかかしこにも、さらにおはせぬ」との給へば、少輔のいらへ「人のほゝとわらへば恥かしうて」〔ソレユヱアガラズ〕といへば「うとき所ならばこそはづかしからめ」〔我方ナバ耻ヅヘキニ非ス〕とて、「君は妻はなどて今まで持給へらぬぞ。やまめぶししては、いと苦しきものを」との給へば少輔のいらへ「あはする人のなきうちに、ひとり臥して侍るも、更に苦しくも侍らず」といへば、少將「さは苦しからずとて、妻まうけでやみ給ひなんや。」少輔「あはする人や侍るとて待ち侍るなり。」少將「いでまろあはせ奉らん、いとよき人あり」との給ふに、さす

諸せし事之との意之、
(一四)その後はをかしき物云々　母北の方より落へ物をおくり、書面の往復をなす之、さてその書面の文言、また手跡等によりて、いまだ面會はせざれども、大よその人がらを察し、此人宜しげに見ゆといへる之、
(一五)女子もたれば　もたればは持ちてあれば之、少將には妹ありて、今上の女御たり、前に帶刀が「女御殿の御方にこそ」といへる即ち是なり、されば北の方自身に女の子を持ちてある事故、その身につきて思ふにも人の上察せらると之、人のおぼさんは二條の人の思はんといふにて、他

がに笑みたる顔、色は雪の〔如キ〕白さにて、首いと長うて、顔つきたゞ駒のやうに、鼻のいらゝぎたる事かぎりなし。ひうと斷きて引き離れていぬべき顔したり。對ひ居たらん人は、實に笑はではえあるまじ。「いと嬉しき事に侍るなり、誰が女ぞ」といへば、少將、「源中納言の四の君なり、まろに婚せんといへど、え思ひすつまじき人の侍れば、〔四ノ君チ〕君にゆづり聞えんと思ひて、〔婚禮日チ〕あさてとなんさだめたる、さる用意し給へ」少輔のいらへ、「〔中納言方ニ〕本意なしとて、笑ひもこそすれ」といへば、少將、笑ふがあるまじき事と思ひけるこそ、あはれにをかしけれど、つれなくて「よも笑はじ、〔中納言方ヘ〕の給はんやうは、『おのれなん忍びて、〔四ノ君ヘ〕この秋より通ふを、少將〔チ聟ニ〕とり給ふと聞きて、〔少將ヘ〕おのれには

に妻をもたんは其人の思はん程いとほしと之、
(一六)これもよも忘れ侍らじ云々　これもは二條の人、即ち落をいふ、二條の人をも見捨てじ、されど中納言の四の君も又得たしと之、即ち前にいへる男は一人をのみ守るべきにあらずとの意、
(一七)世の中に僻み云々　僻みは氣質偏屈、痴れは即ち愚癡之、世間の人に偏屈愚癡なりと認められて、交際する人もなき治部卿といふ人の長男兵部少輔となり、少輔はせふと訓む、セウの約まりし之、後に訛りてセウイフといふ、
(一八)人笑ふとて　此

なれぬ人なれば、かう〳〵なり、いかで〔四ノ君チ妻ニ〕え給ふぞと〔少將ニ〕恨みしかば、いと道理なり。さらば〔我ガ聟トナル「〕不用にこそは、〔但シ其事ハ〕かの親たちも知り給はねば、〔僕破談セバ〕まろならぬ人、〔チ聟ニ〕とり給はんもをこなり、此度〔其通ヒシ「チ〕あらはれ〔知ラレ〕給ひねと、〔少將ガ〕言ひしかばなん』といらへ給へ、さらばなでふ事かいはん、よも笑はじ。さて〔引續キテ四君ヘ〕おはし通ひなば、人もおぼえありて思ひなん」といへば、「さなり」とうなづき居たり。「さらばあさて、夜〔チ〕うちふかして〔中納言ヘ〕おはせ」と、言ひおき給ひて出で給ひぬ。女いかが思はんと〔イトホシク〕思へども、〔其不憫ノ情ニモ〕まさりて、〔北ノ方チ〕憎しと思しおきてければなりけり。」

セメ

二條殿におはしたれは、雪の降るを見出して、火桶に押しかゝり

少輔異躰の顔にて且痴人なれば、見る人笑ふとて、愧ぢて外出もせずと之、
(一九)笑ひたてられたる云々　此父治部卿も少年の時は人に笑はれたりとなり、しれたる人なれば之、その笑はるゝをも凌ぎて過ぎぬれば奉務も出來る者と之、
(二〇)やゝ起き玉へやゝは呼びかくる聲、三三の一一にいへり、少輔の朝寐を呼びおこす聲之、
(二一)人のほゝと笑へばほゝは笑ふ聲、うつぼ藏開「一たびにほゝと笑ふ」榮花月の宴「女房の十二十人といでゐてほゝと笑ふぞや」などいと多く、今

て、灰まさぐりて居給へり、〔樣子柄〕いとおかしければ、〔少ハ即チ〕對ひ居給へるに、

はかなくて消えなましかば思ふとも

と書くを、あはれに見給ふ。まことにとおぼして、男君、

いはでおきびに身はこがれまし

と〔ヨミ〕て、やがてまた男君、

埋火のきえでうれしと思ふにはわがふところにいだきてぞぬる

とて、搔き抱きて臥し給ひぬ。女君、いとさかしき事なりとて、笑ひ給ふ。中納言殿〔ノ方〕には、その日になりて、しつらひ給ふ事限なし。〔當日ハ〕今日といへば、少將、〔兵部〕少輔のもとへ「かの聞えし事

「クスヽヽ」といふ程のこと、
(二二)やまめぶし　和名抄鰥夫を夜無平、寡を夜無女と訓じたれど、鰥をもやもめといへる事、伊勢物語に「昔男やもめにて居て」空穗藤原の君「帥のぬし翁やもめにて」その外いと多し、やまめはやもめに同じ、やまめぶしは一人臥といふ意之
(二三)駒のやうに云々　駒は小馬の義、和名抄にも馬子也と註せられたれども、ひろく馬の事にいへり、いらゝぐは、すべてふくれうごくことにいふ、源氏てならひ「袴も云々いらゝぎたるものども着玉へりしは」とあるは衣服のふくれうごくを

は今宵なり。戌の時ばかりに〔中納言方ヘ〕おはせよ」との給へば、「こゝにもしか思ひ侍り」といへり。父にかうかうといひければ、ひがみしれ人は便なからんとも思はで、らうありて人にほめられ給ふ事は、よもあらじ、シカシ一通リノ接待ハアランはやういけとて、裝束の事急ぎ出したてたりければ、うちさうぞきて住きけり。〔中納言方ニハ〕人々そうぞきそしてまつに、〔聟君〕おはしたりといへば、入れ奉りつ。その夜は痴れも見にで、火のほのぐらきに、容體ほそやかに、あてなりければ、御達は、〔世間ノ〕人にほめられ給ふ君ぞかしと思ふに、「うちつけに、ほそやかに、媚めきても入り給ひぬるかな」と言ひあへるを、聞き給ひて、北の方笑みまけて、「かしこくも〔聟ニ〕とりつるかな。我は幸福ありかし。思ふやうなる聟どもを

いひ、同橋姫「いと寒げにいらゝぎたる顏」とあるは寒き時は頬をふくらめらるゝもの故それをいへり、宇治拾遺に、ゐのしゝの事を「毛をいらゝがしてはしりかゝる」といふもふくれはりたるをいふ、いら〳〵し、いらめくなど、かど〳〵しくとげ〳〵しきにいふものとは異なり、こゝは鼻のふくれ動くをいふ、今もさるさまの人あるものぞ、ひうは馬の嘶く聲今ヒンといへり、

△ほいなしと笑ひもこそすれ、此語先その痴人たるを示す所、さて笑ふがあるまじき云々とはいへり、かくものゝ理も解しえぬ人のさ

とるかな。只今この君、大臣がね」とふきちらし給へば、人々も實にと聞ゆ。女かゝる痴者ともしらで、臥し給ひにけり。〔夜か〕明けぬれば出でぬ。「少將、いかならんと思ひやられて、をかしければ、女君に、「中納言殿には、昨夜聟取し給ひにけり。」「誰ぞ」との給へば「まろがをぢにて、治部卿なる人の子、兵部少輔、容貌いとよく、鼻いとをかしげなるを、聟どり給へる〔ナリ〕」との給へば、女君「ことに人のとりわきて、ほめぬ所よ」とて、笑ひ給へば、なにか、シカ云フベキ句優れてをかしげなる所を聞ゆるぞかし。今〔其人ナ〕見給ひてん」とて、侍に出で給うて、〔使ナモテ〕少輔のがり文やり給ふ。

いかにぞ、〔四ノ君ヘ後朝ノ〕文やり給ひつや、まだしくば、かう書きて

すがに笑ふといふはよからぬ事と知りたるはあはれなといへるなり、

(一四)つれなくて何げなきさま、心にはをかしく思へど何げなき顏つきをすること、つれなしは一二の一五にいへり、

(一五)の玉はんやうは これより少將が兵少に對して、中納言方にて少將ならざる事を知りて怪しむとき、兵少の言ふべき旨趣を敎ふるなり、其旨趣は兵少は今年の秋より竊に四の君と通じて契り居るに、此度少將を聟に取る由きゝて、少將は親族の事なれば、内實の事を語りて、何故四の君の聟とはなる事ぞと

やり給へ、いとをかしき事ぞ、」

とて

世の人のけふのけさには戀すとか聞きしにたがふこゝちこそ
すれ

たまくくずの

と書きてやり給へれば、少輔、〔四君ヘ〕文やらんとて、歌をによび居るほどに、〔少ヨリ〕かくて賜へれば、〔丁度〕よき事と思ひて、いそぎ書きてやりつ。少將〔丶〕のかへりごとには、

夜べはことなりにき、〔誰モ〕笑はずなりにしかば、うれしくなん、委しくは對面に申サン、文はまだしく侍りつるほどに、よろこびながら、これをなん〔書キテ〕つかはしつる、

といへば、少將、いとをかしく(可笑)、女(四君)に耻(はぢ)を見するぞなど思へども、いかで(ドウゾ)、これが報(ほう)せん(北ノ方ヘノ返報)と思ひし程に、とげて(意趣ヲ果シテ)のちに引きかへて、かへり見ん(贔屓セン)とおぼすと深くてなりけり。女君(落)は、なほ(ヤハリ)〔左樣ノコトヲ〕思ひ侘びたるけしき(樣子)、いとほしうて〔此度ノ事ヲ〕聞かせ給はず。心ひと(少ノ)つにをかしければ、帯刀に〔内々〕かたりて、わらひ給ひければ、帯刀「いと嬉しうせさせ給ひたり」と喜ぶ。

少將に恨をいひしかば、至極尤の事之、さらば我等が聟に行く事は止むべし、さりながら其内實の事をば、かしこの兩親は知らざる事故、我が斷りしならば、更に他人を聟とせん、さてはをこの事、即ち馬鹿らしき事なれば寧ろ此度我に代りて四の君の聟となりて前より通じたりといふ事を、兩親始めにも知られよといひしに依り其意に任せたりと言ふべしといへるこ、是此、人に笑はるゝ兵少を四の君の聟とし、耻をかゝしめて北の方をたしなめんとてこ、

(二六)女いかゞ思はんと云々　女は四の君をいふ、四の君には別に恨もなきを、今兵少にあはせばいかに佗しと思ふらんといとほしけれど、それらを顧るにいとまあらず、北の方を憎しと思ふによりてかく計らふとこ、

(二七)二條殿に云々　少は兵部少輔方よりの歸りに、直に二條第にゆきたるに折しも落は雪の降るを見てあるこ、十二月の事なればこ、

(二八)火桶におしかゝりて云々　火鉢の圓きを火桶といひ、角なるをすびつといふ、おしかゝりはよりかゝること、まさぐるはすべてかき撫づるにいふ、

(二九)はかなくて　中納言邸にありし時もしはかなくて其儘死せしことならば深く思ふといふ事も、となり、しづかに雪をながめつゝ、そぞろに往事を思ひつゞけて、何となくかきすさむこ、

(三〇)いはでおきびに　熾、和名抄に、於岐比、猛火也とみえ、新撰字鏡には煨を訓せり、おきびは起火、今オキといへり、古今物名、おきひ、「流れいづるかたゞにみえぬ涙川おきひん時やそこはしられん」落のはかなくての上の句をうけて、左樣に思ふ事どもも言ひおかずしていたづらに火にやかれんとの事を熾にかけたり△一本「いはてを戀に」につくれり、

(三一)埋火の　前の歌をうけて埋火のといひ、さてきえでとうけて死せざりし事を嬉しと思ふにつけて、一層愛情いやまして、抱き寐るといひて同衾するこ、

(三二)女君いとさがしき事云々　歌に埋火とありてふところにいだくといふをケンノンの事なりとて笑ふとこ、さがしはケンノンといふ事は三四の一〇にいへるが如し、△諸本「いとをかし」とあり、今は萩本に從ふ、

(三三)その日になりて云々　最も希望せし聟の入來の日なれば盛に設備するこ、しつらひは取よそひ、設けなすこと、設備するこ、

(三四)てゝに云々　てゝは父こ、ちゝ、てゝ音通こ、今もテ、オヤ、テ、ゴなどいへり、

(三五)ひがみしれ人は云々　通常の人ならば其事の甚不都合なるをもて論なく制し止むべき事なるに、偏固愚痴の人故その事柄の不都合には心づかぬこ、

(三六)らうありて云々　此「らうありて」といふ詞は人品の上にも、又事柄の上にもすべて上品にしてゆかしげある事にいへり、空穗初秋に、「年の内に出でくる節會の内にいづれいと切にらうある、定め申されよや」と帝の御問に大將答へて「内宴をきこしめすもいとらうあり面白く、三月の節會は花とく咲く時はいとらうある程こ、猶ことなる花などはさかぬ程なれども、あやしくなまめきて哀におもほゆるは五月五日になんある云々」とある此「なまめきてあはれに」とあるぞ、とりもなほさずらうありの注解なりける、即ち上品にしてゆかしげなる意こ、この他物語などに多くみえたる語なるが皆此意にてよく聞ゆ、よりて思ふにらうは勞にはあらず、﨟の意にして假名もらふなるべくおもはる、くはしくは隨筆にいへり、さてこゝの意は上品にゆかしげありとて人々に褒めはやさるゝ事は、決してあるまじけれど、一と通りには接待せらるべし、さら

ば早く往きて結婚せよといふ之、「よもあらじ」の下一と通りにはの意をおのづから含めり、

（三七）人々さうぞきそしてまつ　　そしてのそは、其事に心を入れてつとめいそしむ意なる事一の五にいへり、こゝも衣服の事に心を專にしてつとめをさめて、聟の入來をまつといへる之、

（三八）その夜はしれもみえで云々　當時婚姻の當夜、男は直に女の室に入るをもて、燈火は暗く、且他に應接するなどの事もなければ中納言方にては四君はじめ左近少將と思へる之、婚姻の當夜は女の室をばほのくらくし、脂燭さして男をみちひき入るゝ事榮花物語始めこれかれのものにみえたり、

（三九）うちつけに云々　女房達の許していへる詞之、「うちつけに」は「卒然に」、又は「一向に」「ヒタスラニ」、「若くは「ヂカヅケニ」などいふ程の辭、こゝには「一向に」といふ程の意に譯すべし、なまめくは優美にしてたをやかなるさまにいふ、豫て少將の評判よきを聞き居るにより今兵少のさまをみて、かく思ひなす之、

（四〇）北方ゑみまけて　ゑみまけては笑設けてにてその笑む事の專らなるにいふ事三四の一一にいへり、

（四一）思ふやうなる聟ども云々　藏人少將をばまたなく思ひいたはる由一の卷にいへり、されば藏人少將といひ、此左近少將といひ、思ふやうなる聟と之、

（四二）只今此君大臣がね、がねのがはてにをはのが、ねは根、やがてそれとなるべき根といふ事、一說豫ての意にて、豫てそれと定むる意之、后がね、君がね、御門がね、坊がね、聟がね、大臣がねなど、中古文にいと多し、今いふ候補者之、△まろがをぢは大伯父をいふ、上文北の方の御伯父とあり、即ち少將には大伯父之、

（四三）かたちいとよく云々　少の心に落には當分此事を知らすまじとおもふ事下にみえたり、さればかく何となくいひ、又其容貌の事も反對よりしていへる之、

（四四）ことに人の云々　ほめぬ所は其家につきていふ、ほめぬ邊といふ程の事、父子ともに痴れたる人なれば、世間の評判のよからぬをおほらかにいふ詞之、さてその內に兵少の人柄を許する意もおのづからこもれる之、

（四五）なにか云々、なにかにて句を切り、然らんの意を含めて見る、落の詞をうけて、なにか、然はいふべき、今いへるはそのうち優れたるところをいへる之、いづれ近く本人をみる事ならんと之、

（四六）侍にいで　侍とは隨身雜色などの詰所を總稱していふ、東西の廊に設けおくもの、或は分ちて隨身所、雜色所などもいへり、後世武家の殿中にいへる侍とはおのづから差別あり、武家にいふは武士の詰所にして內侍、外侍などいへり、混ずべからず、さてこゝには雜色など使すべきものゝ居るところなれば、兵少方への使を命ずる之、

（四七）よの人の　世間の人は婚姻の翌日、即ち今日の今朝は戀する由に聞きおきしが、我はそれとたがひて更に戀しと思ふ情なしとて言外に女のわが意に適せずといふを知らせたる之、

（四八）たまくくずの　六帖「ないがしろ、秋萩の玉まくくずのうるさうるさ我をなこひそあひも思はず」即ち四の君に對してうるさし、我を戀ふ事勿れ、我は相思はずとの意を此六帖の歌をかりていへるなり、うるさしは、後撰集の詞書、又伊勢物語などはじめにみえて古き詞、今いふ意に異なる事なし、△此句諸本或は「さまく〵なきの」又は「たまく〵なるの」などあり、唯田本に「たまく〵くさの」とあるによりて、按ずるに「たまゝくゝすの」の「たまゝく」を「たまく〵」と誤り「くす」を「くさ」と寫しひがめたるにて、此六帖のないがしろの歌を引ける事後にみえたる「我こそな戀ひそとは」の句と照し合せても明かなれば今はかく正せり、

（四八）歌をによび居る程にて　によびは呻吟にてウメキ考ふるをいふ、今ウメクことを地方によりてはニヨフともいへり、さて兵少折柄後朝の文やらんとて歌を呻吟してある程なれば、悅びて直に書きおくる之、歌の意も考へず、引歌の事も思はざるさまげにいとおろかしき事之、

（四九）とげてのち云々　北の方に返報をなし果して後、更に十分に引たてやらんと思ひこむ事深しと之△これ少將の意地强くして義氣に富む性質を示すもの、しかも此後果して此意を決行す、後來の伏線注目すべし

〔第四〇節〕

（一）かの殿には御文云

かの〔中納言〕殿には、〔後朝ノ〕御文待つほどに、〔使〕持て來たれば、いつ（ドウカ）

々　婚姻の翌朝は後朝の文を通はす事なれば、中納言方にてはそれを待ちて返事せんと思ひ設くる之、△是深く少將を款待する意を示す筆なり、
(二)すくみたるやうにて　その深くはづるさまをいへり四君心之、△北の方云々死ぬる心地する事云々　前にみえたる北の方に心惑はすばかり云々、及び之が答せん云々の句と對しみるべし
(三)色このみの云々　色好みは少將をさしていへり、そも〳〵色好みとは好色をいふは勿論なれども、當時かたちうるはしくよにもてはやさるゝ若君達の事は必しも實に好色者な

しかと取り入れて〔四君ニ〕奉る。見給ふに、かゝれば、いみじう恥かしうて、えうちも置き給はず、すくみたるやうにて居給へり。北の方「御手はいかゞある」とて見給ふに、〔赤面シテ〕死ぬる心ちする事、かの〔落ガ〕落窪といふ名〔ナ少ニ〕きかれて、〔恥カシク〕思ひしほどよりもまさる心ちすべし。北の方〔トクト〕うち見て、〔考フルニイカニモ〕あやしう、さき〴〵〔大君始メ〕の、聟どりの文見る中に、〔是ハ全ク〕かはればいかならんと、胸つぶれぬ。おとゞ〔人々ノ坐シテ居ル間ナ〕おしはなち、〔文ナ〕引きよせて見給へど、目うとくてえみ給はで「色ごのみの、いとうすく書き給ひけるかな。〔我ニハヨメズ〕これ讀み給へ」との給へば、ふと取りて、藏人少將の、つとめての文のおぼえけるをうち讀みて「たへぬは人のとなん、書き給へる」といへば、おとゞうち笑み

らねども汎くしかいへり、下にみえたるすきものといふもこれに同じ、さてさる色このみの、わざと墨をうすくして書きたれば、わが老眼にてはよみがたしとぞ、△老人の口調うつし得て妙之、
(四)たへぬは人の　後撰戀四「みくしげ殿にはじめておひてつかはしける、敦忠「けふそへにくれざらめやはとおもへどもたへぬは人の心之けり」この歌をいへるなり、兵少より書こしたるは、あまりに甚しくて中納言にきかしむるさへ面目なきことゝちすれば、藏人少將よりかつていひこしたる後朝の歌の記憶せしをよみ、且此引歌をいへ

て「すきものなれば、いひ知りためり。はや御かへりごと、をかしくし給へ」とて、〔坐ナ〕立ち給ひぬ。四の君かたはらいたく、佗しくおぼえて倚ふしぬ。北の方、三の君に「いかにの給へるならん」と歎けば、三の御かた「いみじく思ふとも、かういはんやは。なほおしなべて、今日は戀しなどいはんことのふるめきたれば、やうかへてと思ひ給へるにや。心得ず。あやしくもあるかな。」との給ふを、北の方「さなり。色ごのみ〔ノ人〕は、〔通常ノ〕人のせぬやうをせんとなん思ふなる」といひて、「はや返事し給へ」と申し給へど、親兄弟居たちて、かくあやしがり歎き給ふを聞くに、更に起きあがるべき心ちもなくて、臥し給へれば、「我聞えん」とて、北の方のかき給ふ。

るゝ、
(五)かたはらいたく　かたはらいたくのかたはらは、外見といふ意いたしは心苦しき意にて、一般の外見に對して心苦しくにが〳〵しきに云、脇目より笑止なりといふ意にはあらず、古來の例によりて明かゝ、
△三の御方　諸本女の御方とあり、今根岸本后本に從ふ、
(六)親はらから居たち　居立ちては居たり立たりして氣をもむさま、三九の四にいへり、
(七)老の世に　かけ歌を姑く反對の意よりいふものと見なして、こなたよりも反對より少をさして老人ととりな

老の世にこひもし志らぬ人はさぞ今日のけさをも思ひわかれじ

くち惜しうなん、女は思ひ聞ゆる、

とて、使にものかづけて遣りつ。四の君は、起きあがらで臥しくらしつ。〔日ガ〕暮れぬれば、いととくおはしぬ。北の方「さればよ、物しとおぼさましかば、おそくぞおはせまし。實に樣かへて、の給へるなりけり」とて、よろこびて入れ奉りたまひつ。四の君耻しけれど、いかゞはせんとて出で給ひにけり。物うち言ひたる聲けはひ、ほれ〴〵しくおくれたれば、女君、〔カチテ〕藏人少將などに聞きあはする〔左少ノサマト異ナル〕に、あやしげなれば、我こそな戀ひそとはいはまほしけれと思す。〔兵少ハ〕夜ぶかく〔コ、チ〕出でぬ。」

していへり、さて老いて戀といふ事も知らぬ人には何さま今日の今朝即ち後朝の情をも何等感ずることあるまじとゝ、さてこれは北の方の代りてよみたる事を知らしめんがため、口をしき事と本人は思ひて返事も申さぬ故、われより申し上ぐといへるゝ、
△此段北の方はじめの深く憂ひてさま〴〵と心配するさま筆致味ふべし、
(八)物しと云々　物しは心に叶はぬ事一〇の一七にいへり、氣に叶はざる事ならば宵よりは來らじとゝ、婚姻より三日目迄は必ず來るべき先は定めなれば、氣に叶はずともさすが

三日のまうけ、いといかめしうし給ふ。侍士の入るべき所、雜色所など、さま〴〵に〔飮食ノ〕物するなどして待ち居給ふ。御聟の少將まで、出で給ひて、いろぎ給ふ。只今の御代のおぼえのたぐひなき君なれば、もてはやさんとて、おとども出で居て待ち給ふに、まづこなたへとよばすれば、ゆくりもなく〔席ニ〕のぼりて座ぬ。火のいと明きに見れば、首よりはじめて、いと細くちひさくて、面は白きものつけ、化粧したるやうにて白う、鼻をいらゝかし、さし仰ぎて居たるを、人々あさましうてまもるに、この兵部少輔に見なしては、えねんぜず、ほゝと笑ふ中にも、藏人少將は、はな〴〵と物笑ひする人にて、笑ひ給ふ事かぎりなく、「おもしろの駒なりけりや」と、扇を叩きて笑ひて〔坐ナ〕立ちぬ。殿上にても、物よ

に來らざる迄の事はなかるべけれど、來るともおそかるべき筈と之、

〔九〕物うちいひたる云々　今夜も燈火くらければ、明らかに其容貌を見るを得ず、只その様子ありさまにて、その大かたを察するに、かねて藏人少將にきゝたるとは様子かはりていぶかしく思ふ之、

〔一〇〕我こそなこひそとは云々、即ち前の玉まくくずのゝ歌之、我こそおもひも思はずといひこしたれども、我方にてこそ我をなこひそとはいひたけれと之、△諸本この句「我こそ戀ひさらめ」又は「我こそ戀ひさめ」或は

り殊に（モ別段ニ）「おもしろの駒、はなれて來たり」とて〔誰々モ〕笑ふ〔コト〕なりければ。かくれに（內證）居て「こはいかなる事ぞ」（藏少 是ハドウシタコトゾ）ともいひやらず笑ふ。おとゞ（中納言）はあきれて（呆）、え物も言はれず、人の〔中ニ入リテ〕はかりたりけるなめり（タバカリタル事ナラン）とおぼすに、たゞ（一向ニ）腹立ちにはらだゝれ給へど、いと（最）人多く（多人數）見ると（集リ居ルヿト心ニ思ヒ）おぼししづめて「こはいかで（中 ドウシテ）、かくおぼえなくて（カヤウニオモヒガケナク）物し給（御入來アリ）へるにか（シヿニカ）。いとあやしく（至テ不審ニ）」〔思ハル〕との給へば、〔少輔ハ〕かの少將の敎へしまゝに、ほれて（ボンヤリシテ）いひ居たれば、いふがひなしとて（フガヒナキヿト思ヒテ）、盃（さかづき）もさゝで入り給ひぬ。〔兵少ノ〕供の人々は、かく〔少輔ノ〕笑はるゝをも知らで、〔酒肴ヲ〕居ゑたる所どもにつきて、〔各〕喰ひのゝしりて（騒ギテ）、座に居並みたり。〔少輔ノ席ニハ〕人一人もなく立ちぬれば、少輔はしたなくて（ツキホナクテ）、例の方より（ニ）入りぬ。北の方〔此事ヲ〕聞きて、さらに物もおぼえず、あき

「我こそは戀ひす」とあり、此内「我こそ戀ひざらめ」とあるは意はやゝとほりたるやうに聞ゆれど、こその結二重になりて、この頃の文のさまにあらず、かた〴〵たまく葛のの句に照して、「我こそなこひそ」の寫誤なることしるければ正しつ、

〔一一〕三日のまうけ云々　當時婚姻より三日目の夜は盛に祝ふ風習なりし事は已にいへり、左近少將は攝家の公達といひ、殊には人物もよく〳〵大臣となるべき人柄なれば中納言方にては此三日の設備を尤も盛大にいとなむ之、

れ惑ふ。おとゞは「老のうへに（老年ニ及ビテ）、いみじき（甚シキ）恥見つる世かな」とて、爪はじきしていりて（入）居給へり。四の君は、凡帳の中にすゑたりけるに、〔少輔〕ふと（卒然）入り來て臥しにければ、え逃げず（逃グルヿ能ハズ）、御達（女房達ハ）はいとほしがりあへり。媒（なかだち）したる人とても、〔モトヨリ〕仇敵（あたかたき）にもあらず、四の君の乳母（めのと）なれば、〔理屈ナ〕いふべき方なし。誰も〳〵歎きあかすに、〔少輔ハ〕四日よりはとまる（留リ居ルヿト）と思ひて、無期（むご）（イツマデモ子テ居タリ）にふせり。藏人少將の君、「世に人こそ多かれ。かゝるおもしろの駒をば、いかで（何トシテ）ひきよせ給ひしぞ、いと（極メテ）いふがひなかりける（フガヒナキ事デアル）わざかな。かゝるものと、〔一同ニ〕出で入りせんこそわびしけれ。〔世間ノ人〕殿上の駒とつけて（名ヅケテ）、〔何方ヘモ〕かしらもえさし出でぬしれもの（痴者）ゝ、いかでより來にけん（ドウシテハイリキタラウ）。そこ（其所）たち（達）のみはかりて（見計）し（爲）給へるならん」と、笑ひ嘲哢（てうろう）し給へば、三の

（一二）さぶらひの入るべき所云々　召連れ來るべき供人も、それ〴〵室を定めて、饗應すべき飮食を備へ設くるゝ、

（一三）御聟の少將まで云々　打語ひて出入せんにいとよき事哉といひし事前にみえたり、即ち交を入れんとする意にいづるを見る、

△これら筆者の注意深くおもふべし、又只今のみよのおぼえのたぐひなき云々、上卷少納言の詞に「只今なりいで玉はんと人々ほむ、帝もときめかしおぼす」の句と照らしみるべし、少の人柄草紙地にてはいはずして、かく人々の詞によりてあらはすところ、筆意

君、更に知らぬよしをいひて、〔四君ノ〕いとほしがり歎き給ふ。かゝるひがものなれば、世づかぬ文書き出したるなりけりと、人知れず思ひて、いみじくいとほし。北の方の心地たゞおもひやるべし。巳午の時まで手も洗はせず、粥もくはせで、ありとあるかぎり、その御方にとて、多かりし人々も、誰かそのしれものにつかはれんとて、〔是マデ〕出て來しも出でこず。つく〴〵と臥したるに、四の君見るに、顏の見ぐるしう、鼻の穴よりは人通りぬべく、吹きいらゝげて臥したるに心づきなく、愛敬なくなりて、やをら物するやうにて、起きて〔室ヲ〕出でたるに、北の方待ちうけて、〔コトバトヂ〕の給ふ事かぎりなし。「おいらかにはじめより、かう〴〵したりと言はましかば、忍びてもあらましを、所あらはしをさへして、かくの

尤も妙なりといふべし、

（一四）ゆくりもなく　ゆくりなしと同じく、もと緣由無くよりいでし語にて「不意に」「突然」「俄に」などいふ程の意に用ふ、かゝる席にいづるには、おのづから至當の容儀ありて、動作の風度見るべきものなかるべからず、さるを何の容躰もなく、突然席につけるゝ、

（一五）おもては白きものつけ云々　白きものは、和名抄に、粉、之路岐毛能　とあり、白粉にて即ちオシロイ之、顏色の生白きをいへり、

（一六）人々あさましう

ゝしりて、我も人も、ゆゝしき恥をと[illegible]てしはじめしぞ」と責むれば、四の君、あさましういみじうなりて、たゞなきに泣く。我かゝるものあらんとも知らぬに、かくつきゞ〴〵しく言ひければ、あらがふべき方なし。藏人少將、いかに思ひ給ふらん、女の身は、心憂きものにこそありけれと、〔心ニ思ヒツヾケテ〕泣けどいふかひなし。」

少輔、いつとなく臥したりければ、おとゞ「いとほし、かれに手あらはせよ、物くれよ、かゝる者に〔サヘ四君ガ〕捨てられぬと〔人ニ〕いはれんは、又類なくいみじかるべし。宿世や、さしもありけん、今は泣きのゝしるとも、事のきよまはらばこそあらめ」との給へば、北の方「あたらあが子を、何のよしにてか、さるものにくれては

て云々　あさましは驚き呆るゝ狀なる事一三の一〇にいへり、左近少將とおもひの外突然別人のあらはれたるをもて驚き呆れてよくみれば　兵部少輔之となり、

（一七）えねんぜず云々　ねんぜずは「コラヘラレズ」といふ事、「ほゝと」は「クスヽヽ」といふ事なるは共に前にいへり、上文「むかひ居たらん人はげに笑はではえあるまじ」といへり、これに對する人誰も笑はざるを得ざる之、

△藏人少將ははなく〳〵と云々　上卷、此少將の事を「この聟の君はおしき事をもかしかましくいひ、よき事をば

見ん」と惑ひ給へば、「あしき事なのたまひそ、かゝるものに捨てられぬといはれんは、いかゞいみじかるべき。」北の方「こずならんときや、さも思はん。只今は、さもせまほしくぞある」との給へば、〔手も洗はせず、物もくれず〕ひつじの時まで、人も目見入れねば、少輔、苦しうて出でていにけり。夜さり〔少輔〕來たるに、四の君泣きて、更に出で給はねば、おとゞ腹だち給うて「かくおぼえ給ひけんものをば、何しにかは、忍びてはよび寄せ給ひし。人の知りぬるからに、とかくいふは、親兄弟にふたかたに、耻を見せ給はんとや」と、添ひ居てせめ給へば、〔四君〕いみじう佗しながら、なく〳〵〔少輔ノ處へ〕出でぬ。少輔、なき給ふをあやしくおもひけれど、物も言はで臥しぬ。かく女もわびしと思ひわび、北の方も〔少輔トノ中ヲ〕とりはなち

けちえんにほむる心ざま」とあり、潤達愉快にして物に拘はらぬ人のさま　よくゑがき書せり、

（一八）おもしろの駒なりけりやとて云々　兵部少輔顏色生白くして頸長く、顏のさま駒に似たる事は前にみえたり、されば殿上にては常にこれをおもしろの駒と名づけて人々笑ふ故に愧ぢて交際をもなさゞる之、されば平日の綽名をいひて笑ふ之、扇を叩きて云々其笑ふさまをあらはす、

△これらの事草紙地には別に書あらはさずして、人々おもしろの駒と綽名せし事、又其痴者なるをもて之を嘲哢

てんと惑ひ思へど、おとゞのかくの給ふに、つゝみて〔少輔ノ處へ〕出で給ふ夜、出で給はぬ夜ありけるに、宿世うかりける事は、いつしかとつはり給へば、「子うませんと思ふ少將の君の子は出でこで、このしれものゝ〔種ノ〕ひろごる事ヨサテ〳〵」との給ふを、四の君ことわりにて、いかで死なんと思ふ。藏人少將、思ひしもしるく、殿上の君達、〔藏少ヲ見テ〕「おもしろの駒はいかに、この頃年かへらば、御ひきにて白馬に出し給へ。」〔中納言方デハ〕君とあれと、いづれをか思ひましたる」とて笑ふに、塵もつかじと思ふ心に、いと苦しとおぼゆ。〔藏少ハ三君ヲ〕もとよりも、いと思ふやうにはおぼえざりしかど、いみじういたはらるゝ〔義理〕に、かゝりてありつるを、これにことづけて、捨てんと思ひなりて、やう〳〵〔中納言邸ヘ〕來ぬ夜のみ

する等の意をおのづから知らしむる所何等の妙筆ぞ、

多かれば、三の君物おぼす。

(一九)こはいかでかくおぼえなくて　「おぼえなくて」は「オモヒガケナク」といふ程の意、この語は「おもはずに」といふ語と相類していさゝか異なり「おもはずに」は　案外ニ」といふ意「おぼえなく」は「オモヒガケナク」なる事古來の、例によりて明かなり、

(二〇)いふがひなしとて　兵少の前かたより四君に通ひしよしをいへばなり、

(二一)はしたなくて例の所より入りぬ　はしたなしは三六の一三に注せり、こゝは「ツキナナキ」の意なり、例の所よりは例の所になり、かゝる所によりといふ事當時の辭なり、竹取に「あたりよりだになありきそ」蜻蛉日記「わが門より例のきら〳〵しうおひなどして渡る日あり」尚例いと多し、皆にといふ事なり、くはしくは皇國文法釋義にいへり、

(二二)つまはじき　三一の一一にいひおけり、

△なかだちしたる人云々　上文人のはかりたりけるなめり云々と照しみるべし、かくはいふものゝその媒は四の君の乳母なれば咎むべきにもあらず、誰を相手ともなしがたしとなり、

(二三)四日よりはとまると思ひて　婚姻よりして三日目までは通ひて來、さて三日の翌四日目はその儘とまりてもある事風習なれば、少輔之を聞きしりたるにや今朝はいつ迄も寐てあるなり、無期は際限なきをいふ、

△かかるものと出で入り云々　上文「打語ひて出入云々」と照しみるべし、

(二四)かゝるしれ者なれば世づかぬ云々　世づかぬは十二の二六に注せり但しこゝは人情に通ぜぬとやうの意にいへり、少將よりよみてやりたる事はもとより知らねば、只馬鹿者ゆゑかゝる人情に達せざる文をもよこしたるなるべしと思へるなり、

△北の方の心地云々　呼應の句

(二五)巳午の時　巳は午前十時、午は正午なる事前にいへり、

(二六)つく〴〵と　二の八に注せり、こゝも徒然の意なり、

(二七)北の方待ちうけて云々　即ち少輔が中納言にいひし、前方より四の君に通じたりとの事をいひて、北の方の責むるなり、

(二八)おいらかに云々　おいらかには「オダヤカニ」なる事三八の四四にいへり、少輔と通じたりとの事を、最初より穩便に言はゞ、不都合ながらも内々にしてもおくべきものを、さる事も言はざる故にそれをば知らず、少將を聟にとりたる事と思ふをもてかく所あらはしをも、盛にする事となれりとなり、

(二九)所あらはしをさへして云々　所あらはしとは三日の祝をいふ、俗にヒロメなどいふ意、榮花夕しで「さて日暮るゝも心もとなくておはしましぬ、四五日ありてぞ御ところあらはしありける、云々今宵はもちひの夜とか聞き侍りつる」石淸水物語「八月になりぬれば殿の姫君の御いそぎ限なくわらは下仕など中宮の御まゐりに劣らず、限なく盡して通はせ奉り玉へり、所あらはしの程など思ひやるべし」などあるにて知るべし、兵部少輔とは知らず、全く左近少將と思ひてかく盛なる所あらはしをさへして、か程に騷ぎ立てゝさて、兵部少輔を聟としたりといはれては、本人は勿論、親はらからともに甚しき耻となり、此所あらはしはもと三日の夜に行ふ事なるを、右の榮花の文によれば後には便宜によりて日をのばしても行ひしなり、さればかの三日のもちひも亦この所あらはしの時に用ひて、必三日の夜には限らざりし事も右の文にてしらる、

(三〇)我かゝる者あらんとも云々　四の君心なり、四の君はもとより知らざる事なれば、かゝるものありとも思はずといふなり、されども母北の方のかくまさ〳〵し、決定していふ事なれば、爭ひいひひらきすべきにもあらずとなり　△これ四の君の性のたゆき所にて四の卷師中納言の心に思ひおとさるゝ所、

(三一)かゝる者に捨てられ云々　中納言は兵少が言によりて、四の君の前より少輔と通ぜりと思へる故に、今更さる者にまでも捨てられたりと世間にいはれては耻辱の上の耻辱となり、

(三二)宿世やさしもありけん、前世の宿業に於て左樣にあるべき因をなしおきつらんとなり、宿世の事は一二の一七にいひおけり、

(三三)只今はさもせまほし云々　中納言は兵少に手水を出し、食事をもせさせよといへど、北の方之に從はず、接待を踈にして去らば去らしめんと言へば未時まで誰もよりつかぬなり、未の時は午後二時をいふ、

(三四)親はらからに云々　すでに少輔を聟として親兄弟に耻をあたへ、今又少輔に捨らるゝ仕向をなして耻を與へんとすといふをふたかたに云々とはいへる之、

△少輔なき玉ふを云々　今朝さばかりの冷待をうけて、今夜また來り、且泣くをみて怪しく思ふなど、是其痴なるをあらはす所、

(三五)宿世うかりける事は云々　うかりけるとは憂かるべきとの事宿業あしく憂ふるべき事には妊娠したりと之、つはるは新撰字鏡に膲、孕始兆也、豆波利乃登支、今もいふ語なり、但し徒然草には木の葉のうちより芽ざしきざすにもいへり、

(三六)この頃年かへらば云々　白馬とは、正月七日白馬節會と稱し、禁中にて御儀式ある日、左右馬寮よりひかるゝあをうまの事をいふ、此御節會は仁明天皇承和元年正月豐樂院に於て青馬をみそなはしたるに淵源すといふ、白馬とかきてあをうまとよむ、白馬をもとゝする故なりとぞ、又馬は陽の獸にして青は春の色、正月七日に青馬を見れば其年の邪氣を除くといふより青馬を用ふといへり、さて此少輔を面白の駒と綽名するをもて時已に十二月の末にして白馬の節會にも程近ければ、それによせて嘲哢する之、ひきは最負の字音語・手引といふ程の語、下にも「弁の君のひきにて參りたり」とありテツルの事、今もいふ詞之、馬をば牽くといふよりそれにかけていへり、藏少は少輔と相聟となりたる事なれば、藏少の手引にて少輔を白馬の節會の白馬に出せといひ、又藏少と少輔とは中納言方にていづれを大切に取扱ふなど問かくと之、すべて嘲哢の詞之、

(三七)塵もつかじ　今鵜の毛程も點うたれじといふ意之、藏少平日の氣象一點たりとも人に批難せられまじと思ひ居るにと之

〔第四一節〕

(一)かの二條殿には云々　あらまほしくなるとは、志かありたく思ふ通りになるをいふ、容姿などの思ふ通りなるを、あらまほしげといふが如し、二條の第宅のさま日々に整頓して思ふまゝなる躰裁となるをいふ、

(二)女房多かる所なん云々　女房達多人數奉仕する家は何となく、心ゆかしくなつかしげにて、花やかに派手にみゆるものと之、心にくしはゆかしくなつかしくの意なること、二四の十三にいへり、

(三)これかれにつきつ云々　上文の「聞ゆるとて」の句におのづから之を求め呼ぶ意あり、されば此彼の人に由り、其手引にて來り仕ふるもの、二十餘人

かの二條殿には、日々にあらまほしくなりまさる、男君の〔落チ〕もてかしづき給ふ事限なし。「人はいくらも參らせ給へ、女房多かる

所なん心にくゝ、花やかにも聞ゆる」とて〔求メラルレバ〕これかれ〔ノ人〕につきつゝ、〔其〕ひきぐ\に參れば、二十餘人ばかりさぶらふ。男君も女君も、御心ざまのどやかに、よくおはすれば、つかうまつりよし。まゐりまかんで、さうぞきかへつゝ、今めかしき事多かり。衞門を第一の者にし給へり。帶刀、おもしろの駒の事を、妻に語りければ、した心には、いみじうねたかりし、答すばかりの身にもがなと、思ひしゝるしにやと、うれしけれど、〔ウハベニテハ〕「あないとほしや。北の方、いかにおぼすらん、〔此事ニテ〕さいなまるゝ人多からんかし」といふ。かくてつごもりになりぬ、大將殿よりは、「少將の君の〔正月ノ〕御裝束、今は疾くしたまへ。こゝには內の御事に、いとまなくなん」とて、よき帛、綾、茜草、蘇枋、紅　く

に至るとぞ、
(四)まゐりまかんで云々 奉仕する女房の御殿に參りのぼり、又曹司へ來りまかんでつゝ、衣裳をとりかへ引きかへ着かへて綺羅を盡すぞ、今めかしは、當世風といふ事にて、即ち花やかにはでに賑はしき意、
(五)衞門を第一の者にし玉へり、女房中第一等の者とすることと△上文「阿漕おとなになれ」及び「男も女もたぐひなくおぼしたる理なり」の句と照しみるべし、
△志た心にはいみじうねたかりし云々 上巻「我身只今人々しくてもがなむくいせんとおもふも胸はしる」の句

奉り給へれば、〔落ハ〕もとより〔女巧ノ事ヲ〕よくし給へりける事なれば、いそがせ給ふ。さて少將の君〔ノ引〕につき奉りて、馬の允になりたるゐなかの人の德ある、〔者ヨリ〕絹五十〔疋〕まゐらせたれば、〔奉仕ノ〕人々にさま〴〵賜はす。衞門、とりくばりしおきつるにも、目やすく見ゆ。この二條殿は、北の方の御殿なり、むすめ二所、おほい君は女御、男ハ太郎はこの少將、二郎は侍從にて、あそびをのみし給ふ。三郎は童子にて、殿上し給ふ。乳兒におはしけるより〔父大將〕この少將を、世に〔比類〕なくかなしくし奉り給ふ、人に譽められ、帝もよき人に思しめしたれば、ましていかならん事を、し給へりとも〔カレコレハ〕の給ふまじ。かの御事になれば大殿ゐみまけ給へれば、殿に仕うまつる人、雜色牛飼まで、この少將殿になびき奉ら

と照らしみるべし、
(六)かくてつごもりになりぬ つごもりは月ごもりにて、もと晦日の事なれども轉じて月末四五日の間にいふ事、ついたちといひて、月初四五日の程をいひ、もちといひて十五日の前後にかけていふに同じ、枕草紙、すさまじき物に、「師走のつごもりのなが雨」源氏若紫に「彌生のつごもりなれば京の花ざかりは皆過ぎたり」など皆月末の事にいふ、こゝも月末の事にて晦日といふにはあらず、
(七)大將殿よりは 母北の方より二條殿へ、使にて云はせ玉ふぞ、内の御事とは少のはらからなる女御の春着の

ぬなし。かくて年かへりて、朔日の御さうぞく、色よりはじめて、いと淸らに〔落ノ〕し出て給へれば、いとよしとおぼして、着てあり給ふ。御母北の方見給ひて、「あなうつくし。いとよくし給ふ人にこそ物し給ひけれ。内の御方などの、御大事あらんには、聞えつべかめり。針目などの、いと思ふやうにあり」とほめ給ふ。司召に〔少將ハ〕中將になり給ひて。三位し給ひて、おぼえまさり給ふべし」

三の君の藏人少將、かの〔大將ノ〕中の君を聞え給ふを「いとよき人ぞ。たゞ人とおぼさば、これを〔聟ニ〕取り給へ。見るやうあり」と、常に申し給ふ。かの〔中納言ノ〕北の方、これをいみじき寶に思ひて、これが事につけて、我妻を懲ぜしぞかしと思ふに、〔藏少ヲシテ三ノ君ヲ〕

仕度にいそがしきをいへるなり、
(八)よききぬ綾云々、きぬ綾は地合、おかね以下は染草也、當時衣服は手染にする事なれば、染草を添ふるなり、
(九)ゐなかの人の德ある　德あるとは財産ある をいふ事此頃の詞づかひなり、田舍の財産家にして少將の手引にて右馬允になりたる人より絹五十疋贈進したるなり、
(一〇)目やすく　見やすくにて穩當にふさはしき事、こゝにては不公平なる事なきにいふ、
(一一)あそび　打任せて管絃の事にいへり、もと遊樂の意よりおこりたる名、また遊女の

いとすてさせまほしきぞかし。中將かくいふを、見るやうぞあらんとて、〔中君ナシテ〕時々返りごとせさせたまふに、少將たのみをかけて、三の君〔ノ方〕を、たゞかれにかれゆく。〔前ニハ〕よしとほめしさうぞくも、〔今ハ〕すぢかひ、あやしげにし出づれば、いとゞ〔ソレニ〕かこつけて、腹を立ちて、しかけたる衣どもゝ着で、「こは何わざしたるぞ、いとよくぬひし人は、何地いにしぞ」と腹立てば、三の君、「男につきていにしぞ」と答へ給へば、「なぞの男につくべきぞ、たゞにぞ出でにけん。こゝにはよろしき者ありなんや」との給へば、三の君「されば、異なる人も、なかるべきにこそあめれ、御心を見ればといへば、「さなり。おもしろの駒侍るめり。世にめでたき人も參りけりと、心にくゝ思ふ」など、まれ〳〵來ては、ねたまし

事にもいへるはあそびめの畧、こゝにいふは管絃の事なり、
(一二)三郎は童子にて云々　即ち童殿上なり、攝家淸華其他名家の子孫殿上の作法を幼年の時より見習はんがために童躰にて參內し、殿上名簿に其姓名を載せらるゝをいふ、およそ初めて昇殿する人は藏人につきて參入の由を奏し、其由聞し召したる仰を得て小拜の後殿上名簿に姓名を載せらるゝ例なるが、童殿上は參入の由を奏せず、直ちに姓名を載せらるゝ旨侍中群要に見ゆ、
(一三)ちごにおはしけるより云々　父大將此少將を最鍾愛する上

かけていぬれは、いみじう妬み歎けどかひなし。北の方、落窪のなきを、ねたういみじう、いかでくやつのために、いまはしきしるし見せんと惑ひ給ふ。われは幸福あり、よき聟とるといひしかひなく、おもておこしに思ひし君は、たゞあくがれにあくがる。よきわざとていそぎしたるは、世の笑はれぐさなれば、病人になりぬべくなげく。」

正月つごもりに、〔參詣事ニ〕よき日ありけるに、物詣する人ぞよかなるとて、〔中納言ノ〕三四の君、北の方などして、車ひとつ〔ニ合乘〕して、忍びて淸水にまうづ。をりしもこそあれ。三位中將殿の北の方、男君もまうで給ふに、中納言殿の車は、疾くまうで給ひければ、〔中將ノ車ヨリ〕さきだちゆく。しのびたりとて、ことに御前もなくかいひ

に、其人物人にほめられ主上も御寵遇ある事故別して也、かなしは三四の七、ゑみまけては同〔一一〕に注せり、△上卷少納言の詞および、上文「只今の御代のおぼえのたゞひなき君」等の句と對しみるべし、

〔一四〕内の御方云々　即ち女御の事也、御大事とは晴れの事を云、晴れの事ならんには必衣裳を調製すべければ、左樣の時は裁縫を囑すべしと也

〔一五〕つかさ召　除目の事、又春のつかさめしともいふ、正月行はる、春は縣召とて主として諸國司の任官ある事なれども、京官をも任ぜらるゝ事勿論

すみたり。中將殿は、男女おはしければ、御前いとおほくて、前おひちらして、いと猛にてまうで給ふ。〔サレバ〕さきなる車は、〔中將ノ車ニ〕尻ばやにおはれて、人々わびにたり。たいまつのすきかげに、〔見レバ〕人のあまた乘りたればにやあらん。牛くるしげにて、えのぼらねば、後の御車どもせかれて、とゞまりがちなれば、雜色どもむつかる。中將殿人を喚びて「誰が車ぞ」と問はすれば「中納言殿の北の方の、忍びてまうで給へる〔ナリ〕」といふに、中將嬉しくまうであひにけりと、下にはをかしくおぼして「男ども、さきなる車疾くやれといへ、さるまじうは、道傍にひきやらせよ」との給へば、御前の人々「牛弱げに侍れば、えさきにのぼり侍らじ。かたはらに引きやりて、この御車を過せ」といへば、中將「牛弱くば、お

也、此時少將は中將に進みし也、

〔一六〕三の君の藏人少將云々、藏少が三の君を捨てんとおもふ由は前に見えたり、さるからに此中將の妹なる中の君を妻に得んとて言込みし也、こは中將道賴よりほのめかしたるに依るなること下にみえたり、

〔一七〕たゞ人とおほさば云々、たゞ人とは臣下をいふ、禁裏に對し奉りていふ名稱なり、當時女もたる歷々にては禁裏へ奉る事を主とするからにかくいへり、臣下に嫁せしめんとならば、此人を聟とすべし、見る所ある人物と也、

〔一八〕これが事につけ

もしろの駒にかけ給へ」との給ふ聲、いと愛敬づきてよしあり。車にほの聞きて「あなわびし、誰ならん」とわびまどふ。猶〔ヨケズシテ〕さきに立ちてやれば、中將殿の人々「えひきやらぬは、なぞ」とて、手礫を抛ぐれば、中納言殿の人々腹立ちて「ことゝいへば、大將殿ばらのやうに、〔井バルコヨ〕中納言殿の御車ぞ、はやうてかし、」といふに、御供の雜色ども「中納言殿にも恐づる人あらんや」とて、手礫を雨の降るやうに、車になげかけてあらがへば、中將殿の〔御供ノ〕人々かたやうにあつまりて〔中納言ノ車チ傍ニ〕押しやりて。〔中將ノカニハ〕御前よりはじめて、人いと多くて、うちあふべくもあらねば、〔車ノ〕片輪を堀におしつめられて、物もいはでありて「なか〳〵無德なるわざかな」と、いらへしたる男

て云々 ちようは懲の字音にてこらしむる意より轉じてたしなめくるしむる事にいへり、竹取に「血の流るゝまでにちようぜさせ玉ふ」うつぼ樓上「かゝる御使をめしこめてかうちようぜさせ玉ふいとふびんにと申す」同國讓「めし入れてちようぜられつるに困じて」枕草紙「此翁丸うちちようじて犬島につかはせ」などにてしるべし、打してとするはあたらず、偖これが事とはかの藏少の縫物およびを拾はれし等の事をいへり、

〔一九〕少將たのみをかけて云々 中の君より時々返事あるをもて、此緣談の成るべき事と

どもいふ。〔車ニ〕乘りたる北の方をはじめて、ねたがりまどひて、誰がまうで給ふぞ」と問へば、「左大將殿の三位の中將殿のまうでたまふなり。只今の一の人にて、あしくいらへたゞなり」といふを聞きて、北の方「何の仇にて、〔此人ハ〕とにかくに〔我方ニ〕はぢを見せ給ふらん。この兵部の少輔のことも、これがしたるぞかし。おいらかにいなといはましかば、さてもやみなまし。よそ人も、かくかたきのやうなる人こそありけれ。何者ならん」とて、北の方手をもみ給ふ。〔輪ノハマリシハ〕いと深き堀にて、頓にえ引き上げで、とかくもてさわぐほどに、輪少し折れぬ。いみじきわざかなとて、になひあげて、縄もとめ來て、結ひなどして「かへらんやは」とて、やうやうのぼる。中將殿の御車どもは、〔淸水ニ着キテ〕梯殿にひきたて

賴みて、三の君にはますます疎くなりゆくを云、かれにかれゆくは、離れに離れ行くにて、離をかるといふは古言、目離る、さ離る、遠さ離る(さは添附のさ迷ふのさに同じ)の類也、

〔二〇〕よしとほめし云々 落の縫ひしを藏少がほめて「いとよしよくぬひをほせたり」といひし事、又「藏人少將の君も御衣どもわろしとて出づと入るとむつかりて着ゐはす」などあるに照して心得べし、

〔二一〕なぞの男に云々 三の君が男につきて去りたりといふをうけて、男につきて去り

ゝ、無期に立ち給へるに、〔中納言車ハ〕やゝ久しうありて、辛うじてよろぼひ來ぬ「いとたけかりつる輪、折れにけりや」とて、又わらふ。よき日にて、〔參詣ノ人〕梯殿に隙なければ、〔中納車ハ〕かくれのかたより下りんとおもひて、過ぎてゆく。中將殿は、帶刀を喚びて「この車のおり所見て告げよ。そこに居ん」との給へば、走りいきて見れば、〔カ子テ〕知りたる法師よびて「いと疾くまうでつるを、此三位中將とかいふもの、まうであひて、しかじかして、車の輪折れて、今まで侍りつる。局ありや、疾く下りなん、いとくるし」といへば、「いと不便なりける事かな。更に御堂の間なん、かねて仰せられ侍りしかば、〔用意シテ〕取り置きてはべり。かの中將殿も、いづこにかさぶらひ給はんずらん。論なうえせものに、局襲ひ敷かれんか

し。あはれ、いと（至テ）不便なる夜なめりかし（不都合ナル晩ノヤウヂヤ）」といへば（北）「さばとく（ソンナラハヤク）下り（お）なん。人なき局（席ナリ）とて、とられなん」といそげば（急ゲバ）、〔寺ノ〕男一人御局（御席取）見おかん（計ラハン）とていく後（しり）につきて、帶刀〔席ナ〕見おきて、走りかへりて、（帶）「かう／＼なん申しつる。かれ（北ヲ指ス）がいかぬさきに」とて〔車ヨリ〕おろす。〔落ニハ〕御凡帳さして、男君はなれ給はず、かしづき（大切ニ附添フ）給ふ事かぎりなし。

しにはあらじ、此家を厭ひて去りしならん、かゝる家には宜しき者は住みつきて居る事あらじとゝ、こゝにいふ宜しきは今いふ意の宜しにて二一の一にいへるとは異なり、此意のよろしも古くよりいへる詞にて日本記萬葉などの歌にもみえたり

(二二)されば異なる人も云々　異なる人とは、人に異なる人といふにて、即ち宜しき人といふ事之、少將の詞をうけてされば之、といひ(されはにて句を切りて見るべし)、さて宜しき人もなしと思はるゝならん、君が御心につきて見ればといふにて、宜しき人ありても少將が變りし心よりは、さやうにおもはるゝならんとの意を含めていへる之、さる故に更に少將は面白の駒の事をいひいだす之、

(二三)さなりおもしろの駒云々　三の君が異なる人も云々といへるをうけて、さなり、ナニサマ尤なり、おもしろの駒といふ者があり、實に世にすぐれたる人も來る家なりとゆかしくなつかしく思はるゝ家ぞと嘲哢する之、

(二四)われはさいはひあり云々　上文「かしこくもとりつる哉吾はさいはひありかし、思ふやうなる聟どもをとる哉」といひしをうけて、二人の聟の事をいへる之

(二五)あくがれにあくがる　あくがるはあこがると同じ、在處（あこが）離るの義にて、すべて其處を離れ去ること、

心にいふは心の物を思ひてその方に離れ去る之、こゝには中納言方を離れ去ることにいへり、

(二六)正月つごもりに云々　つごもりは、これも月末をいへること前に同じ、よき日とは方術上にいへるものにて參詣によしといふ日との謂之、天氣よき日といふにはあらず、

(二七)三四の君云々　車中には六人をのすべきなれば同乘せる之、

(二八)清水　即ち音羽山清水寺なり、本堂を揚柳觀音といふ、

(二九)しのびたりとて云々　内々の參詣、即ち微行なれば、中納言の北の方ともなく供連もやつして、人少にて參詣する之、かいひすみはヒッソリとしての意なる事一〇の二にいへり

(三〇)しりばやにおはれて　しりばやは牛馬のはやく行くこと、「はしりばや」の略にもあらんか、中納言の車、後なる中將の車におひせまられて迷惑する之、△「おはれて」の句諸本こされてとあり、田本、根岸本に從ふ、おはを古佐の草に誤れるなり、

(三一)たいまつのすきかげに　夜籠（よごもり）のための參詣なれば、松火ともしてゆく之、當時挑燈なき世なれば、夜行には松火ともしたる事前にいへり、松火の火影にて簾ごしに車中の人影の見ゆるを、松火のすき影といへる之、六人乘たる由下文にみえたれば、あまた乘りたりとはいふ之

(三二)さるまじうは　然（しか）あるまじうはにて、即ち速く行る事能はずは之、傍にひきやらせよは、道の側に除けて我車を先んぜしめよと之、

(三三)牛弱げに云々　中將の前供の人々中納言の車に言ひかくる詞之、

(三四)牛弱くは云々　馬も車を引くものなればいへり、愛敬づきてよしありとは、こわねいかにも愛嬌ありてなまめかしきうちに、又何となくけだかくきりゝとしたる樣子あるをいふ、

(三五)たぶてをなくれば　たぶてはつぶてに同じ、つた通音、礫なり、萬葉にもたぶてとあり、小石を投ぐる之、

(三六)ことゝいへば　中古一種の詞づかひにて、「其事ト云フニシテモアマリニ」といふが如き意なり、源氏夕霧、「からうじて明がたになりぬ、かくてのみ事といへばひたおもてなるべければ」同椎か本「云々はし近うもみしろぎ侍らぬと聞え玉へば、ことゝいへば限なき御心の深さになん月日のかげは御心もてはれ／＼しく

もて出させ玉はゞこそ云ゝ」皆此意之、これもその意にて、こゝは俗に譯すれば「ナシノ仰山ラシイ」といふ如き意となる、

△御前よりはじめて云々　上文「車一つして忍びて」といひ「ことに御前もなくかいひすみたり」といふと「御前いと多くて前おひちらしていと猛にて云ゝ」以下の文と對しみるべし、偖又此段中將の車の勢たけきさま、中納言の車の無人にして勢なきものから猶屈せざるさま文章外に見るが如し、これ文氣の妙なるによるもの、

(三七)片輪を堀に云ゝ　堀は溝をいふ、車の道傍に押寄せらるゝ時溝に片輪の沒せし之、かゝる目におへども力及ばざれば默してある之、

(三八)なかく＼無德なるわざかな　なかく＼は「却て」といふ程の意の辭今いふ意と異之、但し續古事談に思ひ立つ折は中々人に言合する事なしといへるなどは今いふ所の意なれば此頃よりやうく＼かはり來りし之、無德(むとく)は「詮ナシ」「甲斐ナシ」など譯すべし、光榮なくさびしき意にいふ

(三九)只今の一の人にて　一の人とは第一の人といふことにて打任せては攝關の人をいふ事なれども、こゝは唯第一に勢力ある人とのことにいへり、たなりはたる之の畧、

(四〇)よそ人もかく云々　落の中將の北の方となれる事は中の北は知らざるによりてかくはいへる之、何者ならんは、どうした事ならんの意、

(四一)手をもむ　怪しみいぶかるかたち之、

(四二)かへらんやは　かへるは顚覆といふこと、車の輪を繕ひて、かくてはもはや顚覆することあるべからずとて、しづかに進むる之、こゝまで來りしかば家に歸らんやはの意とするはよろしからず、

(四三)梯殿にひきたてゝ云々　梯殿は山より谷にかけて橋の如く作りたる家をいふ、即ち清水舞臺なるもの之、清水のはしどの蜻蛉日記、今昔にもみゆ、中將の車を此梯殿の傍に立てゝ中納言の車ののぼり來るをまつ之、無期は際限なきの意より轉じて、久しき間の事に用ふる詞、

(四四)いとたけかりつる輪　いとたけかりしは「至テ豪氣(ガウギ)ナリシ」といふ程の詞、その容易に損ぜしを嘲るなり、

(四五)よき日にて云々　參詣によき日なりといふにつきて、參詣の人々輻湊して梯殿の邊混雜なれば、中納言の車は裏手の方より下りんとて其方へ行く之、かくれの方は、三七の三二に註せり、こゝにては裏手といふ程の意に用ひたり、

(四六)局ありや　局は參籠すべき塲所を云ふ、即ち席の事なり、

(四七)かねて仰せられしかば云々　豫(かね)て北の方より清水寺へ照會して參籠すべき席を取りおくべきよしいひ入れおきし之、さればそれに依りて席を備へおきしと之、

(四八)かの中將殿も云々　中將よりは別に席の注文もなき故に、設けおく事もなければ、今かく參詣の上は他に入るべき席なし、無論此御堂の間に入るの外あるべからず、さらば折角注文の席も中將のために奪はれ玉はん、さてく＼不都合なる夜之となり、えせ者は中將をさしていふ、えせ者はもと似て非なる者をのゝしりいふ詞、こゝは北の方の妨げられしよしいへるにつきて、その席の本主ならぬをのゝしりていふ詞、△此法師の詞不便なりける事哉といひ、更に不便なる夜なめりといひ、論なく云々といふものおのづから中將のために席を奪はれん事を察していへる口氣味ふべし、

(四九)さはとくおりなん　さはゝ、然らばなり、法師の詞を聞きて、然らば速に下りて、設けおきし席に入らんと之、

△以上北の方が法師と應接するさま、寺男の席に赴くさま、帶刀がこれらのさまをとくと見て機をはづさず中將に告ぐるさま等筆簡にして見るが如く記述す、何等の快筆ぞ、

(五〇)御几帳さして云々　うつほ藏開「御車よせて左大辨の君、宰相中將の君と御几帳さして、おとゞ左衛門督御車のすだれ引上げておろし奉り玉ふ」同「御車よせて御几帳さしてはやおりさせ玉へと聞え玉へは」この外例いと多し、屋代弘賢云、古へさし几帳といふものあり、行障の類なり、その形は帳臺の小きさまにして、上に薄ものをおほひかけて、自ら持ちてあるくを行障といふ、此さし几帳はこれに似て舟の帆のさましたるものなり、古書に見えたり、」秋云行障は必自ら持つとは限らず、又さし几帳は人してさゝするもの之、

[第四二節]

中納言殿の北の方、中將殿の〔車ヨリ〕下りぬさきにとて、皆〔御堂ノ方ヘ〕

(一)皆あゆみのぼるほ

どに車をかくれの方によせて、そこよりおりて御堂の方に歩みのぼる之、偖此間に中將方にては早く車よりおりてすでに御堂に進む之、

(二)いと儀式ことに云々　儀式殊にとは多人數の從者扈從して、整々堂々とあるくさま、そよ〳〵はら〳〵は裝束などのすれあひ觸るゝ音、多人數進行する時の聲音、

(三)帶刀前にたちて云々　貴人通行する際は、前驅行人を制して拂ひ除くる事此頃の風之、されば中納言方の人々中將方の人々の進むをみて氣をいらちて、早く其席につかんとあせれども妨げられ

歩みのぼるほどに、かなたは〔早クオリテ〕いと儀式殊に、そよ〳〵はら〳〵と沓ずりて、帶刀前に立ちて、道なる人々はらふ、車の人々、さわぎ立ちあゆめば、〔中將方ノ人〕道をふたぎて更にやらねばはしたなくて、しばしかいむれて立ちたるを見て「のちおひなる御物詣なめりや。常にさき立ち給はんとのみおぼいためれども、後れ給ふは」とて笑へば、誰も〳〵いとねたしと思ふ。とみにもえ歩みよらず、からうじて局に歩みゆきぬ。〔此席ニ〕法師童子一人ありけるは、〔中將方ノ人々ナ〕かの局あるじのおはする〔ヿ〕と思ひて、〔引カハリテ〕出でていぬ。〔中將方ノ人々〕皆入り給うて、中將、帶刀を喚びて「かの人々〔ナ供ノ者ニ〕笑はせよ」と、さゞめき給うも〔中納言方ニハ〕知らで、我局と頼みて來て、入らんとするに「あらはなり、中將殿おはしま

て進むこと叶はぬ之、

(四)かいむれて　搔群れて、にて一處に集まり寄るをいふ、

(五)のちおひなる御物詣　うつほ國ゆづり、藤原の君などその外にもみえたる語にて、今いふ「オクレバセ」〔のちおひ〕など云ふ程の意、後追なり、

(六)法師童子一人云々　中納言方の席と定めたるものなれば來る迄その席を守るために小法師をおきたる之、前に寺男席に來るよしみえて中納言の人々來る由を知りたれば、中將一群の人々をもて、中納言の人々來れりと思ひ、席をゆづりて去りたる之

(七)さゞめき　さゝや

す」といふに、あきれて立てれば、〔中將方ノ〕人々わらふ。「いとあやしや。たしかに案内せさせてこそ、おりさせ給はましか。かくうはの空に御局あるまじかめるものを、いといとほしきわざかな。仁王堂のおこなひを局とせさせ給へ。それに所はひろかなる」と、そら知らず顏して、帶刀は、我と知られんは、いとほしくて、若うはやれる者にはやして、言はせて笑ふに、はしたなき事かぎりなし。歸らんにもはしたに、わびしといふはおろかなり。暫し立てるに、人さわがしく、ついたほしつべくありきちかへば、わびしく、〔空シク車ノ方ヘ〕歩みかへる心ちも、唯おもひやるべし。いきほひまさりたらば、いさかひかへしてもいぬべし。〔所詮力及バナバ〕いとせんかたなし。足を空にふみて、車にかへり乘りて、妬らいみじう思

くと同じ、小聲にてひそかにいふ事、轉じては騒がしくいひぞめく事にもいへり、こゝは小聲にてさゝやく事之、
（八）あらはなり云々あらはゝは、すべて人の見通すをいなむ詞、うつほ藏開「おなさがなや、あらはなりとて」源氏空蟬「格子たてきての、しりて入りぬ、御達あらはなりといふ之」この外いと多し、皆人の見すかすを厭ふよりいへり、こゝも此意にてやゝ制する意にいへり、
△上にかの局あるじの云々として中將一行の入りたるをしらせ、別に明らかに席につきたるを記さず、さてこゝ

ふ事かぎりなし。猶〔何ノ怨モナキ人〕たゞに思はん人、かくはせじ、おとゞをやあしとおもふらん、〔此中將ニニクマレテハ〕いかなる事にあたり給ふらん」と、集りてなげく中に、四の君、おもしろの駒いはれて、いといみじとおもふ。大德よびて「かう〳〵して〔席ナ〕とられぬ、いみじき耻にころあれ。又局ありぬべしや」といへば、大德「更に今はいづこのかあらん。〔人ノ〕入り居たるをだに、殿ばらの君達は、推し居させ給ふに、遲くおりさせ給へるが、ましてあしきなり。いかゞせんに、御車ながら明させ給ふべきなり。よろしき人ならばこそ、もしやといひ侍らめ。只今の一の人、太政大臣もこの君にあへば、音もせぬ君ぞや。御妹、かぎりなくときめき給ふをも給へり。我御おぼえばかりとおぼすらん人、うち合ふべくもあら

に卒然あらはゝ、云々といふ文勢も亦おのづから其意外にいづるさまをあらはす、これ妙處なり、さて呆れてといふ、その呆れたるさま文氣みるが如し、
（九）かくうはの空うはの空は、今クウといふが如し、
（一〇）仁王堂のおこなひを云々　おこなひは執行所をいふ、仁王堂は御堂よりはるかに隔たりたる所、その執行所を席とせよと之、嘲哂する詞之、
（一一）そら知らず顔そしらぬ顔といふ事、そしらぬ顔は即ちそらしらぬ顔の略之、
（一二）はやしていはせて笑ふ　はやすはもと榮すの意にて、ほめた

ず」などいひていぬれば、かひなし。〔イツヒ〕おりなんと思ひて、〔車一ツニ〕六人まで乘りたりければ、いと狹くて身動もせず、苦しき事、落窪の部屋に籠り給へりしにもまさるべし。」辛うじて〔夜ガ〕明けぬ。この愛敬なしの出でぬさきに、疾く歸りなんと急ぎ給へど、〔昨日損ゼシ〕御車の輪ゆふほどに、中將殿は〔スデニ〕御車に乘り給ひぬれば、いと便なかめれば、中納言殿の御車、〔中將殿ヨリ〕後れんとて立てれば、中將殿、〔返報ナリト〕後にも思ひあはさん。むげにしるしなくば、かひなしとや思しけん。小舍人童を呼びて、「かの車の柄の方によりて『懲りぬや』といひて來」との給へば、ただよりに寄りて、かくいへば、「誰がの給ふぞ」といふ、唯「かの御車より」といふに、「さればよ、猶思ふ事ありてするにこそあり

ゞふるより轉じて多人數聲を揃へていふ事にも、鳴物を合奏する事にも又人をドヤシ笑ふ事にもいへり、大鏡「此殿は折ふしごとに必ずかやうの事を仰せられて事をはやさせ玉へるぞ」こは榮すの意うつぼ國譲「よろづのがく笛の音をはやし云々」これは合奏、盛衰記に「昔より五節えんすゐの肩ぬぎには必ずかくはやすを」義經記、「はやせや殿原」これは衆聲一同に發すること、盛衰記「いせ平氏はすがめなりけりとはやしたりけり」これはこゝと同じくドヤス事ぞ、
（一三）はしたなしこゝは「キマリワロシ」と

けれ」と、さゞめき怪しがりて、北の方の「まだし（マダ懲リズ）」と言ひ出したりければ、わらは、かくなんと〔中將ニ〕申せば、（中）「さがなもの（不祥者）、ねたう（イマ〳〵シ）」と笑ひ給ひて「答（いら）へたなり。〔落ノ今車中ニ〕かくておはすとも知らじかし」と笑ひ給ひて、（中將）「まだしとする御身なれば、またや〔斯樣ノ目ヲ〕見給はん」と〔小舍人童ニ〕いはせたれば、北の方、〔三四ノ君ナドニ〕「いらへなせそ、めざまし」と制せられて（トゞメラレテ）、〔返事ヲ〕せさせねば、〔童ハ〕かへりいぬ。（落）女君「いと心憂く、けしからずはおはせしと、（中納言ノ）おとど後に〔落ノ事ヲ知リタルトキ〕聞き給はん事もぞある。かくなの給ひそ（カヤウニハ仰セラル、ナ）」と、〔ト、メ〕制し給ひけれど、（中將）「これにはおとゞや乘り給へる」とのたまへば、（落）「君達おはすれば、〔中納言ノ在ルモ〕同じ事」との給ふを、（中將）「今うちかへし（引キカヘテ）〔惡口ニ〕仕うまつらんに、御心はゆきなん（解クルナルベシ）。思ひおきし事違へじ（一タビ思ヒコミシ事ハ）」との給ふ。北の方〔家ニ〕歸り

いふ程の意三六の一三見合、「歸らんにもはしたに」は今更立歸らんもつきほなくハンマにて不都合となり、竹取物語に「立つもはした、居るもはしたにてゐ玉へり」とあるはしたと全く同じ、
（一四）足を空にふみて　心も心ならず、夢中の樣なる氣持なるをいふ、
（一五）猶たゞに思はん人云々　中納言の方の人々互に語り合ふ詞ぞ、たゞに思はん人とは、何事もなく通常に思ひをる人といふ事、左樣ならんには此の如くはづかしむる事はあらじ、畢竟中納言に恨をいだく故ならん、さらば此後いかなる事か生ぜんとぞ、中將は勢力ある人なればぞ、
（一六）大德　法師をさして呼ぶ名稱こゝは住職をいへるぞ、

給ひて、中納言殿に申し給ふ、（北）「この大將殿の中將は、おとゞ（中納言ヲ指ス）をやあしくし給ふ」とあれば、（中納）「さもあらず。內（禁中）などにても用意（何カト注意）ありてこそ見ゆれ」との給ふ。（北）「あやしき事かな。しかじか（カヤウ〳〵）こそありつれ。〔歸リ〕いづとていひおこせ（ヨコシ）たりつる消息（せうそこ・コトバ）よ、いかで（ドウカ）、これに答（たふ・返報）せん」ともだえ（悶）給へば、中納言「我は老いしれて（ボケテ）おぼえ（待遇）もなくなりゆく。かの君（中將ヲ指ス）は、只今大臣になりぬべき勢（いきほひ）なれば、いとたふしがたし（トテモ返報）。さべうこそあらめ（然ルベキ宿業アリテノ事ナラン）。又なう（タグヒナク）、妬くいみじき（イマ〳〵シクハラダヾシキ）事こそなかりつれ。名だゝしう（外聞ワロク）、我妻子（めこ）（家族ナリトテ）どもとて、さる恥を見せられけん事よ（左樣ナル恥辱ヲ與ヘラレシ事ヨ）」とて、爪はじきをして歎き給ふ」

大日本圖書株式會社

(一七)入り居たるだに云々、殿ばらの君達とは、豪家の若殿たちをいふ、暗に中將の流を指す、左樣の君達は現在そこに入り居たる人をさへ犯して其席に推し込む程の事なれば、別して空席に入るべきは勿論の事、遲刻して席に來るが失策となり、

(一八)よろしき人ならばこそ云々　一と通りの人ならば萬一閙庿くる事もあらんかとて言ひ試むべけれど、とこ、よろしきといふ事は一八の七、二一の一にいひおけり、

(一九)只今の一の人云々　一の人はこれも威勢第一番の意、御妹かぎりなくとは少將の妹の女御をいふ、主上の御寵愛盛なれば、その緣由もあり、通常の人の比敵すべきにあらずとこ、

(二〇)おりなんと思ひて云々　淸水に到りつかば、車よりおりて席に入るべきつもりなれば、六人車にのりたりとこ、前に三の君四の君と北の方のりたりとみゆ、三人は女房わらは等なるべし、さて六人車中にて夜を明さんには何さま狹く苦しく侘しき事なるべし、

△以上の文、中納言方一行の不意に局を取られて當惑したるさま、衆中にて嘲哢せられて一言も答ふることも能はざるさま、入るべき局はすでに奪はれ、立つ所は雜沓して突倒さるべく、已むを得ずしてすご〳〵立歸るさま、車に入りて侮辱をうけし原因を互にたづねまどふさま、住職を呼びて更に局を問ふさま、住職の答によりて、車中に夜を明す事に決したるさまなど、其聲をきゝて、其形を見るが如く書なし、偖車中の六人夜を明かすにつきて狹く苦しき事を叙して落窪の部屋にこめられし事をもて結び、上文と呼應せしめたる手練賞すべし、翫ふべし、

落窪の部屋云々の句、上文この落窪といふ名きかれて思ひしほどよりもの句と對して、前の少將の言を思ひみるべし、

(二一)此愛敬なしの云々　昨日さばかり嘲哢せられしかば、今日は避けて早く歸らんとせしかど、かの破損の車輪を繕ふために隙どりて、中將已に車に乘りたるこ、

(二二)中將殿後にも思ひ合さん云々　此度の事落を苦しましめし返報こといふ事を後日思ひ合せしめん、それには其兆候を示しおかざるべからずと中將思慮せしにやと草紙地より推察してかけり、

(二三)小舍人童　小舍人はもと藏人所に屬して雜用に從ふ者の職名なるが、轉じて車につき從ふ小童をも小舍人童といへり、

(二四)かの車のえの方に云々　えは轅をいふ、即ち車の前面なり、

(二五)懲りぬや　ぬは畢ぬのぬ°こ、不のぬにはあらず、昨日の事に懲りぬるかと問ふこ、

(二六)さればよ云々　上に「猶只に思はん人かくはせじ、云々」とあり、それをうけて、さればこそ恨ありてする事故かくはいふなれといふこ、三四の君達なるべし、

(二七)さがなもの　さがなしの事は二五の一三にいへり、こゝはあさましくして口さがなきやうなる意にいへり、

(二八)まだしとする云々　まだこりずといふ事ならば、懲るゝまではその仕向けをせんとの意こ

(二九)いらへなせそ云々　三四の君など北の方を制する詞こ、めざましは鈴の屋翁云、然はアルマシキコヲ思ヒテ憤レル意ノ詞ナリ、と秋云多くはそしる事疎む事のやうなる所に用ひたれど、又中には褒むる事めでたき事にもいへれば憤る意といふべからず、すべて然はあるまじと思ひし事の案外なるを驚き思ふさまにいへる詞こ、例いと多くしてあぐるに堪へず、

(三〇)いとおうくけしからず云々　落の中將に言ふ詞こ、今は落の何方にありといふ事中納言には知らざれども、後日之を知らん時は此事をけしからぬ事とおもふべければとて制するこ△落の溫厚なる性情を見るべし

(三一)今うちかへし云々　十分北の方をたしなめ苦しめて後更に懇に仕へなば中納言の心も解くべし°一旦思ひ定めし事は遂げ行ふべしとこ、△是中將の性質　前のとげて後に引かへてかへりみんと云々の文と照らしみるべし

(三二)此大將殿の云々　即ち上に「おとゞをやわしく思ふらん」の呼應、中將に恨を結びたるやうの事なきやを探る詞こ、

(三三)いづとていひおこせ云々　即ちかの「こりぬや」といはせつるをいふ、さてそれにつきて「又や見ん」などいひこしたる事なれば、かた〳〵かくてあるべきにあらず、返報せんといふこ、

(三四)我は老いしれて云々　老い痴れは老耄するをいふ、おぼえは待遇をいふ老耄して世の待遇も衰へゆくに中將は云々なれば、返報など思ひもよらずとこ、

(三五)さべうこそあらめ　前世の宿業にて、わが家族としてさやうに外聞わろき恥辱をうくべき事と定りをる事にやあらんとなり、名たゞしうは、外聞あしきなり、
(三六)爪はじき　三一の一一にいへり

〔第四三節〕
(一)中將せめて云々　せめてはすべて「迫リテ」といふ意今いふとは意異り、古今戀「いとせめて戀しき時は」一拾遺雜戀「年さへせめてうらめしき哉」例いと多し、中將が母北の方にたゞ人とおぼさばこれをとり玉へとすゝめしことと上にみえたり、さてますゝゝ之を兩親にすゝめて藏人少將を聟とせしなり、せめての詞は處によりては「シヒテ」と譯すべきもあり、二七の一二見合
(二)いられ死ぬばかり　いられは煎られより轉じて、心のもえいらるゝにいふ、
(三)かくせんとて云々　かく藏人少將を中將方に取らんとして、先我方を欺きて面白の駒を四の君にあはせ、さて藏人少將の面目を汚して三の君に遠ざからしめたりといふなり、
(四)いきすだま　和名抄、窮鬼、伊岐須太萬、源氏葵ものゝけいきすだま、弄花にいふ生靈也、「死靈生靈といひて、死靈は死したる人の靈の人の身につきて惱ますにいひ、生靈は現存せる人の怨念のとりつきて人を惱ますをいふ、生靈となりて中將にとりつかんとまで怨むなり、

かゝるほどに六月になりぬ。中將せめていひそゝのかして、藏人少將を、中の君にあはせ給へば、中納言殿に聞きて、いられ死ぬばかり思ふ。かくせんとて、我をば嫌しおきしにこそありけれ、いかでか窮鬼にも入りてしがなとて、手がらみをしての給ふ。二條殿には、〔中納言方ニテ〕思ひかしづき給ひしものを、いかに〔口チシク〕思すらんと思ひやりて、いとほしがる。三日の夜の御裝束は、ものよくし給ふとて、この殿になん奉り給ひければ、女君、いそぎ染めさせ、裁ち縫ひし給ふにも、むかし思ひ出でられてあはれなれば、

着る人のかはらぬ身には唐ころもたちはなれにしをりぞわすれぬ

とぞ〔オノヅカラ〕いはれ給ひける。〔此裝束ヲ〕いと清げに縫ひかさねて、奉らせ給ひければ、大いどのゝ北の方、かぎりなく悅び給ふ。中將もいと思ふやうにしつと思ひ給ふ。さて〔中將ハ〕少將にあひて、「いと恐しき人〔妻ニ〕もたまへりと、憚ぢ聞え給へしかど、間近くて、聞えかたらはんの本意ありてなん、しのびてそゝのかし聞えたるを、理なくとも、ゆめもとの人と〔妹ヲ〕一つに思すな」と聞え給へば、少將「あなゆゝし。よしきゝ給へ。文をだに物し侍りてんや。御用意ありと承りしよりなん、限なく頼み聞えし」との給ひて、げにかへりみもし給ふべくもあらず。おぼえも、女君も、こよな

大日本圖書株式會社

（五）てがらみ　濱臣云手がらみは今も田舎の人狐めくものゝつきたるやと思ふ時雨手の指をからみて其間よりその者を見る事之、今はなし、昔はさる事あり、けんかし、と或云、手がらみは腕を組む事なるべしと、秋云二説共いかゞ、うつほ藤原君、帥が實忠の宰相を怒るところに「帥手がらみをしていふやう、なぞのやもめのましますところにか、云々」とあり、人の怒る時雨手の指をからみ組みて股の上に突立て肩をそびやかす貌にて、それをいへる之

（六）三日の夜の御裝束　いはゆる所あらはしの夜藏人少將のため

くまさりたれば何しにかは〔中納言方ニ〕通はん。かゝるまゝに、〔中納言ノ〕北の方いられ惑ひて、物もやすく喰はでなん歎きける。」

中將殿に、よき若人ども參り集りたる、〔ガ〕〔使フ人チヨク〕いたはり給ふと〔ソレラガ云フチ〕聞きて、かの中納言殿の少納言、〔二條ノ北方ニ〕かく落窪の君とも知らで、辨の君がひきにて參りたり。女君見給ふに、少納言なれは、あはれにをかしうて、衞門を出して「他人かとこそ思ひつれ。むかし〔ノ事〕は更に忘れずながら、つゝましき事のみ多くて、えかくなんとも物せで、おぼつかなく思ひつるに、いとうれしくもあるかな。早うこなたへ物し給へ」といはせたれば、少納言あさましくなりて、扇〔ニテ顔チ〕さしかくしたりつるも〔思ハズ〕打ち置きて、ゐざり出づる心ちもたがひて「いかなる事ぞ、誰が

に設けおく裝束之、ことし元日の中將裝束にて母北の方落の裁縫に巧妙なるを知りしかば、たのみおこされし之、

（七）きる人の　今かく裁縫する裝束は、昔中納言方にありし時縫ひしと之を着用する人のかはらぬにつけて、かの落窪の室をはなれし時の事を思ひつゞけらるといふを、裁縫なるからに唐衣といひ、身といひ、たちといひ、をりと緣語にていへり、

（八）おほいどの　打まかせては大臣をいへど、こゝには大殿といふ意にいへり、中將にむかへていへる之、おほいどのはもと大殿と

の給ふぞ」といへば、「唯かくて侍ふにおぼし出でよ。その世には、落窪の御かたと聞えしよ、わたくしにも、いとこそうれしけれ。むかし見奉りし人は、一人もなくて、かはりたる心ちのし侍りつるに」といへば、少納言「いで、あなうれしや。我君のおはしますにこそありけれ。世にわすれず、戀しくのみおぼえさせ給へるに、佛の導き給へるにこそありけれ」と、喜びながら御前に參りたり。見るに、かの部屋に〔押籠ラレテ〕居給へりしほど、まづ思ひ出でらる。君はまづねびまさりて、いとめでたうて居給へれば、いみじく幸福おはしける〔ヿヨ〕と覺ゆ。そよ〳〵とさうぞき、汗衫かさね着たる人、いと若う淸げなる十餘人ばかり物語して、いとなまめかしげなり。「いと疾く御前ゆるされ給ふ、〔ニ〕いかならん。我等こそさ

いふ事也、
(九)さて少將にあひて云々　中將が少將にあひていへる也、かの所あらはしの夜などを思はせてかけり、いとおそろしき人とは三の君の事をいふ、かのさがなき母北の方の子なれば也、さる人を妻としたる事故恐れおぢてはありしかども也、
(一〇)恚のびてそゝのかし云々　上文に「三の君の藏人少將かの中の君を聞え玉ふを」とありてこゝにかくあれば、中將より藏少にほのめかしたる事ありて、さて縁談とゝのひし事なるをみるべし、
(一一)わりなくとも云々　中の君をば永く顧

もなかりしか」。とうらやみあへれば「さかし。こはさるべき人ぞかし」と笑ひ給ふさまも、いとをかしげなり。かゝれば、父母のゐたちかしづき給ひし御姉妹どもには、こよなくまさり給へるぞかしと、〔思ヒテ〕人の聞くほどは、〔唯々〕うれしきよし〔ノミ〕をいひて、人たちぬるほどには、少納言、中納言殿の〔サマ〴〵ノ〕物語を委しくす。かの典藥が答へし事かたれば、〔落チ始メ〕衞門もいみじく笑ふ。「北の方、このたびの御聟取のはぢがましき事、と腹立ち給ふめれど宿世にやおはしけん。いつしかといふやうに孕み給へれば、心ちよげに見え給ひし。北の方も、思ひまつはれてなんおはすめる」「四の君の御人は、あやしき事かな。これには、いみじう譽め給ふめるものを、鼻こそ中にをかしげにて、おはすとこそいはる

み玉へ、三の君の如く捨て玉ふなの意、
(一二)あなゆゝし　ゆゝしは忌はしき意なる事三五の一六にいへり、もとの人云々の詞をうけていへり、よしきゝ給へは試に御覽あれといふ程の意、
(一三)おぼえも　女君も大將方の藏少を接遇するありさま、幷に中の君の人質容貌等中納言かたよりは殊の外まさりたればと也、
△中將殿にはよき若人云々　上文「人はいくらも參らせ玉へ云々」の句に照らしみるべし、
(一四)かの中納言殿の少納言　落に辨少將の事をいひし女房也辨の君は上卷のはじめ石山

めれ」との給へば、少納言「嘲哢し聞えさせ給へるなり。御鼻なん、中に優れて見苦しうおはする。鼻うち仰ぎいらゝぎて、穴の大なることは、左右に對建て、寢殿も造りつべく」などいへば「いといみじき事かな。實にいかにいみじうおもひ給ふらん」など、語らひ給ふほどに、中將の君、内裏よりいといたう醉ひてまかでたまへり。〔顔〕いとあからかに清げにおはして「御管絃にめされて、これかれ〔ノ人〕にしひられつるに、いとこそ苦しかりつれ。笛つかうまつりて、御衣かづき侍り」とてもておはしたり。ゆるしいろのいみじくかうばしきを「君にかづけ奉らん」とて、女君にうちかけ給へば「何の祿ならん」とて笑ひ給ふ。少納言を見つけて「これはかのわたりに見えし人にはあらずや」「さなり」「いか

で參りつるぞ。交野の、少將の艶になまめかしかりし事ののこり、いかで聞き給ふらん」との給へば、少納言、〔其夜〕言ひし事わすれて、何事ならん、あやしと思ひて、かしこまり居たり。「いとくるし、臥したらん」とて、御帳の內に、二所ながら入り給ひぬ。少納言、めでたくきよげにおはしける君かな。いみじく思ひ聞えたまへるにこそあめれ。幸福ある人は、めでたきものなりけりとおもひ居たりけり。」

諧の時にみえたる辨の御方といへるをいふか、さらばかしこにみえたるも辨の妻にはあらず、辨の妻は即ち中納言の中の君にて落の今日かくてある事はいまだ知らざれば之、九の八見合、ひきは最負の字音より出でたること前にいへり、

(一五)女君見玉ふに云々　御簾を隔てゝ落は內にありて見る故に少納言なるを知れども、少納言は外にあるをもて誰とも知らぬ之、

(一六)こと人かとこそ云々　落の衞門をして少納言にいはしむる口上之、昔の事は忘れずとは、中納言方にありし時殊に心よせしたる志のほどは忘れざれども、と之、つゝましきは遠慮といふ事、中納言にもいまだかくてある事を知られぬ意を含めていへり、

(一七)少納言あさましゝ、　あさましはその意外なるをあざみおどろく形容詞なる事一三の一〇にいへり、

(一八)扇さしかくし云々　初見參の事なれば、物耻しく、扇を顏にさしあてたりしも、うちおかれ、膝行する氣分も、トギマギするに、

(一九)たゞかくて侍らふに　衞門が此の如く御奉公申して居るにて、思出せよ、其時には落窪の御方と申し

たること之、わたくしにもとは、落の御前にていへる故にいふ詞、衞門の自己一分にもと之

(二〇)よろこびながら云々　即ちみすの中に入る之、早うこなたへ物し玉へとあるによりて之、

(二一)ねびまさりて　ねびは年のましたくるにいふ、古來老成の字をあてたれども叶はず、子供の成長することにも、少年の青年になるにも、又青年の壯年になるにもいへば之、成長の字允當なるべし、

(二二)かざみ重ねきたる人　かざみは汗衫の字音之、女の夏服、後には女の童のうはぎの上に着るものゝ名となる、枕の草紙節はの條五月の處に「若き人々は菖蒲のさし櫛物いみつけなどしてさま〴〵からぎぬかざみなどをかしき折枝ども云々」とあるなどをみるべし、

(二三)いとなまめかしげ　なまめかしは優美にしてたをやかなるさまなる事已にいへり、

(二四)いととく御前ゆるされ云々　新參の女房は數日勤仕の上にて初めて御前づとめを許さるゝが通常なるに、直ぐに御前に召されたるを女房達のあやしむ之、さてそれをきゝて落の云々とはいへる之、

△人の聞くほどは云々　委曲の筆簡古にして盡せり、

(二五)四の君の御人は云々　前に中將か兵少の事を「かたちいとよく鼻いとをかしげなる」といひしを落はまことゝおもへるよりかくはいへる之

(二六)鼻打仰ぎいらゝぎて云々　所あらはしの所に「鼻をいらゝかしさし仰ぎて居たるを」とあり、常に仰向きてをる人のさまにかきなせり、對たて寢殿も造りつべしとは穴の大なるを甚しくいへる之、對は一の三、寢殿は同一〇いらゝぐは三九の二三にいへり、

(二七)笛つかうまつりて云々　內裏管絃の御席にて、中將は笛を吹奏して御衣を賜はりしと之、

(二八)ゆるしいろ　紅色をいふ、ゆるし色といふよしは、もと深紫深紅は禁色とて其位にあらざれば着用を得ず、深紫深紅は紫紅の濃きものにてほと〳〵黒き色したるもの、それに對して紫紅は常人にても着用を得るものなればゆるし色といふ、さればゆるし色といへば通常の紫色紅色をいふものなれども、ゆるし色といへば打任せて紅色をいふ、夫木抄「山もせに咲けるつゝじはさほ姫のたがぬぎかけしゆるし色ぞも」或はいふ、ゆるしいろ打任せて紫色をいふと、さて又ゆるし色は紅紫の薄色をいふといへる薄色は深紅深紫に對していへるにて通常の紅紫をいふなること、夫木の歌つゝじの色をもていふにて明か之、

(二九)かづけ奉らん　かづくるは頭着くより轉じたる詞にて、授くること、こゝにては進上し申さんといふ意、

(三〇)何の祿　祿は褒美をいふこと七の六にいへり

(三一)交野の少將　中將かつて几帳の内に隱れてきゝつる辨少將の事をいふ之、艶にはナマメキ色ダチタル事なまめくは優美にしてタチヤカなること共に前にいへり、

(三二)御帳の内に御帳は帳ともいふ、方八尺高さ七尺一寸にして柱十二本あり、前後に帷をかけ、左右には几帳を立つ、中に疊三疊を敷く、寢所に用ひ、又は休息所にゐつる所なり、類聚雜要抄に圖をのせて委しくいへり、

△さいはひある人は云々　上文「いみじくさいはひおはしけるを覺ゆ」の句と對しみるべし、少納言の心にかへす〲驚き歎ずるさまいちじるし、

〔第四四節〕

(一)うちに奉らん云々　右大臣のかね〲心に思ひをりける事を或人に向ひて語る詞によりていひあらはすこ、うちは即ち內裏にして、主上の嬪御に奉るをいふ、嬪御は殊に里方の後見を要するものなれば、右大臣歿後その後見を繼續せんことといかゞと氣づかはし

さるほどに、〔時ノ〕右大臣にておはしける人の御ひとり女にて、「うちに奉らんと思へど、我なからん世などどうしろめたし。この三位中將、〔ヲ〕交らひの程などに試るに、物たのもしげありて、人の後見しつべき心あり。これ〔我女ニ〕婚せん。〔二條ナルハ〕わざとの人のむすめにはあらで、はか〲しき人のめと〔云フニ〕もなかゝめり。年ごろかく思ひて、心とゞめて見るに、思ふやうなる人なり。只今なり

くて思ひ止るこ、うしろめたしは後目痛なる事、一三の九にいへり、

(二)物たのもしげありて云々　即ち誠實にして慥に人の世話監督をなすべき性質ある人物なりとこ、心ありは性質をいへるにて、こゝにては人物といふ程の事にいへり、後見の事は一の一七に註せり、

(三)わざとの人の女には云々　落の事をいへるこ、二條に迎へたる人ありとの事は聞き及べども、それはわざとの人の女にはあらずとこ、わざとの人とは確としたる人といふ事にて、歷々の人の女といふにもあらずとの意、

もて出でなん」との給ひて、しりたるたよりありて、男君の御乳母の許に、〔其人ヲ以テ〕「かうかうなん思ふ」といはせ給へれば、御乳母「かくなん侍る。いとやんごとなく、よき事にこそ侍めれ」といへば、中將「一人侍るほどならましかば、いとかしこき仰事ならましを、今はかくて通ふ所あるやうに、〔先方ヘ〕ほのめかし給へ」とて、〔座ヲ〕立ち給ひぬれば、御乳母の思ふやう、この御めは父母もなきやうにて、たゞ君にのみこそかゝり給ふめれ。〔サレバ甚物サビシキヲ、御里方ヨリ〕花やかにかしづかれ給へらば、よからんかしと思ひて、君のの給ふやうにはいはで、「いと嬉しき事なり。今よき日して、御文も取りて奉らん」など〔周旋スル人ヘ〕言ひ遣りたりければ、この殿にはよしとおぼして、いそぎといそぐ。御調度〔從來〕あるよりも、

落は中納言と女王との間にいできたる人なれども、當時その父母の名はいまだ世にしられざればかくいへる之、はか〴〵しきは「シカトシタル」又は「タシカナル」などいふ意なる事一の十六にいへり、人のめは妻をいふ事、はか〴〵しき人のめは「タシカナル妻」にて即ち本妻といふ事、わざとの人の女はその里方よりいひ、はか〴〵しき人のめはその人よりいふ、

(四)只今なりもて出でなん　なるは官職のすゝむをいふ、貫之集「かざすとも花咲くやとはたのまれずみのなりいでん年のなければ」例多し、前にも「只

いかめしうしかへて、若き人もとめ、けいめいし給ふ。「君は右大臣の御聟になり給ふべかなり。この殿には知り給へりや」といへば、衛門あさましと思ひて、「まださるけしきも聞えず、たしかなる事か」といへば、「まことにこの四月に〔婚禮スベシ〕とて、急ぎ給ふものを」と、告ぐる人のありければ女君に、「かう〳〵こそ侍るなれ。さはしろしめしたるにや」と申せば、まことにやあらんと、あさましく思ひながら、「まださる事もの給はず。誰がいふぞ」との給へば、「かの殿なる人の、たしかに知る便ありて、〔婚禮スベキ〕月をさへ定めて申し待り」といへば、心の中には、この母北の方の、強ひての給ふにやあらん。さやうなる人の、おしたちての給はゞ、聞かではあらじと、人しれずおぼして、心づきなけれど、つれなく

今なりいで給ひなんと人々ほむ」などもみゆ、

(五)しりたる便　至當のてづる之、かねて知れる人を媒介として、中將の乳母、即ち帶刀の母に依りて緣談を申し込む之、

(六)いとやんごとなくよき事　やむごとなくは貴き事にも、大切なる意にも、又は「結構ナリ」「比類ナシ」若くは「捨テオカレズ」「ノガレラレズ」などいふ意にも、ところによりてさま〴〵の意に用ひらるゝ詞なり、こゝは「結構」又は「比類ナク」などの意なり

(七)今はかくて通ふ云々　ほのめかすとは、正しく其事といはず何

て〔中將ヨリ此コトナ〕の給ひやすると、まてど、かけても言ひ出で給はず。女、心うしと思へるけしきや、猶〔形ニ〕少し見えけん。中將、「おぼす事やある。みけしきにこそさりげなれ。まろは世の人のやうに、〔ロニイダシテ〕思ふぞや。忘れめや、戀しや、なども聞えず、唯いかで物思はせ奉らじとなん、はじめより思へど、わづらはしき御けしきの、このほど見ゆるは、いとくるし。心うしとやおぼさんとて、はじめもいみじかりし雨に、わりなくて參りしを、足じろの盜人とは興ぜられしぞかし。〔是迄〕ほと〳〵おろかなりしやは。〔思フヿアラバ〕猶のたまへ」との給へば、女、「何事をか思はん」。「いざ、されど御けしきいとくるし。思ひこそへだて給ひけれ」との給へば、女、

へだてける人のこゝろをみ熊野の浦のはまゆふいくへなるら

となく左樣に聞ゆるやうに打かすめていふをいふ、二條に人を据ゑてその方に通ふといふ事を確とにはあらず、打かすめてのべよとゝ、

△云々とて立ち給ひぬれば　索然たる文氣、中將の不興なるさまおのづから文字の上にあらはる、

（八）この御めは云々　乳母はもとより落の中納言の女なる事は知れども、今中納言に知られてあるにもあらず、從てその後見をうくるにもあらねば父母もなきやうなりといふ之、

（九）花やかにかしづかれ云々　中將のうへよりいふ、身分重き家の

ん

男君、あなこゝろう、さればよな、なほおぼす事ありけり。

みくまのに生ふる濱ゆふかさねなでひとへに君をわれぞおも
へる

心ならでや、物しき事も聞き給はん。なほの給へ」と聞え給へり。たしかならぬ事にもこそあれと思ひて、物もいはでやみぬ。」

明けぬれば、帶刀に衞門がいふ「しかぐ\の事あるべかなるを、心うくもいはぬにこそ。〔アヲメ〕遂にかくれあるべき事かは」といへば「更にさること聞かず」といふ「されど外の人さへ聞きて、人々の許に、いとほしがりとぶらふものを、知らぬやうはありなんや」といへば「怪しき事かな。君の御けしき今見ん」といふ。「中

女を室として、里方より盛に賑はしく取扱はれたらば愉快ならんと思ふ之「たゞ君にのみこそかゝり玉ふめれ」といふ語句中おのづから光榮なくして物さびしとの意を含む、さて花やかに云々といへる之、

（一〇）御調度あるよりも云々　姫君の道具類從來あるものを、更に盛んに新調し、又隨從すべき女房はじめのつかひ人を抱へ入れなど、用意とりぐ\に經營するへ、けいめいは二六の三にいへり、

（一一）君は右大臣の云々　或人の衞門に告ぐる詞之、△卒然おもひもよらず聞くさま、卒然の筆もて示す、こ

將〔七〕〔二條〕殿に參りて見れば、〔落こ〕春の庭を見出しておはす。いとおもしろき梅のありけるを、〔中將〕折りて「これ見給へ。尋常になん似ぬ、みけしきも、これに〔依リテ〕なぐさみ給へ」との給へば、女君、たゞかく聞えたまふ、

うきふしにあひ見ることはなけれども人のこゝろの花はなほ
うし

とてなん、花につけて返し給へれば、中將いとあはれに、をかしとおぼす。猶我ことごゝろありと聞きたるにやと、くるしうて、立ちかへり「さればよ。おもほしうたがふ事こそありけれ。更に〔我ニハ〕罪もなしとなん、只今は思ひ給ふるを、まろが心のほどはなほ見給へ」とて、

れその巧妙なるところ、
（一二）あさましと思ひて　あさましはその意外なるを、あざみおどろく詞一三の一〇に註せり、
（一三）かの殿なる人　大將殿の殿人をいふ、信ずべき筋より聞き込みたる事にて月さへ明かに告げたりとそ之、
（一四）この母北の方云々　落の疑ひ思ふ之、中將の母が中將を強ひてすゝめて然らしむる事かと之、
（一五）さやうなる人の云々　おしたちては、すべて事を敢へて專らになすをいふ、源氏などに多くみえていづれもその意之、こゝも母北の方の專らに力を用

うきことに色はかはらぬ梅の花ちるばかりなるあらしなりけり

と推しはかり給へ」との給へば、女

誘ふなる風にちりなばうめの花われやうき身になりはてぬべき

とのみぞ。あはれに［見ラル、］」とあるを、いかなる事を聞きたるにかあらんと、思ひ給へるほどに〔大將第ニ居ルトキ〕御乳母出で來ていふやう「かの右の大臣の事は、の給ひしやうに物し侍りしに、〔今アルハ〕わざとやんごとなきめに物し給はざなり。〔其方ヘハ〕時々かよひてものの給へかし。〔父大將〕殿に聞えて、四月となん思ふと、いそがせ給ふなり。さる心し給へ」と聞ゆれば、いと耻しげに笑みて、「な

ひて敢へて事行せられんには中將の從はざるを得ざるべしとおもふ之、
（一六）心づきなければ　つれなくて　心づきなしは一四の二にいへり、但しこゝには「オモシロカラデ」などいふ程の意に用ひたり、つれなしは一二の一五にいへるが如く「ナニゲナキサマ」の意之、
（一七）みけしきにこそ云々　「さりげなれ」は「然ありげなれ」にて「左樣ニアルヤウナルアンバイヂヤ」との事
（一八）まろは世の人のやうに云々　僕は通常の人の女に言ふ如く、君を思ふの、行末永く

でふ、男のいなと思ふ事を、強ひてするやうかはある。世の人にも似ずよき身にもあらねば、さの給ふ人もあらじ。かゝる事なまねび給ひそ。かたはなり。わざとの妻にもあらざなりとは、いかでか知り給ふ。いとさいふばかりなる人にもあらぬを」との給へば、乳母「あなわりな、おとどもしかとおぼし立ちて、急ぎ給ふものを、よし御覽ぜよ、やんごとなき人の、強ひての給はん事を、いかゞはせさせ給はん、何かは［サハノ玉フ］句、君達は花やかに、御めかたのさしそひて、〔大切ニ〕もてかしづき給ふこそ今めかしけれ。〔他ニ〕おぼす人ありとても、それをばさるものにて、〔大臣ノ御女ヘ〕御文など奉り給へ。かの君も思ふ時は、上達部の女にはありなんなれど、落窪の君と〔名〕つけられて、中の劣にてうちはめられてあり

見捨てぬの、戀しく思ふのなども言葉にはいはず、只心の内に君に物を思はせ、心を苦しむる事なからしめんと最初より思へりとぞ、
〔一九〕心うしとや云々　三日目の夜間はぬは心うく歎かはしき事に思はれんとて、それゆゑにこそ強雨をも冒して問ひたれとぞ、
〔二〇〕ほと〳〵おろかなりしやは　おろかは踈畧にて心淺きにいふ、從來中將の落に對する擧動に於て、心淺き事ありしや、殆どなかるべしとぞ、
〔二一〕へだてける濱木綿は草の名、皮の幾重も重なるものなる故重、ぬへだつなど古來いへり、三熊野は紀伊に

けるものを、かくたぐひなく、おぼしかしづくこそ怪しけれ。人はかたへは、父母居たちてかしづかるゝこそ、心にくけれ」といふに、中將面うち赤めて「ふるめかしき心なればにやあらん。今めかしく、好もしき事もほしからず、おぼえもほしからず、父母具したらんをともおぼえず、「おちくぼにもあれ、あがりくぼにもあれ、わすれじと思はんをばいかゞはせん。人のいはんはことわり、そこにさへかくの給ふこそ心憂けれ。たゞ〔ソコノ〕御爲に、〔何カト〕志なき〔ヤウ〕に思すとも、今かれも仕う奉るやうありなん」とて、いとたのもしげなき御氣色にて、〔坐テ〕立ち給ふめるを、帶刀つく〴〵と聞きて、爪はじきをはたく〳〵として、「なでふかゝる事申し給ふ。君と申しながらも、耻しげにおはすとは見奉らずや。

て濱木綿の名所、歌の心は、君が我に隔てごゝろありといふ事を今日見知りたりといふを、濱木綿の名所三熊野にいひかけ、さて浦の濱木綿とうけて、其へだて心の深き幾重ならんと疑ひたるぞ、落は中將の此度の緣談を我に隱して告げぬ事とおもへばなり、
〔二二〕みくまのに、落の歌に對してみくまのといへり、濱木綿の如く妻を重ぬるをいふ樣なる事はなさで我は只一途に君をのみ思ひて居る事ぞといふを、幾重に對してひとへといひ、重ねなでといへり、重ねなでは重ねでにてなは畢ぬのな、このなは畢のななどの事は皇國

只今の〔御夫婦ノ〕御中は、人はなちげにもあらぬものを、かのの給ひつるやうに、志たがはず、花やかなる方に〔中將ヲ〕やり奉りて、〔右大臣殿ノ〕御德見んとおぼしたるか、あな心う、すこしよろしき人の、さる心もたるやはある。なでふ御名だての落窪ぞ、老い僻み給ひてけり。これをかの御あたりに聞き給ひて〔ハ〕、いかゞおぼすべき。今よりかゝる事の給ふな。君のおぼしたる事、いと耻しくいとほし。この〔右大臣ノ〕御妻のいたはり、かうやいと得まほしくおはする。さらずとも惟成等侍らば、御身ひとつは仕うまつりてんものを、かやうの〔欲深キ〕御心もたる人は、いと罪ふかかンなり。又聞え給はゞ、惟成法師になりなん、いといとほし。猶人の思ふ中〔ヲ〕さくるは、大事にはあらずや」といへば、乳母「いらへもせさせずいひな

すかな。誰かはたゞ今、さり給へ捨て給へと聞ゆる。」「いで、さにはあらずや。〔右大臣ノ女ナ〕めあはせ奉り給ふは」「いであなかしがまし。取りいでゝもさまあしからんか。などかおどろおどろしういふべからん。かたへは〔自分ノ〕妻を思ふなめり」と、いとほしと思ひながら、口ふたげにいへば、帯刀笑ひて「よし〳〵、猶申そゝのかさんと思し召したり。ただ惟成法師になり侍りなん、御罪いといとほし。親の御うへをば、いかでか知らざらん」とて、剃刀腋ばさみてもたり「又〔此事ナ〕言ひ出で給はんをり、ふとかきそがん」とて立てば、乳母、一人子なりければ、かくいふをいといみじと思ひて「口からいとゆゝしき事をも聞くかな。狹みたる剃刀〔我カ念力ニテ〕打ちや折らぬと試みよ」といへば、帯刀みそかに笑ふ、君は

文法釋義にくはしくいへり、偖重ねでとは、落の外、妻を重ねぬとの事之、
(二三)心ならでや云々　物しは氣に叶はず思ふ事なるは一〇の一七にいへり、わが心にあらざる事にして、もし氣に違ふやうなる事を他人より聞く事もあらん、猶ありのまゝに語られよとぞ、
(二四)たしかならぬ云々　中將のさま實に何もなきさまなれば、もしも確かならぬ事なるかもはかられずとて何ともいはずとぞ、
(二五)されど外の人さへ云々　即ち前に衞門に告げし人の事、又其外の女房なども聞き込みたる事のさまにかけ

更にどうじ給ふべき〔樣子〕にもあらず、〔又〕我子のかく〔マデニ〕いふと思ひて、不用なるよし、〔右大臣方へ〕聞え奉らんとおもふ。」

る之、人々の許にとは、即ち奉仕しある女房達の處をいふ、落今本妻のさまなるにさる右大臣などいふ人の女妻とならばおのづから二條の方はけおされぬべき事なれば人々よりとぶらふ之、
(二六)中將殿に參りて見れば　中將が内裏より退出せられて、二條殿にゆかれたる之、此文ふと見れば帯刀が中將殿即ち二條邸に參りてとやうに思はるゝより、濱臣も疑ひて、樣々いへれど此一段中將と落との應接のみにして帯刀の事なきにて明か之、中將にて句を切り、殿に參りて見ればとしてみるべし「見れば」の寫本皆此の如くなれど、こは「見給へれば」とありしが脱字したるにてもあらんか、さて中將は二條殿に參りて見れば、落は庭前をながめ出して居られたりと之、物思ひあるさま之、
(二七)いとおもしろき云々　落の物思ひをる容躰をみて、中將之を慰めんためおもしろき梅の枝を折りて云々する之
(二八)うきふしに　うきつらき節ありて、うらみ見るなどいふ事はなけれども、人の心の花の如くうつりかはり易きはやはりうくつらしと之、
(二九)猶わがことゝころ　猶中將があだし心、即ち落の外の人を思ふ心ありときゝ込みたる事にやと之、
(三〇)されば　前に「おぼす事やある猶の給へ」といひしに落の答に「何事をかは思はん」といひしをうけていへり、「さればよ猶疑ふ事ありての事」と之、
(三一)うきことに　さま〳〵のうき事におひてもこれ迄更に心がはりもせざる我に、更にたへられぬ程のつれなさをゑむけらるゝ事よといふを梅の花によせて色はかはらぬといひ、ちるばかりなるといひ、あらしといふ之、
(三二)さそふなる　他よりいざなひすゝむる事ありて、その方に通ふことゝならば、我は捨てられてうくかなしき身となるべしとの事を、同じく梅の花に寄せて誘ふ風といひ、ちるといひ、うきみといひて身を實にかけ、さてなりはてとうけたり、

(三三)と思ひ給へるほどに　と思ひてくらし給ふ程にといへるにて乳母の出で來るは大將殿の家にての事之、二條殿にてはあらずと知るべし、
(三四)わざとやんごとなき云々　上文「今はかくて通ふ所あるやうに云々」に對していふ詞之、其通はるゝ所といふはキツトシテ、比類なき本妻といふまでの人にもあらざる樣子之、さらばそれはそれとさしおきて折ふしに通ふ丈の所として、おかばさしつかへあらじと之、
(三五)いと耻かしげに　はづかしはまばゆく面を向けがたきやうの意なる事三一の一〇にいへり、こゝは即ち中將のさまの我にまばゆく心おかれて思はるゝ之、中將がはづかしがるにてはあらず、
(三六)なでふ男の云々　何といふ男の心にいなむ事をおしてなすものあらんとの事にて、即ち男として何ぞの意之、
(三七)かたはなり　かたははもと鳥の片羽よりいでゝ、足らず、とゝのはぬ意よりやう／＼轉じてすべて見にくゝ聞ぐるしくいかゞしき事にいふ、
(三八)いとさいふばかり云々　落は父は中納言、母は女王にして歴々の人の子なれば之、
△なでふ男の云々　中將の氣質前後此一言にあらはる尤深く注目すべし、
(三九)おとどもしかと云々　しかとは然とにて左樣といへること、今日確然をシカシツカリなどいふも、もとはこれよりいでたる語なり、
(四〇)何かは、君達は云々　何かは、にて句を切りてみるべし、何かは左樣にはの玉ふ、すべて君達は、内室の御里方に花々しく賑やかに大切に取扱はれたるが當世風之と之、△上文「この御女は父母も云々花やかにかしづかれ云々」の句に對しみるべし、
(四一)かの君もおもふ時は云々　中將が「いとさいふばかりなる云々」の詞につきていへり、上達部(かんだちめ)とは大中納言、參議、三位以上の人をいふ、即ち卿なり、中のおとりとは、其中の最劣等といふ事にて、今いふビリ之
(四二)うちはめられて　「ブチコメラレテ」なる事前にいへり、さてこゝにかくあれば、九の九なるも「内にこめて」にはあらざるを知るべし、

(四三)人のいはんはことわり云々　人の彼是後言するは他人の事なれば當然なれども、其許は我が乳母として左樣に言はるゝは心うしと之、
△面うち赤めてといひ、いとたのもしげなき御けしきといひたるのみにて、別に怒りふづくみたるよしをいはず、されど今めかしく云々ほしからず、おぼえもほしからず、父母云々をともおぼえずと語を重ね、さて落くぼにもあれ、あがりくぼにもあれといへるなど、深く心に憤りたる語氣をあらはし、其乳母なるをもて、明かに之を叱責せずして却てそこにさへかくの玉ふこそ云々、と和らかに之を戒め、更に御爲に云々との言をもて之を諭すさま、不言の間に之を示したる筆力尤賞翫すべし、
(四四)御爲に志なき云々　今落は乳母に對して別に何等の仕向をもなさゞれども今程なく何とか恩惠を施す事もあるべしと之、乳母の右大臣の女を周旋する念頭の病所を指しての言之、
(四五)いとたのもしげなき御けしき　甚不平無聊の有樣となり、
(四六)帶刀つく／＼ときゝて　上文「君の御けしき今みんといふ」の文と對しみるべし、帶刀のかくいひしは衞門の仕へをる二條殿の事にて、さて中將のさまをみんとて大將殿に來り、母が中將に申すさまを傍にて聞き居たりし之、
(四七)つまはじきをはた／＼とし　爪はじきは彈指、三一の一一に註せり、はた／＼とは指彈する形狀之、
(四八)君と申しながらも　君と申して朝夕御側に昵近しながらも、何となく心おかれてまばゆき御性質之とは知り玉はずやと之、
(四九)かのの給ひつる云々　御德見んとは其恩澤をうけんとの意、右大臣のいひし如く、中將を其聟として恩賞を受けんと思ふかと之、
(五〇)すこしよろしき人の云々　よろしきは尋常一樣といふ意なる事、一八の七、三の一等にいへり、通常の人は左樣なる鄙劣の心を持ちたるものなしと之、
(五一)なでふ御名だての落窪ぞ、　乳母が「落窪の君とつけられて」といふにつきていへる之、名だては憂き名だての意にて「名ヲレ」いふこと、拾遺秋「秋の野の花の名だてに女郎花かりにのみくる人に折らるな」新古春上、「うめがえに物うき程にちる雪は花ともいはじ春の名だてに」此他すべて名ヲレとして通ず、何として御名ヲレになる落窪ぞ、　落窪と申したりとて、決して御名ヲレにはならずと之、

（五二）君のおぼしたる事云々　即中將のけしきを見て帶刀甚心にはぢ思ふ之、
（五三）かやうの御心もたる人は云々　かゝる貪婪（むさぼる）心ある人は罪障深くして成佛したがたきもの之、故に猶改めずして又も左樣の事を思ひ言ふ事ならば、帶刀出家して母の爲めに罪障消滅を願はんと之、
（五四）いとほしとおもひながら　一方は妻を思ふより、落の肩を持ちていふならんなどいふ事はもとよりあるまじき事にて、左程にいふはいとほしき事ながら、あまりに帶刀が談じつくる故に其口を塞がしめんとてかくいふと之、妻のためよりといへばおのづからいひにくゝなるべければとて之、
（五五）御罪いといとほし云々、即ち罪障消滅を祈らん爲に自身出家入道せんと之、親の身上を子として心配せずしては居り難ければと之、
（五六）口からいとゆゝしき云々　くちからは、くちづからといふに同じ、自分みづからの口より法師とならんといふ事甚忌はしき事と之、さればその腋ばさみたる剃刀其わが出家させまじと思ふ念力にてうち折るゝ事なるべし、ためして見よと之、
（五七）君は更にどうじ給ふへきにも云々　中將の樣子斷然同意すべきさまにもあらず、其上吾が子もかくまでに止むる事なればと之不用とは即ち此緣談とゝのはぬよしをいふ、

［第四五節］
（一）御心のゆかぬ罪　心ゆかぬは、心に不愉快におもふ事、愉快得意なるを心ゆくといふ、心ゆかぬは其反對之、罪はこゝにては事柄といふ意、或は事故などいふ程の意に用ひたり、

中將の君は、女君（落）の〔樣子ノ〕例（平常）のやうならず思ひたるは、この事聞きたるなめりと思しぬ。一條におはして「御心（中）のゆかぬ罪（スマヌ事柄）を、聞きあきらめつるこそうれしけれ。」女君（落）「何事ぞ、」「右の大臣（おほいまうちぎみ）（中）の事なりけりな」との給へば、女君（落）「虚言（そらごと）（ウソノ「）」とて、ほゝゑみ（微笑）て居給へれば、

（一）物ぐるほし云々　物ぐるほしは三〇の五にいへり、みかどの御女とは皇女をば攝家等に賜はる事例あればいへり、
（三）人々とかう云々　後來をかけて言ふ詞、此後とも、何人の、いかやうの事申すとも決して無き事とおもはるべしと之、
（四）さ思はんもしたくづれたるにや　六帖「あだ人は下崩れゆきしなれや思ふといへどたのまれずして」此うたによりていへり、さやう思はんとせんにも、心のかはりゆかば何とかせん、詮なき事なるべしといへる之、
（五）思ひきこゆと云

「物ぐるほし（中）（シンキクサイ）。みかど（帝）の御むすめ賜ふとも、よも得侍らじ（決シテイタヾキマスマイ）。はじめ（最前モ申シ）も聞えし（タルガ）を、唯つらしと思はれ聞えじとなん思へば、〔スベテ〕女の思ふ事は、〔自身ノ外ニ〕又人まうくることをこそ歎くなれと〔カネテ〕聞きしかば、そのすぢは〔心ニ思ヒ〕絶えにたり。〔サレバ〕人々とかう聞ゆ（兎角ノ事ヲ申ス）とも、よもあらじ（決シテナイ「）とおぼせ」との給へば、「さ思はんもしたくづれたるにや」（落）といへば、「思ひ聞ゆ（中）と聞えばこそ、あやふしとものし給はめ。唯つらきめ見せ奉らじと聞ゆれば、志のありかは〔シリ玉ハン〕」など聞え給ふ。帶刀、衞門に逢ひて「更にな思ひ疑ひたまひそ（帶）。この世（現在ノ）には、御心憂かるべきにあらず」といふ。御乳母（めのと）〔帶刀ニ〕「いとほしく（キビシク）いはれて、又もうち出でず（復ビ言出サズ）。かの殿（右大臣）にも、かくおはしかよふ所ありけりと聞えて、〔緣談ノ「ヽ」〕おぼし絶えにけり」

々 即ち六帖の歌によりていへり、六帖の歌に、思ふといへどたのまれずしてとあり、故にもし思ふとわがいふ事ならば下崩れせんかともいはるべし、われは思ふなどはいはず、只つらき目みせじといふ事なれば、こゝろざしのある處は明かに知らるべし、決して疑ひ思はるべからずとなり、「志のありか」とは「志のあるところ」といふ意かは住處、寄處などのかにて在處なり、「ありかは」といひて「知り玉はん」の意を含めたり、
△帶刀衞門におひて云々 上文「君の御けしき今見ん」の應「かの殿にも云々此一段の收結、
(六)かく思ふやうに云々 かくの如く何思はしき事もなく平靜安泰にてつれそふと之、住むとは男女つれそひくらす事にいふ
(七)四月云々 四月大將殿の北の方云々 四月とは四月の賀茂祭をいふ、賀茂祭は當時いと盛なりし事なれば、四月棧敷にて物見るといへばたゞちに賀茂祭を見物する事となる之、
(八)大將殿の北の方宮達云々 宮達とは姫宮はじめ中の君などを合せいふより達といへり、姫宮は即ち女御なる大君の生み奉りたる姫宮之、棧敷は物見の爲に假に架け設くる見物場所にて、今いふ棧

かく思ふやうに〔五三〕のどやかに、思ひかはして住み給ふほどに、孕み給ひにければ、ましておろかならず。四月、〔ノ賀茂祭ニ〕大將殿の北の方、宮たち、棧敷にて物見給ふ〔べき〕に、中將の君に、「二條に物見せ聞え給へ。わかく物し給ふ人は、物見まほしくし給ふものを、おのれも今まで對面せぬ〔コノ〕心もとなきに、かゝる序に〔面會セン〕となん思ふ」と聞え給へば、中將いと嬉しと思ひ給へるけしきにて、「いかなるにか侍らん。人のやうに物ゆかしともし侍らざめり、〔サレド〕今そゝのかして參らせん」と聞えたまひて、二條殿におはして「うへはかくなんの給ふぞかし」と聞え給へば「心ちのなやましうて、あやしげになりたるも思ひ知らで、物見に出でたたば、我見えたらんに、〔人々ノ爲ニモ〕いとわりなからん」とて、物うげなれば、中將「誰か見ん。うへ、中の君こそは見玉ハメ、それまろが見奉るも同じ事」とて、しひてそゝのかし聞え給へば「御心〔シダイ〕」ときこえ給ふ。北の方の御文にも、

なほわたり給へ、をかしき見物も、今は諸共にとなん思ひ給ふる。

と聞えたまへり。〔此文ヲ〕見給ふにつけても、かの石山まうでのをり、〔我〕ひとり〔中ノ北ノ方ガ〕えり捨て給ひしも、思ひ出でられて心うし。一條の大路に、ひはた〔ブキ〕の棧敷いといかめしうて、御前にみな砂子しかせ、前栽うゑさせ、ひさしう住み給ふべきやうにしつらひ給ふ。曉に渡り給ひぬ。衞門、少納言、一佛淨土に生れたるにやあらんとおぼゆ。この君にいさゝか心寄せあらん人をば、

敷に同じさじきといふ名は、古の佐受岐よりいでたるものにて、佐受岐は紀記にみえ、紀には假庪の字をあてられ、庪は字書に歧と同字にして猗なりとみえ、假庪は假に猗せ作れるものにて即棧敷の事なり、此さずき轉じてさじきとなり、又さんじきと訛り、今は又さじきといへり、

(九)おのれも今まで云々 心もとなしは二四の三に註せり、こゝはオボツカナクして且モドカシキやうの意に用ひたり、

(一〇)物ゆかしとも云々 物ゆかしは物をゆかしがりなつかしがりてそれを見たがるをいふ、落の性來通常の人

〔中納言ノ北ノ〕ねたきものに言ひのゝしりしを、見ならひたるに、〔今ハ〕臺の御方の人たちとていたはり用意し給ふさま、いとめでたしと思ふ。乳母のおとゞ、さこそいひしか、出で來て、心しらひ仕う奉りて「いづれか惟成があるじの君」と、問ひありきて、若き人々に笑はる。母君は「何からうと〱しくは思ひ聞えん。おもふべき中は、むつましくなりぬるのみなん、後もうしろやすき」とて、うへや中の君など、おはする所に入れ奉り給ふ。〔落チ〕見給ふに、我〔三タ所ノ〕御むすめ、〔御孫ノ〕姫宮にも劣らず、をかしげに見ゆ。紅の綾のうちあはせ一襲二藍の織物の袿、羅の濃き二藍の小袿着給ひて、恥かしと思へるけしき、いとをかしうにほへり。姫宮は、實にたゞの人ならず、あてにけだかくて、十二ばかりにおはしませば、

の如く物見見物を好まずとぞ、

(一一)心ちのなやましうて云々 心ちのなやましげになりたるとは、妊娠の事をいへるぞ、妊娠したる身をも顧みずして見物に出でなば、見ぐるしかるべく、同席の人々のためにも不都合なるべしとぞ、

(一二)誰か見ん云々 うへ中の君こそはにて句を切るべし、母上幷に中の君こそは見もすべけれど、それは我が見るも同樣の事にて、その外には見る者あらじとぞ、棧敷には前に簾をかけおくものなれば、内よりは外を見るべけれど、外より内はみえざればぞ、

(一三)御心ときこえ給

まだいとわかう、いはけなうをかしげなり。中の君は、若き御心に〔落チ〕をかしとおぼして、こまやかに語らひ聞え給ふ。物見はてぬれば、御車よせて歸り給ふ。中將の君、やがて二條にとおぼせど、北の方、「〔今日ハ見物ノ坐敷〕さわがしうて、思ふ事聞えずなりぬ。いざ〔我ガ方ヘ來〕たまへ、一二日も心のどかにて語らひ聞えん。中將の物さわがしきやうに聞ゆるはなぞ。おのが聞えんことに隨ひ給へ。中將はいとにくき心ある人ぞ。な思ひたまひそ」とて、笑ひ給ひて居給へり。御車よせたれば、〔御車ノ〕くちには宮、中の君、しりには嫁の君と我と乘り給ひて、つぎ〱に皆乘り給ひて、中將殿皆乘り給ひて、〔御車〕引きつゞきて大將殿におはしぬ。寢殿の西の方を、俄にしつらひて、〔御車ヨリ〕おろし奉り給ひつ。御達の居どこ

ふ 御心のまゝに隨はんとの事、二三の七にいへり

(一四)見給ふにつけても かの石山詣云々 母北の方より此詣引の文を贈られしにつきても往事をおもひつゞけて心うくおもふ之、あはれなる事之、

(一五)一條の大路に云々 ひはだの棧敷は、檜皮葺の棧敷之、榮花初花に「一條の御棧敷の屋なが〳〵と作らせ給うて、檜皮葺勾欄などいみじうをかしうせさせ給ひて」などもみゆ、棧敷はもと其時に臨みて假初に設くるものなるが、やうやく移りて今の世にいふ物見の如く一ツの家屋として作りおく事となれり

ろには、中將の住み給ひし、西の對のつまをしたり。いみじくいたはり給ふ。大將殿も、いみじく思ふ子の御ゆかりなれば、御達にいたるまで〔チ〕いたはり騷ぎ給ふ。四五日おはして、いとなやましきほど過して、のどやかに參らんとて歸り給ひぬ」〔母北ノ方ハ〕まして〔落ニ〕對面し給ひて後は、哀なるものに思ひ聞え給へり。かくてたとしへなく、思ひかしづき聞え給ふに。君の御心は今は〔カハラジ〕と見給ひてければ、中將の君に聞え給ふ。「今はいかで殿にしられ奉らん、老い給へれば、夜中あかつきの事も知らぬを、見奉らでや止みなんと心細くてなん」と聞え給へは。中將殿、「さはおぼすべけれども、なほしばしねんじて、なしられ奉り給ひそ。知られて後は、いとほしくてえ北の方懲ぜじ、今少し懲ぜ

し之、されば今も此棧敷を建設けて、其裏面に砂子をしき、庭園をしつらへる之、

(一六)衞門少納言一佛淨土云々 一佛淨土は十疑よりいでたる語にて、闍浮人心亂、故偏讃二西方一佛淨土一とあるに依れど、こゝには相共に安樂の地につきたる事にいへり、

(一七)臺の御方の人たちとて 臺の御方は落をさしていふ、臺は臺盤所の義、夫人は臺盤所すなはち中饋をつかさどるものなれば之、後に御臺所、御臺などもいへり、衞門少納言など落の方の女房とて格別心づかひしていたはらるゝとそ、

んと思ふ心あり。又まろも、今少し人々しくなりて〔其上シラルルヤウニセン〕中納言は、よもとみには死に給はじ、」とのみいひわたり給ふに、つゝみてのみ過し給ふに、はかなくて年かへりて、正月十三日、いとたひらかに男子產み給へり、いと嬉しとおぼして、〔今アルハ〕若き人のかぎり〔ノミニ〕して、うしろめたしとて、男君の御乳母〔此殿ニ〕むかへ給ひて「うへなどのし給ひけんやうに、よろづ仕うまつれ」とて、あづけ奉り給ふ。〔乳母ハ〕御湯どのなどしゐたり、女君のうちとけ給へる〔有樣〕を見て、うべなりけり、男君のあだわざをし給はぬはと思ふ。御產やしなひ、我も〳〵とし給へれど、委しく書かず、思ひやるべし。唯しろかねをのみぞよろづにしたりける。遊びのゝしる。かくめでたきまゝに、衞門、いかで〔中

（一八）乳母のおとゞさこそ云々　おとゞは殿といふ事にて人を尊ぶときの稱呼に用ふるは常なり、されば乳母を貴みておとゞといひしが後には單に乳母の事をおとゞとのみもいふに至りし之、さて帶刀の母なる乳母は前にみえたるごとく落の事をいかゞしきさまにいひはせしかども、此處に出できて何かと心づかひ注意して落に奉仕すとゝ、心しらひは三〇の四にいひおけり、
（一九）いづれか惟成が云々　乳母はいまだ一たびも落に目見えせず、今日はじめてなれば、在合ふ女房達にかく問ふなり、臺の御方など言はず、惟成があるじの君といへるによりて笑はるゝ之、

〔納言ノ〕北の方に〔落ノ「ナ〕知らせばやと思ふ。御乳母は、〔彼ノ〕少納言〔折シモ〕子産みあはせたりければ、爲させ給ふ。これを寵しがり、かしづきものにし給ふ」

司召に〔中將他人ヲ〕引き超え中納言になり給ひぬ。藏人少將中將になり給ひぬ。〔父ノ〕大將殿は、かけながら大臣になり給ひぬ。左の大臣のの給ふ「かく子のうまれたるに、祖父、父よろこびをする、〔一ノ〕かしこき子なり」と申し給ふ。今はまして　おぼえはことに、花やぎまさり給ふ　衞門の督さへかけ給ひつ。中將は宰相になり給ひぬ。中納言〔方ニテ〕は、かく少將なりあがり給ふにつけても、三の君、北の方などは、名殘ありてだに、〔人ニ通フ上ハ〕時々〔ニツケテ〕涙ぐましきを、といみじう妬めども、かひあるべくもあらず」衞門の督、おぼえのまさり、我身の時になり給ふまゝに中納言殿を吹く風につけても侮りて懲じたまふ事しも多かれど同じ事のやうなれば書かず。」

（二〇）うしろやすき　うしろめたきの反にて、安心といふこと、
（二一）紅の綾のうちあはせ云々　うちあはせは袷の御衣をいふ、字鏡に、袷、未絮衣也、合乃古呂毛、又和太奴支、二藍は赤花と青花とにて染めたる色の名、但し重ねの色目にもいへどこゝは染色之、袿は婦人の上衣にて儀式の時は此上に唐衣裳を加ふる事なれども、今は祭見の事故小袿を着用するなり、小袿は唐衣に代用するもの、
（二二）いとをかしうにほひたり　にほふはカハユラシキ樣をいふ、二四の三一に註せり、
（二三）姫宮はげに云々　女御なる大君の生み奉る所大將の北の方には御孫之皇女にましますをもてたゞの人ならずとはいへり、あては貴くよし〳〵しきこと、一一の一七にいへり、
（二四）いざたまへ　いざ來給へといふ事をかくいへるは當時の通語之
（二五）中將はいとにくき心云々　戲れていへり、これ北の方の落と親しからんとての注意よりかく心やすきさまに戲るゝ意を示す、△上文「御心ざまいとよく」と對しみるべし、
（二六）つぎ〳〵に皆乘り玉ひて　今日祭見とて此棧敷に來りし人此他にも尚彼是あるべし、其人々次第に乘り、中將も乘車し、さて其車ども打つゞきて大將殿第に至る之、
（二七）御達のゐどころ　即ち衞門少納言など、落の方の御達之
（二八）四五日おはして云々　前に一二日も心のどかにて云々とありてこゝに四五日とあり、今日のさますべて此の如きをあらはす、倦いとなやましき程過してとは、妊娠の程を過してにて、即ち安産の後緩々參るべしとて辭し去る之、
（二九）まして對面し給ひて後は云々　前に「この人よげに物し給ふめり云々」とみえ、その後縫物よくする事を悦びし事どももみえて、深く母北の方に意に適したるさまをみる、さるに此たび對面してよりは別して深く

愛するに至れる之、
(三〇)君の御心は云々　落の心なり、斯く懇にいたはらるゝにつきて、中將の心をも今は全く知り、今は忘らるゝ如き事あるまじきを信ずるにつきて中納言に知られたしと思ふ之、
(三一)又まろも今少し云々　中納言に落の事を知らしめんには中將の猶官位昇進しての上にと之、是おのづから心に思ふところあるに依る、
(三二)若き人の限して云々　今此二條殿に奉仕してある人々はいづれも若年無經驗の者ばかりなれば、小兒の取扱氣づかはしと之、
(三三)男君の御乳母云々　即ち前に見えたる帶刀が母之、老人にてすでに中將を養育したる經驗もあれば、之を二條殿に召迎へて母北の方の子供を養育せしやうに總て取扱へと命ずる之、
(三四)御湯どのなど云々　生兒にゆをあみする事當時最緊要の事とし手重に行ひし事これかれにみえたり、
(三五)女君のうちとけ給へる云々　落の產屋にありて取繕はざる打とけ姿の猶いとうるはしきを乳母が見て、中將が他の女を顧みずして專ら落一人を愛するもげに最なりと思へりと之、あだわざは他の業にて、こゝには他の女を愛するをいへり、
(三六)御うぶやしない　うぶやしないとは、子生れて三日の夜、五日の夜、七日の夜など、緣故ある人あるじとなりて饗應する事にて之を產養といふ、中將倚望ある人なれば此產養を我も／＼と爭ひなす之、
(三七)唯しろかねのみぞ云々　產養の時贈進する種々の器具を白銀もて造れる事、うつぼ、榮花、その外多くみえたり、又產養の夜管絃を奏する事、ことにうつぼに多くみえたり、
(三八)御乳母は少納言云々　かの少納言此折柄恰も子を生みしに依りて、やがてそれを乳母として其乳にて生兒を養ふ之、
(三九)うつくしがり　寵愛すること、うつくしみ、うつくしむ、など活く詞、いつくしみあはれむ意、
(四〇)司召にひきこえ云々　司召の事は四一の一五にいへり、正月の司召に他人を超えて中納言になり、中の君の夫藏人少將も中將となれりと之、是實に大將の聟たるによりて之、
(四一)大將殿はかけながら大臣　かけながらとは兼ねながらとの事、すべて兼ぬるをかくといへるは當時の

詞づかひ之、下の衞門の督さへかけ給ひつとあるが如し、
(四二)かしこき子なり　かしこしといふに二樣の意あり、一は即ち賢の字にて「スグレタリ」、「リコフ」などいふこと、一は「ヨシ」といふ意なり、源氏若菜「風ふかずかしこき日なりと興じて」うつぼ俊蔭「かしこき夢なり」これら「ヨキ」といふ程の意にて、こゝに云ふも同じ、子は生れし子をさして云、
(四三)衞門の督さへかけ　右衞門督なり、右衞門はよみ聲「ゑもん」といふをもて、略して衞門と書く之、かけは兼ぬること前にいへり、さて以下中納言とかゝず、衞門の督といへるは、忠賴の中納言と區別せんがため之、
(四四)中將は宰相に　宰相は參議の別稱、參議は中納言と少納言との間に立ちて諸政に參與する職にて有才の人之に任ず、四位なれども上達部と稱し顯職之、
(四五)名殘ありてだに云々　藏人少將が今かく官職の進むにつけて、中納言方の北の方三の君などが思へること之、全くわが方へ絕えはつるといふ迄にあらず折ふしに通ひ來らんにてすらも、人へ通ふ上は時々につけて涙ぐましく心憂かるべき事なるに、まして全く絕えはてゝ、假にも來る事なきに於てはとて甚しく妬み腹だつ之、涙ぐましくは涙を催しやすきこと、
(四六)我身の時になり云々　時は時めくなどいふ時にて、其勢の盛なるをいふ、うつぼ藏開「いと時なる人々多くさぶらふなれば」大和物語「良少將といふ人いみじき時にてありけり」の類なり、
(四七)吹く風につけても　風は常にふくもの、平日何かの事につけてといふこと之、

又の年の秋、（落）また男君（男子ヲ）、うつくしう（平カニ）產みたまへれば、右の大臣（おとど）の北の方（母北ノ方之）「御產屋（うぶや）（御產所ガ）に、うつくしうも（平ラカニモ）、いそがしうも（セハシナクモ）取りつゞき給へる（ヒキツヾカル、コヨ）かな。この度は、こゝにあづかり〔養育シ〕奉らん」とて、御乳母具（ヲ具）

〔第四六節〕
(一)又の年の秋　初產の翌年にて初產は正月、第二は秋と之、うつくしうゝむとは安產をいふ、
(二)このたびはこゝに

云々　二郎をば母北の方の方に預りて養育せんとゝ
(三)帶刀は左衞門の尉にて藏人す　衞門尉は即ち檢非違使尉にて藏人すれば上の判官とて甚樞要なる職ゝ、枕草紙にげなきものゝ條「六位藏人うへの判官とうちいひて世になくきら〱しき物に覺え里人げすなどは此世の人とだに思ひたらず、目をだに見あはせでおぢわなゝく云々」とあるにても其職權の盛なるを知るべし、衞門督のひきによりて今此職を得たるゝ、
(四)かく思ふやうにて云々　衞門督の倚望はます〱盛に、夫妻の間はいよ〱親密に、

して〔生見テ右大臣方へ〕迎へ奉り給ふ。帶刀は、左衞門の尉にて藏人す。かく思ふやうにて、めでたくおはすれど中納言殿にまだ知られ奉り給はぬことを、〔落ハ〕飽かずおぼす、中納言は、老いぼれ給へるうへに、物思のみして、をさ〳〵出でましらひ給ふこともなく、つく〴〵と入り居給へり。落窪の君の〔母女王ヨリ〕傳へ得給へりける家、三條なる所にて、いとをかしかりける。〔ガアリシヲ〕、〔曾テ〕落窪の君になん取らせたりけるを、「今は世になくなりにたれば、我こそ領ぜめ」との給へは、北の方「さらなる事、〔タトヒ〕世にいきたりとも、さばかり〔ノ身分〕にはあらざらまし。我子達我等が住まんに、いと廣う〔テ都合〕よし」といひて、二年出でくる庄の物を盡して、築地より始めて、あたらしくつき廻して、

大日本圖書株式會社

男子は二人迄も引つゞきて生れ、帶刀さへかく樞要の職を得て衞門夫婦の勞に報ゆる事を得、何事も思ふ十分にていさゝか不足なけれども、落の心は中納言に知られざる事を嘆かはしく思ふゝ、是畢竟孝心の深きによる、
(五)落窪の君の傳へ得給へりける家　即ち落が母女王の御父なる親王よりうけ傳へたる第宅にて、中納言はこゝに通ひて落をば設けしゝ、女王身まかり玉ひしかば落をば中納言の家に迎へて養育せしかど、もとより落の所有すべきものなれば、之に與へしゝ、
(六)今は世になくなり云々　落の行方わから

ふるき〔モノ〕ひとつ〔トシテ〕まじらず、これを〔何事ヨリモ〕大事に作らせ給ふ。」

かくて今年も賀茂の祭、いとをかしからんといへば、衞門の督の殿、さう〴〵しきに、御達に物見せんとて、かねてより、御車あたらしく調じ、〔見物スル〕人々の裝束どもたびて、よろしうせよとの給ひ、いそぎて、その日になりて、一條の大路の打杭うたせ給へれば、今はとて誰ばかりかは取らんとおぼして、のどかに出で給ふ。御車五輌ばかり、大人二十人、ふたつは、童四人、下仕四人乘りたり。男君具し給へれば、前驅、四位五位いと多かり。弟の待從なりしは、今は少將、童子におはせしは兵衞の佐。諸共に見んと聞え給ひければ、皆おはしたりける車どもさへそはりたれば、二十あ

大日本圖書株式會社

ずなりければ、中納言の所有とせんとなり、領ずるは我が有とすること、
(七)さらなる事　言ふもさらなる事の略語にて今勿論の事といふ意、
(八)二年出でくる庄のもの　庄は其領分の庄園をいふ、領分なる庄園より收入すべき入額所得の二年分丈を費やして建築に着手するなり、
(九)築地よりはじめて　築地は築墻にて土と板とを築き重ねて作りし墻の名、築地をはじめ家屋一切すべて舊物を用ひず、全く新規に建築と之、
(一〇)さう〴〵しきに云々　さう〴〵しは寂

まりひきつゞきて、皆次第どもに立ちにけりとて〔衛門督〕見おはするに、我〔榜示〕杭したる所の向ひに、ふるめかしき檳榔毛〔ノ車〕ひとつ、網代〔車〕ひとつ立てり、御車ども立つるに、〔臨ミ〕「男車の交らひも疎くはあらで、したしう〔スル人同志ナ〕たてあはせて、見わたしの北南に立てよ」との給へば、「この向ひなる車、少しひきやらせよ。御車たてさせん」といふに、しうねがりて聞かぬに、「誰が車ぞ」と問はせ給ふに、源中納言殿と申せば、君「中納言のにてもあれ、大納言にてもあれ、かばかり〔場所〕多かる所に、いかでこの打杭ありと、見ながらはたてつるぞ。少しひきやらせよ」との給はすれば、雜色どもよりて、車に手をかくれば、車〔ニ附添〕の人出で來て「など、このまうどたちのかうはする。いたうはやる雜色かな。がうけ立つ

々しなる事、一〇の一九に云へり、かはりし事なく物さびしければ、女房達等多人數の人々に祭見物させて樂まんと之、
(一一)かねてより御車云々　祭見物のため、前かたより乘るべき車を新調し、又見物にゆくべき人々に衣服を新しく賜はると之、
(一二)一條の大路の打杭　祭見物は棧敷にても、又は車にてもする事之、此度は車にてする事故、その車を立つべき場所をかねて定めおきこゝに杭を立て、誰の車を立つるといふを示しおくにて即ち傍示杭なり、賀茂祭は殊に雜沓する事なれば、かくなしおかざれば、

る我殿も、中納言におはしますなり。一條の大路も、皆領じ給ふべきか。がうはふなり」とて笑ふ。「西東齋院も恐ぢて、よぎ道しておはすべかなるは〔我が殿ハ〕」と。口あしき男又いへば〔汝が主ト〕おなじものと、殿をひとつ口にな言ひそ」などいさかひて、えとみにひきやらねば、男君達の御車ども、まだえたてず。君御前の人、左衞門藏人をめして「かれおこなひて、少し遠くなせ」との給へば、近くよりて、ただひきにひきやらす。〔源中方ニハ〕男どもすくなくて、えふとひきとゞめず。御前三四人ありけれど「益なし、このたびのいさかひしつべしや。只今の太政大臣の尻は蹴るとも、この殿の牛飼に、〔デモ〕手觸れてんや」といひて、人の家の門に入りて、車をたてり。車の中なる人〔恐レテ〕はつかに見出して見る。よそめは様

場所を得ること能はざれば之、
（一三）御車五つばかり云々　五つの車に大人二十人、二つの車に童四人下つかへ四人といふにて一車四人づゝなり、五つの車のうち二つの車にといふにはおらず、
（一四）弟の侍從なりしは云々　前に「二郎は侍從にてあそびをのみし給ふ三郎は童にて殿上し玉ふとあり、それをいふ之、さて此句後段の伏線、
（一五）わが杭したる所の云々　督の傍示杭を立てたる前面の方道を隔てゝの向に二輛の車立てるなり、
（一六）檳榔毛、網代　びらうげ、びりやうげ、

おそろしきものに、世に思はれ給へれど、實の御心はいとなつかしう、のどかになんおはしける。「いと無徳なるわざかな。今はいかゞいらふべき」などさだむるに、この典薬の助といふ癡者の翁〔此中ニ〕ありければ、「いかでか、〔彼ガ〕心にまかせては〔我ガ車ヲ〕引きやらせん」といひて、歩み出で、「今日の事は、もはら情なくはせらるまじ。打杭うちたる方に〔我ガ車ヲ〕立てたらばこそ、さもし給はめ。向に立てたる車を、かくするは何ぞ、後の事思ひてせよ、あたせん」と癡者のいへば、衞門の尉、典薬と見て、年頃此奴にあはんと思ひしに、うれしと思ふに。君も又典薬と見給ひて「惟成、それはいかにいはするぞ」との給へば、〔惟成〕こゝろえて、はやる雜色どもに目をくはすれば、走りよ

共に檳榔毛車をいふ、蒲葵の葉を細かにさきて糸の如くし、これにて車蓋をおほひし車なり、網代車は檜の片木板にて網代の如く編みたるものを張りし車なること前にいへり、
（一七）男車の交らひも云々　車を立つる際に臨みて督の指揮する詞なり、男車をば見わたしの向の北南に立てよ、其立てかたは交はり疎からず親しくする人同志か互に相並ぶやうに注意して立てよとぞ、
（一八）しうねがりて　しうねしを更に活かしいへる詞、しうねしは執念深しなる事は已にいへり、しうねがりては、こゝにてはイヤ

りて「後の事を思ひてせよと翁のいふよ、殿をばいかにし奉らんぞ」とて、長扇をさしやりて、冠をはたとうちおとしつ。髻はちりばかりにて、額はげ入りて、つやつやと見ゆれば、物見る人に、ゆすりて笑はる。翁〔赤面シテ〕袖をかづきて惑ひ入るに、さとよりて、一足づつ蹴る「後の事いかでぞある〳〵」と、心のかぎりしつ。翁「死ぬべかなり」と言へど、〔止メズ〕責むれば、〔ハテハ〕息音もせず。君、まなまなとそらせいしをし給ふ。いといみじげにふみ伏せて、車にかけて引きやるに、男ども見懲りて、おぢわなゝきて、え車につかず。よそ人のやうに、さすがに添ひて〔督方ノ雜色源中ノ車ヲ〕他の小路にひきもて來て、道なかにうち捨てゝいぬる時にぞ、からうじて、〔カノ〕男どもより來て、轅もたげたる、けしきいとあしげなり。

大日本圖書株式會社

〳〵シガルなどの意にいへり、
(一九)など此まうどたちの云々　まうどは眞人にて、もと人をあがめていふ詞なるが轉じて今オマヘといふ程の詞となる、源氏帚木「此姉君やまうどの後の母」宇治拾「まうどはいかで幼き者をかくはする」「まうどたちは」即ち「オマヘタチ」なり、はやるは今いふと同じく短慮粗忽の意、
(二〇)がうけだつる我殿も云々　がうけは豪家の字音より成る語にて轉じては豪氣といふやうの意にも用ふ、源氏薄雲「がうけにことませて人の患となる事もあるを、うつぼ祭使「親ある人の身のさえ

北の方よりはじめて、乘りたる人〔車ニ〕「物も見じ、かへりなん」と、牛かけてうちはやめて、おひ惑ひ歸てれば、いさかひしける程に、〔看ノ雜色共〕一の車のとこしばりを、ふつ〳〵と切りてければ、大路中にはくとひき墜しつ。下﨟の物見人ども、〔コレヲ見テ〕わなゝきさわぎ笑ふ事かぎりなし。車の男ども、足をそらにて、まどひたふれて、ふともえかゝげず「出で給ふまじき〔惡日〕にやありけん。かくいみじき耻の限を見る事」と、つまはじきをしつゝ惑ふ。乘りたる人の心ち、唯思ひやるべし。皆泣きにけり。中にも北の方、むすめども〔ヲ〕ば、口の方に乘せて、我は後の方に乘りたりければ、こよなき横がみより〔箱ヲ〕引き落しけるに、〔牛ハ〕ながえばかり〔ヒキ〕出でたりける。辛うじて〔箱ノ中ニ〕這ひ乘りにけれど、〔落ルトキ〕肱つきさそ

もなくてがうけを頼み」こゝのがうけなども共に豪氣の意之、豪家だつるは豪家がるといふ意豪家なりとて誇る汝の主人も我等が主とする所と同じく中納言之、大納言大臣にはあらずと之、我殿は汝が主といはんが如し、
(二一)かうはふなりとて　濱臣云、律令などの強法の字なるか、秋云、法を強ふとの事にて、即ち法を犯すにいふ無法などいふ詞之、
(二二)西ひんがし齋院も云々　督方ノ人の詞之、西は院を申す、則仙洞なり、東は東宮、齋院は賀茂齋院にて内親王、又は女王にて賀茂の奉祀を主らせ玉へるをいふ、よぎみちは

こなひて、をい〳〵と泣き給ふ。「いかなるものの報に、かゝる目見るらん」と泣き給へれば、御むすめども「あながま〳〵」との給ふ。からうじて、御前の人々たづね來て、見るに、かゝれば、いみじと思ひて、「胴かきすゑよ」とおこなひ出でたるに、皆人々「いと無德にある御車のぬしたちかな」とわらふ。いと耻しうて、さわやかにもいはぬに、面を見かはして立てり。辛うじて舁いすゑてやるに、北の方「あら〳〵」と惑ひ給へば、ねりつゝやる。辛うじて殿におはしたり。」

御車寄せたれば、北の方人〔ノ肩〕にかゝりて、唯時の間に、〔目モ〕泣き腫れており給ふを「なぞ〳〵」と驚き給へば、かう〳〵、しかありつるよしを語り申せば、中納言、いみじと思したる事限なし。「い

大日本圖書株式會社

道を他に避くる事、仙洞はじめ御心をおかせらるゝとの意
(一三)同じものと云々　又督方の内の一人がいふ詞之、同じく中納言といふとも、其方の主の中納言と我殿とを同じものと一口に言ふな、大なる差別ありと之、
(一四)近くよりて云々　爭論に拘らず、力もて引き去らしむる之、されば源中納言の車には附添へる者も人數少ければ、抵抗する事叶はざる之、
(一五)人の家の門に入りて　中納言方の供人、その所詮抵抗すべからざるを知りて督方の人の車を引去るに任せてやがて人の門内に

みじき恥なり。我法師になりなん」との給へども、かつは〔妻子ノ〕いとほしうて、えなり給はず。世の中に、この事をいひ笑ひのゝしれば、右の大臣聞き給ひて、「まことにや、しかじかはせし、女車を、情なくしたりといふなるは、その中に、かの二條のものゝ〔ナシタル「ナリ」〕と聞きしは、いかに思ひてせしぞ」との給へば、衞門の督「なさけなしと、〔世間ノ〕人の言ふばかりの事もし侍らず。打杭打ち立て侍りし所に、車立て侍りしを、男ども、所こそ多かれ、こゝにしも何故立テシといひ侍りしを、やがてたゞいひにいひあがりて、車のとこしばりをなん切りてはべりける。さて人打ちけるは、それが無禮にいひたりしを、にくさに、冠をなんうちおとして、男ども〔ガ〕引きふせ侍りし。おのづから少將兵衞の佐も〔眼前ニ〕

入りて車を立てたりと之、
(一六)車の中なる人云々　何とも言はず、只管おぢ怖れて、督方の人に引去られながら、竊かに之を見るのみなるを云ふ、はつかは僅にて、こゝにてはソットといふ意に用ふ△默然として怖れたるさま思ひみるべし、
(一七)よそめは云々　督のさまを草紙地よりいふ、よそめとはよそより見うけたるさまといふ事にて、即ち外見之、衞門督のありさま外見よりはいかにも勢猛くおそろしき人のやうに世間にては思へども、其實は性質仁惠ありて寛大の人と之、△是又道賴の人物を描く

見侍りき。いと人〔ノ中如ク〕ものしと言ふばかりの事も、し侍らざりき」との給へば、「人のそしりな負ひそ。さ思ふやうあり」との給ふ。女君は、〔中納言ノタメ〕いとほしがりて歎き給へば、衞門、さばれ、いたくな思しそ、あいなし、おとゞのおはせばこそあらめ。典藥がうたれしは、かのしるしにや」といへば、女君「いと胸さがなかりけり。我が〔方ノ〕人にはあらで督の君の〔方ノ〕人になりね。それこそかくものは、しふねく思ひいへ」との給へば衞門「さは〔督殿ヲ〕あが君と〔シテ〕仕う奉らん。衞門が思ふ限の事をせさせ給へば、實に御前よりも、寶の君となん思ひ奉る」といふ。あの北の方は、いみじう病みふしけり。御子ども集りて、願だてなどして、やめ奉りてけり。」

もの、

(二八)いと無徳なる云々　無徳ハ「詮ナシ」「甲斐ナシ」などの意なる事已にいへり、今はいかゝいらふべきは所詮返報すべきにあらずとあきらむる詞、何ぞ返答せんといふにはあらず、無徳なる云々以下の語氣に依てしるべし、

(二九)今日の事は云々　もはらは專にて「一向ニ」「一途ニ」などの意、今は音便にて「モッパラ」といへり、後の事思ひてせよは、後來の事を顧みて爲せとの事之、

(三〇)惟成それはいかに言はするぞ　言はするぞの詞に着眼すべし、即ち言はすべからず、懲しめよの意、さればこゝろえてとはいへり、

(三一)目をくはすれば　目を食はすにて、今いふ眴なり、メクバセ目食ハセなり、目をもて心を知らしむること、

(三二)髻はちりばかりにて　塵ばかりはその甚すくなきをいふ、

(三三)翁袖をかづきて　かづくは被るをいふ、群集の見物人に笑ひたてられ、赤面して、袖を被りて去る之、

(三四)さとより來て　さとはすべて急にしかるさまを形狀していふ詞、源氏浮舟「おもてさと赤めて」枕草紙「さと一度に笑ひ」同 嵐のさと吹當りて顔にしみたる云々」颯と之、督方の雜色颯と一度に集り來て、多人數の者か一足づゝ各典藥を蹴なから、後の事といひしを咎むる之、

(三五)翁死ぬべかなり云々　典藥多人數に蹴られて今は死にさう之といへどもゆるさゞれば、終には聲音も立て得ぬ迄に至る之、息音は聲音之、全く息なしといふにはあらず、

(三六)君まな〱と云々　まな〱はまざ〱と同じまさ〱は正々にて眞實らしくといふこと、雜色の打寄て典藥をくるしめたしなむるを督は之を見て眞實らしく虛制止をする之、そら制止は表向はかりに之を止め制するさまをなす事、

(三七)車にかけて引きやるに云々　典藥をあくまで踏伏せて弱り果てたれば、やがて之を車に投げ込み、雜色共手を以て車を引きやるに、中納言方の男ども此勢に辟易して、車の處に寄來らず、他のよ物人の如くよそにみるものゝ、さすがに車の行く方に隨ひゆくと之

(三八)他の小路にひきもて來て　二輛の車の內、北の方などの乘りたる一輛はすでに引やられて、人の家の門の中に立たしめられ、後の一輛即ち典藥などがのりたる車、今かく引やられた大道中に捨られたる之、

(三九)からうじて男ども云々　督の雜色去りしにより、見えがくれに附添ひ來りし中納言方の男共はじめて車に寄り來て、土におかれたる轅をもたぐる之、車は牛をはづす時は轅に榻を枕せしむる事なれども、今はかゝる際の事なれば、もとより榻をもあてず、榻をあてねば車の箱前に傾きて車中の人乘るにたへがたければ轅をもたぐる之

(四〇)牛かけて打はやめて云々　祭見など車を立つるには、牛をばはづして轅に榻を枕せしめおく事なれば、今歸らんとする故に、はづしおきつる牛をかくる之、

(四一)一の車のとこしばり云々　和名抄、轉、車下索也、度古之波利、在車下與輿相連縛者也、とみえて、輿すなはち車箱を車に結ひつくる索の名、一の車は即ち北の方などの乘りたるものにて檳榔毛の方なるべし、彼の爭論中、督方の雜色どもこれが轉を切り置きしかば、今牛を早むる拍子に車箱車を離れて大路に落ちたる之、

(四二)大路中にはくとひきおとしつ　はくとは其おつる狀、今バタといふが如し、落の部屋にこめらるゝところに「はくりとついすゑられて」とあるはくりに同じ△秋成本其他「はたと」とあり、又次の「下臈の物見の下「んと」とあり、今田本根岸本に從ふ、

(四三)下臈の物見人ども　わなゝきは其笑ふさまの尤甚しきをいふ、

(四四)こよなきよこがみより云々　和名抄、軸、與古加美、持輪者也、とあり、即ち車輪の心捧なり、車箱は轉もて軸に結ひつくるものなれば、轉を切りたるにより軸より墮つる之、こよなきは　濱臣云、高き所より落しを云ふと、秋云此說いかゞ、こよなきはすべて殊の外たがへるをいふ詞なる事二五の四に註せるが如し、

(四五)ながえばかり云々　車箱は軸よりすべりて後ろの方に墮ちたれば、牛は轅のみを引きて前面に進めるなり、

(四六)辛うじて這ひ乘りにけれど、車箱のおつる拍子に、北の方は後に乘りたる故車箱よりあまされて、路

の上に投け出されたるゝ、されば、とりあへず、先其車箱中に入るゝ、乘るは入る事にて、此時車箱は路上におとされわるゝ、○さてこよなきよこかみ以下、諸本皆此の如くなれども、中にも北の方云々の文脈をおしてみるに、此間に車箱のおつる時あまされて北の方の箱外に投出されたる事脱したるなるべくおもはる、さらでは辛うじて這ひ乘るの文ゆくりかにして聞えかたき心地すれば之、
(四七)わながまく〳〵　わなかまは、わなかまびすしの畧語、當時一種慣用の詞之、蜻蛉日記「やう〳〵醉過ぎてわなかまやなといふ聲きこゆる」うつぼ嵯峨院わなかまやきゝにくし」例いと多し、
(四八)からうして御前の人々牛を車にかくるまゝに追ひ走らして去りたる故御前の人々はおくれたるが、此騷ぎに躑躅してあるほど追ひ付きたるゝ、△これらの筆全く實地のさまより書けるもの、作りものがたりとはおぼえず、
(四九)面を見かはして立てり　姫君たち北の方とも、車箱の内におりけるが、胴即ち車箱を舁きすうる時箱よりいでゝ路頭にたてるなり、△一々くだ〳〵しく言はずして文勢によりて志らしむるところ手練の筆味ふべし、○此段衆中に於ていたく女車をはづかしめ、且典藥を甚しく懲しめ、志かも鞅を切りて車箱を覆らしめ、耻辱の上に耻辱を與へたるさま、源中納言の男ども最初の程は口論せしかども、督の雜色の勢力に恐れて竟に一言をも發する事能はざるに至りしさま、北の方耻辱の限をうけしが上に毀傷をさへおひてえ堪へず泣きいだしたるさまなど、讀みゆくまゝに直ちに其聲を聞きて、親しく其狀を見るが如き思ひあらしむ、何等の老筆ぞや、
△なぞ〳〵と驚き給へば云々　語勢味ふべし、意外に早く歸り來り且其樣の怪しければは、驚き訝るさま卒然なる語勢に於ておのづから知らる、
(五〇)かつはいとほしうて　且はすべて物事の兩端にかゝる時におく辭にて一方にはといふが如き意味あり、こゝも法師になるべく思へども、一方には殘らん妻子の事を思ひて果さずと之
(五一)その中にかの二條の者のと云々　二條の者とは、二條殿に奉仕する者との事にて惟成はじめ御前の人々をいふ、女車を情なく取扱ひしといふは二條に居る者どもと聞くは何故に然せるにかと之、
(五二)おのづから少將云々　自己の陳述の虛誕ならぬを證する詞之、少將兵衞佐も親しく見たる事なれば、御尋ありても我申す通りの事なるは明かなるべしと之、

(五三)いと人ものしと言ふ云々　ものしは、機嫌わしく、氣に入らぬさまをいふ詞なれど、轉じて不都合といふやうなる事にもいへり、こゝの如し、さていと人云々は、人の申すごとくいと不都合といふべき程の事にてはわらずとの意
(五四)あいなし　あぢきなし之、一三の一見合
(五五)胸さがなかりけり　今「根性ワロシ」といふ程の詞、
(五六)寶の君　大切の御主人といふこと、榮花、花山「中納言は守宮神かしこ所の御前に伏まろび給ひて、我寶の君はいづこにかおからめさせ給へるぞやと云々」大鏡　翁わがたからの君におくれ奉りしやうに物悲しく思ひ云々」
(五七)願だて　神佛へ願を立てゝ病氣平癒を祈るをいふ、

吉田高等女學校
圖書
第70號
受入
21年5月5

落窪物語大成二の巻　終

聖和學園短大
第7911號
受入
昭37.6.5

明治三十四年發兌

大日本圖書株式會社